

大津市歴史博物館調査報告書 9

大津百艘船万留帳 5

令和七年（二〇二五）三月

大津市歴史博物館

刊行にあたって

大津市は、明治時代末年の『大津市志』の発行以来、数十年に一度、時代の要請に応じて市史を編纂してきました。その度に多くの古文書・歴史資料が調査され、その歴史情報が蓄積されてきました。

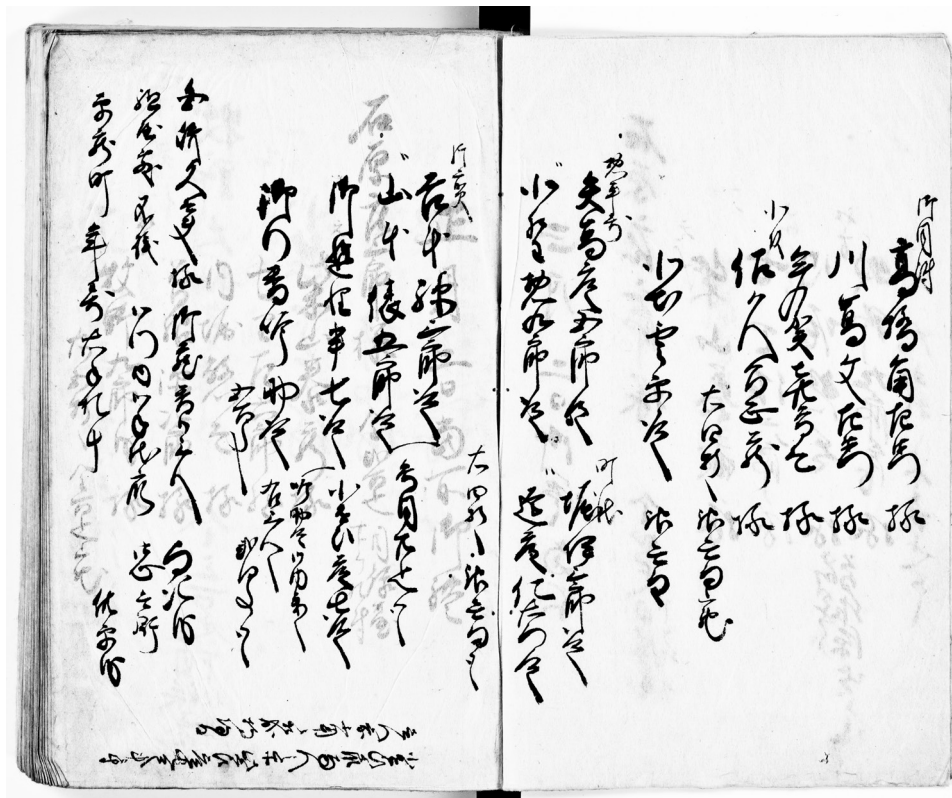
現在、市史編纂事業を引き継ぐ大津市歴史博物館では、館蔵・個人蔵を問わず、貴重な文化財の調査を通じて歴史文化の情報を発信しています。その中で、以前より有志の市民の方々のご協力のもと、古文書・歴史資料の調査・解読を進めてきましたが、令和三年（二〇二一）度よりその成果報告書を順次発行してきました。

この報告書では、これまでに引き続き、江戸時代に琵琶湖水運の中心的役割を担った船持仲間「大津百艘船」によって記録されてきた「万留帳」のうち、文化六年（一八〇九）から同八年（一八一二）までの分をまとめました。これら留帳には、大津百艘船が対応した事案や物流の様子、大津代官や京都町奉行の要人との折衝、また寺社との贈答関係など、大津百艘船の活動が詳細に綴られています。

なお、最後になりましたが、本書の発行にあたり、解読・校正において大津古文書輪読会の皆様に多大なる御協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

令和七年三月

大津市歴史博物館



「万留帳」文化6年



「万留帳」文化8年（目録部分）

一、「万留帳」文化六年（二八〇九）

（表紙）

巳 文化六年

万留帳

己 正月吉日 八拾四

（本文）

目録書奥二有之、

正月二日、御礼当所

石原庄三郎様

金貳百足

目録台
下ヶ札付

元々

柴山泰蔵様

七里佐六郎様

御町懸り

御町懸り

内堀繁太様

曾根源次郎様

船方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ金百足ツ、

御目附

高橋角左衛門様

川寫文左衛門様

多賀喜曾太様

小頭

佐久間正蔵様

右四軒へ銀壹匁宛

北出雲平殿

銀壹匁

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

町代

堀伊三郎殿

〃

小野惣九郎殿

〃

遠藤仁右衛門殿

右四軒へ銀壹匁ツ、

肝煎

吉本孫三郎殿

〃

山本俵五郎殿

鳥目廿足ツ、

御足輕半七殿

小遣ひ藤七殿

吟助殿御内義へ

右三人へ貳百文ツ、

御門番吟助殿五百文

白崎久太夫様、御蔵番御三人

与次兵衛

組屋敷不残、御門内御手代衆

忠兵衛

平蔵町年寄、右手札計

供平兵衛

（下に横書）

「小遣ひ衆兩人之所、此節藤七殿計二付、壹人前不用二相成持歸る、」

正月三日、京都御礼

西御奉行

牧野大和守様

金三百足

目録台

下ヶ札付

御用人

小熊三郎右衛門様

香西伴助様

神山善太夫様

中村重右衛門様

御勝手御用人

十九浦九十九様
御取次兼帶

香西宗吉様

御取次

嶋田政右衛門様

田岡野大助様

横溝市右衛門様

大野万左衛門様

✕拾軒へ銀壹両ツ、

御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様

熊倉政吉様

右五軒へ金百足ツ、

同御下

上田八蔵様

柏原治部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

酒井惣助様

山田傳左衛門様

平川伴蔵様

浅賀和作様

右七軒へ銀壹両ツ、

東御奉行 森川越前守様御代り

小長谷和泉守様 金三百足

目録台
下ヶ札付

一、旧冬被蒙仰未御登りハ無之候得とも、定例之通年頭御受有之、西様
同様順列ニ御玄関ニ而申置ニ相勤候、尤御用人御取次ハ御登り無之
故相勤不申候事、

御公事方

上田弥右衛門様

山田釵次郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

右へ金百足ツ、

同御下

中川左左衛門様

同宗右衛門様

櫛橋平蔵様

喜多尾八郎右衛門様

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

右九軒へ銀壹両ツ、

上町代

田内与助殿銀貳両

奥田九右衛門殿銀壹両

下町代

藤沢傳六殿貳百文

東西御門番三百文ツ、

〃

藤村佐市殿貳百文

宿鍵屋下女へ貳百文

上町代中へ五百文

山科大津屋孫兵衛へ百文

下町代中へ五百文

宿鍵屋左介へ三百文

小番へ三百文

東西中番中へ三百文ツ、

追分丸屋四郎兵衛へ百文

右之通孫右衛門、庄兵衛相勤ル、とも五兵衛、荷持やとひ和介

×金五両貳歩 但し大津とも

銀壹 三十六

銀貳両 壹ツ

五百文 三ツ

貳百文 九ツ

三百文 四ツ

百文 六ツ

一、正月十一日、例年之通帳固在之、役人出勤之事、

附り、不相替尾花川惣代并上下惣代、関舟次兵衛、坂本新兵衛

右如例献酒持参之事、

一、旧臘廿五日、京都より包材木三本持出し尾花川迄参、際川吉兵衛方へ
ハ是より道法何程候哉与右人足之もの共相尋候付、同町善六義客候
者、際川へハ廿町計有之候、右材木ハ何方行二候哉与尋候所、人足

之もの答候者、我々者際川吉兵衛着之相對にて持参り、何方行と申
義者不存旨申候趣、右善六義町内船屋忠兵衛方へ為相知候段、右忠
兵衛の年寄次郎左衛門方へ^{被申}差懸り候義二付、忠兵衛、次郎左衛門
申談し、尾花川町舟方惣代弥兵衛を際川吉兵衛方へ遣し様子相尋さ
せ候処、吉兵衛家内之もの答候二者、右材木者^{比數}ひへ辻迄持参り候筈
之所、右人足之内足痛難参候間、預り置呉候様被相頼預り置候迄にて、
委敷義者不存旨申之候二付、右弥兵衛申候者、拙者者百艘^被差越
候間、吉兵衛殿歸宅被致候ハ、早速百艘舟会所へ可被参、勿論百艘
方かけ合済候迄者、右材木何方へも不遣、爰元二急度預り置可被申
と申置、夫の弥兵衛際川善四郎方へ参始末相語、百艘之訳立不相済内、
自然右材木外へ遣候様之義有之候ハ、夜中たり共早速百艘内へ注
進致被呉候様と相頼置、弥兵衛義者罷歸り候、

一、翌廿六日、吉兵衛忤吉次郎当会所へ参り次郎左衛門逢候処、昨日之
材木ハ親共并私義留主中二持参り、家内之もの預り置候義にて、私
共親子ハ何之様子も不存候へとも、親共之義木濱村出生二候故、是
迄木濱村之衆京参り等被致候節者、私方迄歸二て被参、右歸等私方
へ預被置候義俣有之、当御霜月二被致参詣之節、品二^少少^キ塗物京
より持歸り申度旨被申聞候故、代呂物二より当所の船積難成訳申聞
置候二付、其後持参り不被申候所、昨日右材木持越候故、定而木
濱衆船方へ持出させ申候哉与存、則木濱へ尋二遣し置候義にて、何
事も様子不存旨被申候二付、次郎左衛門の申聞候ハ、縦令人足如何
体二相頼候とも、其元二心当り無之代呂物を預り置被申候謂者有間
敷、勿論昨日家内之衆、ひへ辻行二候へとも人足のもの足痛難参候
故預呉候様被相頼候与、偽り被申候段旁以疑敷候故、此上者居村
之役人衆并坂本船中間へも相達し、右相分り候迄者当浦より其元歸
二ハ小便こへ等も為積不申旨申聞候処、左様相成候二者甚以難済仕

候、尤木濱へも尋二遣し置候事故、是悲^(悲)今日者木濱^方被參可申候へ者、被參次第早々召連參可申候間、夫迄御猶預^(予)可被下与相詫候故、及月廻諸方へ相達し候義相互二迷惑二も候事故、何れ明春相調へ候間、夫迄ハ右材木其元二急度差置可被申、万一訳立不濟内二外へ被遣候へ者、用捨不致旨申聞置候、

一、同夕方、木濱村多助、利助、際川吉兵衛同道二て参り、木濱之兩人申候二ハ、右材木者赤井御坊後門之柱并平物二て塗もの二候故、講中共申候者、舟中二て浪濡損し等有之候而者不宜間、村之人足を以堅田迄持出し、夫より船積二て引取候様可致与申二付、京都^方際川吉兵衛方迄差出し置、村之人足を以堅田へ持越申度段被申候故、次郎左衛門^方申述候ハ、右体持越舟積二相成候而者当浦法難相立候故、何分浦法相立不申内ハ、難為積引取旨委細申為聞候処、随分御尤二存候間罷歸り講中共へ申聞候様可仕与申之被歸候事、

一、其後返答二も不被登候へ共、月廻之日柄故其尽二差置候処、当正月六日赤井御坊講中之内木濱村利助、矢嶋村喜兵衛并際川吉兵衛又候被參、旧冬被仰聞候御浦法之義、講中共不案内之事故右之仕合二候間、此段御用捨被下如何様共御浦法通御差図被下、右材木引取候様可被成下与被申候、且堅田伊勢屋三右衛門方へも、前以其段相頼被置候義相違無之義二付、中間相談之上、川口七兵衛、舟屋忠兵衛兩人際川へ被參、木品寸間相改候所、駄数七駄別在之故、乗前銀四匁九分受取、赤井舟を以被積取候様申付置候事、

但し坂本領^方其俣為積候義者、浦法二背ケ候二付、川^方南此方之積場へ引取為積候故、此段坂本舟方へも吉兵衛直々かけ合候様申聞置候付、則同人よりかけ合無故障候故、赤ノ井舟二て積取被申、右二付吉兵衛^方ハ左之通一札取置候事、

一札

一、旧臘廿五日、京都より私方迄包材木三本持出し候二付、早速様子御尋御座候所、私共兩人とも其節者在宿不仕家内計之処江、右材木者木濱村衆際川迄差出候様被申候旨右人足之者申之、尤木濱出生之私義故、家内共何之無心付預り置候義二て、私共迎も出生行所等も不存候故、木濱村へ尋遣し候二付、木濱村利助、矢嶋村喜兵衛兩人御会所へ罷出、私共義ハ赤ノ井御坊講中内二有之、右材木者則御坊御用木二而、海上之間無少無難二引取候様可然との評義二付、京都^方際川迄差出し置、御坊付之村人足を以堅田江持越、夫より船積二可仕積り被申上候所、右体持越舟積之義者、大浦^津浦法二相振レ候段被仰聞、御尤二存候得共、講中共義全左様之訳不弁二而右之仕合二付、御浦法通相立可申間急々二引取申度旨、私共義も但々御頼申上候処、畢竟講中者浦法不案内之義も可有之候得とも、私方へ右体大造成材木を引受置、何之様子も不存旨御答申上候段怪敷思召御訴も可被成所、御勘弁二よつて乗前銀四匁九分差出し、材木者際川^方南御当浦之積場へ、赤ノ井舟を以積歸り候様被仰聞、尤坂本舟方へも其段相達し候様被仰聞、則私義坂本へ罷越相達し候処、何之故障も無御座、右材木無滞引取候様相成千万忝奉存候、尤已後御浦法二相障り候取計方仕候ハ、如何様御取計被成候共、一言之子細申立間敷候、為後証之親子連印一札差出し置候処仍如件、

山門領際川住

文化六年

吉兵衛印

己巳正月九日

倅 吉次郎印

百艘御仲間

御衆中

右本紙ハ別紙二取片付有之、

右之通二て一件事済候事、

為知人尾花川町善六并際川へ之使惣代弥兵衛、右兩人へ錢貳百文ツ、心付遣入、

一、志賀山上村々三井寺領湖水端之内へ出候竹、薪、材木之類、当浦之積場なからも間遠く候間、制度難行届、猥り二相成候而ハ当浦法二差障り候付、当中間内尾花川船屋忠兵衛、舟屋次郎左衛門并忠右衛門、右三人へ中間を頼二まかせ、松柴舟与唱へ前々より年毎二錢三百文右祝義として中間へ差出し、右三軒之衆積受被居候処、次郎左衛門義藏橋町へ変宅被致候後ハ、觀音寺町籠屋三郎兵衛と申仁、次郎左衛門方由縁有之二付、次郎左衛門を右三郎兵衛代勤申付被置候処、右三郎兵衛義、去々卯二月九日尾花川并觀音寺町出火之砌類焼被致家名絶候故、其後ハ忠兵衛、忠右衛門両家計二而積受候被居候処、当正月を次郎左衛門分尾花川舟方中へ預ケ被申、則右舟方三十九軒を次郎左衛門方へ左之通り之証文取置候旨にて、写書相認次郎左衛門奥印被致中間へ差出し被申候事、

一札

一、其許御先代当町二住居被成候節、志賀山上村々其外共都而三井寺領湖水端之内江出候竹、薪之類、舟積之義者其元并町内忠兵衛殿、忠右衛門殿三軒へ百艘御中間より御頼被仰置、則前々者右三軒にて御積被成候処、其後藏橋町へ御変宅被成候頃より、觀音寺町籠屋三郎兵衛江、其元を御申付置被成、同人方代々積送り被致居候所、去々卯年以来同人方家名絶候二付、追而代り人御申付迄私共へ引受置年々船方惣代之ものと与忠兵衛殿、忠右衛門殿被為申合積受候様被仰付被下候ハ、私共へ一同之稼二も相成悦可申旨、船屋忠兵衛殿を以御頼申上候所、御承知被下忝奉存候、然ル上者何時余人へ被仰付候共、早速相止メ毛頭違乱申間敷候、尤竹、薪、材木之外諸荷物等

出候節者、百艘御中間へ相達御差図次第二仕、聊以勝手自由之間敷義決而不仕、勿論他所より持越津内を持出候荷物、他浦之船二積不申様、平生無油断氣を付罷有、右体之義者不申及、浦法二障候義者早速百艘御中間へ注進可仕候、為後証之町内船方一同連印一札仍而如件、

尾花川町

船方

文化六年

三十九軒印

已正月

百艘之内

船屋次郎左衛門殿

右之通書付取置候二付、為後日写書二印形致差出し置申候、已上、

已正月

船屋次郎左衛門印

百艘

中間衆中

右本紙者別紙取片付有之候事、

一、白銀 壹兩

右者先町代遠藤十五郎殿死去二付、香奠遣し申、年寄与次兵衛持参、

一、当元朝柳ヶ崎二大船式艘懸り居候所、西風強ク吹流難義致居候躰二付、西方加子おして共、坂本新兵衛方艫二乗り艇式挺用意いたし差遣、東方加子おして并四廻ノ与八差添、大津町舟にて差遣し、尚又尾花川方も網舟にて廿人余り被参候処、米原浦長左衛門舟、同弥三郎舟右式艘とも登り米少し計積請罷在候処、何分風浪荒く候而、何方へもこき寄せかたく候故、当浦より持参候太郎兵衛、忠助、新右

衛門所持之艇三艇をかけ^三置、当所を参り候もの共者、同日七ツ前
罷歸り候二付、彦根長屋三湊舟会所へ使を以其段申遣し、尚又夜分
たりとも人数入用之節者無遠慮被申越候様申遣し置候、然ル所彦根
長屋加子大勢艇為持、同七ツ過より尾花川を舳をかり受乗被参候得
共、強風不相止其尽二ふかし置、漸翌々三日夕方無難二当所へ着致
候事、

附り、其節大門町抱舟之櫓壺挺折レ失申候、坂本新兵衛艦之櫓壺
丁流失致候二付、早速山田浦を赤井浦迄廻状差出吟味いたし候へ
共相知レ不申候事、

覚

一、酒壺斗
するめ式わ

中間へ

外二南鐮三片

一、酒三升ツ、三ツ
するめ 三わ添

艇主三軒へ

一、酒壺斗
するめ式わ

小船入加子中へ

外二南鐮壺片

一、酒壺斗
するめ式わ

尾花川出人足中へ

外二南鐮三片

右之通他家を挨拶二預り候、^尤南鐮之義者櫓おれ流候心持与相聞へ
候故、南鐮之分及断二不残差戻し申候、且又艇主への挨拶も相互之
事二て請置かたく候故、是又断申差戻し申候、其外酒、するめ之分
ハ請置、夫々加子共へ差遣候事、
右二付仲間費、左二記、

一、錢壺貫文

大つ町組櫓代之内へ遣ス、

一、同式貫文

坂本新兵衛へ

流失櫓代并舳損し料与して遣ス、

一、同式百文

廻りと八

右ハ加子共二付添参候心付

一、同 百文

和助

右用向小遣ひ致候心付

一、酒三升ツ、三

太郎兵衛、新右衛門不受、忠介

右銘々より艇差出させ候二付、挨拶として遣ス、

右之通取計置候事、

覚

一、酒三升

赤塚村中へ

但し庄屋与惣右衛門宅へ

右ハ正月三日晩、右村方出火在之候二付、翌四日見舞与して持せ遣ス、
使和助、尤当浦積場故、其心二て如此取計申候、

正月十五日、芦浦御礼

昆布のし

一、観音寺様

扇子三本入壺箱

但し扇箱くりあし台二重くり

不相替御逢有之、夫より御酒并御節子被下、例之通相祝候事、
御家中

西川五郎兵衛様

片岡喜右衛門様

下物

久松清右衛門様

右三軒へ常ノのし扇子壺箱宛

右之通庄兵衛、川七兵衛相勤ル、供五兵衛

正月廿一日、貴布祢御神酒役人不残出席、無滞相祝候事、

治郎左衛門子息仙治郎、去辰正月より見習二被出候所、当御酒より本役二被相成候事、

覚

明廿八日吾妻川筋為御見分、御役人中様御越被成候間、其旨相心得可被申候、以上、

已正月廿七日

惣年寄

町代

百艘中間

右書付到来二付、年寄太郎兵衛罷出右場所二相待居候処、御町役曾根源次郎様、御組佐久間又兵衛様、町代遠藤仁右衛門殿、右御越之上被仰聞候者、此度川ざらへ願出候二付、其中間持場所、右二順シ相さらへ候趣二付仰渡候、

但し立会場所にて、式尺^やざらへ之積り二候事、

右何連茂嶋之関会所二而、暫御休足被成候ハ、御茶、たばこ盆出し候事、

京都東御奉行

小長谷和泉守様御登り二付、当二月朔日大津御泊り、草津迄御出迎、次郎左衛門、忠兵衛、供和助、晦日夕方方出役相勤ル、朔日石場御出迎、太郎兵衛、六兵衛、供新藏相勤ル、同夜八ツ時方八町迄御見

送り、孫右衛門、勘三郎、供和助相勤メ候事、

以手紙得御意候、未余寒難去候処、弥御安全珍重奉存候、然者東御奉行小長谷和泉守様御初入御礼、来ル廿一日朝六ツ時御請被成候間、例之通来ル廿日御上京之積二御心得可被成候、先ハ右得御意度如此御座候、以上、

二月五日

田内与助

百艘船年寄中様

右ハ当年頭御礼二登り候節、御知らせ被下候様訳而相頼置候二付、如此申越被呉、則左之返状遣し置候事、

貴札忝拜見仕候、如来命春寒難去候処、弥御安全被遊御勤役珍重奉存、然者東御奉行様御初入御礼、来ル廿一日朝六ツ時御請被遊候旨、為御知被下置忝承知仕候、廿日夕方迄二罷登り鍵屋佐助方二止宿可仕候間、万事宜御引廻し被下度奉願候、先者此段貴答申上度如此御座候、於拝面二万々可申謝候、以上、

二月七日

大津百艘

舟年寄

油小路松原上ル東側

田内与助様用答

一、江頭浦乍間屋、帳屋又次郎義、当二月上旬被致上津、私義近年不仕合打続迎茂取続かたく候二付、此度同村之内只七殿二男傳右衛門と申仁へ右問屋、帳屋共譲り切申候、依之近日右傳右衛門召連同列之帳屋中罷登り御頼可被申上候間、私同様二被思召是迄之通帳屋職被仰付被下候様仕度、右御頼申上度参上仕候旨申参被置候事、

一、当二月九日、右傳右衛門二江頭長屋^庵太郎三郎、長左衛門付添被参、

又次郎同様不相替帳屋被仰付被下度、顔見せ旁右御頼ニ参上仕候段申之、金子貳百疋持参被致候二付、帳屋之儀者三ヶ浦申談シ追而右可得御意と及挨拶二、右金子ハ預り置申候、

但し追而三ヶ浦申談、又二郎時之通帳屋申付候ハ、右之金子ハ請、猶三ヶ浦方返礼仕候積二候へ共、万一帳屋之儀難為勤筋も候ハ、右金子差返候義も難計候故、右之金子封之俣取片付置有之候事、弥三ヶ浦相談之上差支之筋も無之、帳屋申付候節ハ書付取置候而可然事、

(上に横書)「此続き奥二留有、」

二月廿一日、御初入恐悦

京都東御奉行

小長谷和泉守様 金子貳百疋

二重くり台、下ヶ札付

御用人

小林八左衛門様

赤間三郎右衛門様

猪瀬文太夫様

松野小右衛門様

御取次

岡田長兵衛様

山田保兵衛様

吉川吉助様

飯塚五郎作様

右八軒へ手札計

次郎左衛門、孫右衛門相勤ル、ともやとひ伊八

(上に横書)「一、白銀壹匁 町代田内与助殿へ先格之通遣ス、」

乍恐口上書

一、当津橋本町大橋詰二御建被下置候船御制札、御印紙御書替奉願度、明廿日京都西御役所へ持参仕候二付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

百艘舟年寄

文化六年巳二月十九日

治郎左衛門印

大津

御役所

右御届書ハ町方御当番所へ差上、御目付方三軒へも口上二而相届、橋本町年寄、小歩キへも相達候事、

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札并御印紙、御書替頂戴仕度奉願上候、則先達而被下置候御高札、御印紙奉御高覧入候、尤是迄之御高札、御印紙共前々之通被下置候様奉願上候、以上、

大津百艘年寄

文化六年

治郎左衛門印

巳二月廿一日

孫右衛門印

御奉行様

右之願書、御高札、御印紙等、西御役所へ持参仕、御玄関御帳前へ名札差出、御公事方江御達被下候様申上置、御廊下二差扣居候処、御与力熊倉政吉様、御下役同心山田傳左衛門様御出逢被成候二付、御高札、御印紙并願書共差上ヶ、尤いまた御文言^(註)糺敷御座候間、御名、年月計御書替被下候様申上候処、追而御沙汰可有之間上ヶ置、引取候様被仰渡歸津致候事、

但し先格二而今度御登り被遊候御奉行様へハ御届不申上候事、

一、同廿七日罷出候様御差紙到来候二付、次郎左衛門、孫右衛門、供和助、早朝を罷登り、同日九ツ時西御役所御廊下へ罷出候処、熊倉様、山田様御立会にて、御高札并新古御印紙共御渡被下難有頂戴仕、御請証文被仰付印形仕差上申候事、
但し先々被下置候御高札、御印紙二ハ御先官御奉行様の御名前を先二書有之候処、此度二限り御高札、御印紙共新官様の御名先二書有之、為心得爰二留置候事、

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙御書替被成下候様、先達而西御役所へ奉願上候処、右御高札、御印紙頂戴仕難有奉存候二付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

大津百艘年寄

文化六年

治郎左衛門印

巳二月廿七日

孫右衛門印

御奉行様

右ハ東御役所へ持参仕、御廊下二而御同心^{御公事方下}浅賀外兵衛様へ差上候事、

右御高札被下置候二付、御礼如左、

西御奉行

金子貳百疋

牧野大和守様

二重くり目録台、下ケ札

東御奉行

小長谷和泉守様 右同断

西御公事方御与力

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様

熊倉政吉様

東同断

上田弥右衛門様

山田釵次郎様

石橋五三郎様

塩津宗五郎様

右九軒へ金百疋ツ、

外二御懸り御与力

熊倉政吉様へ金百疋

右同断御同心

山田傳左衛門様へ同断

御書役御同心

今井本次郎様へ同断

×歩金十六切

一、銭貳百文 宿鍵屋佐助へ先格之通祝儀遣入、

×

乍恐口上書

一、先達而御訴奉申上候船御高札、御印紙、京都西御役所二而御書替被成下頂戴仕罷歸り候付、此段御届奉申上候、以上、

百艘舟年寄

文化六年

次郎左衛門印

巳二月廿八日

大津

御役所

右八町方御役所御当番所へ差上ル、

当所御目付

高橋角左衛門様 銀三匁

多賀喜三太様 同

川嶋文左衛門様 同

×先格ハ銀壺両ツ、二候へ共、此度方相改如此、橋本町年寄へハ口上二而相届ル、同町小歩へ錢貳百文先格之通遣ス、

二月廿四日朝出舟致候三濱船之内ニ、坂本浦ニ而怪我有之候由承り候ニ付、三湊会所へ見舞旁七兵衛参り相尋候処、米原助十郎船二同所由平与申仁娘、京都登り被居、折節病氣ニ付迎ニ登り病人つれ下候便舟被致、右由兵衛坂本若宮沖ニ而、帆二あをたれ不計湖中へ被落チ、舟付ハ勿論つれ船俱々相働き候へとも、水底へ沈ミ候趣ニ而しかと致候事ハ不相知由被申之候ニ付、臨時成義ニ候間、人寄等入候ハ、無遠慮被申越候様申入歸り申候、段々さかし被申候へとも、死骸不相知混雜之様子ニ付、廿六日当番六兵衛三湊会所へ参り相尋被申候処、未相知レ不申由被申之候ニ付、早速坂本若宮江七平見舞ニ参、坂本若宮高嶋や二米原衆旅宿いたし被居候ニ付、挨拶いたし酒五升見舞与して遣し候事、供五兵衛、三月朔日朝四ツ時彦根他屋方三人被参、右一件見廻之挨拶ニ被参候事、但し死骸ハいまた相知れ不申由承り候事、

以書札啓上仕候、未余寒茂甚敷御座候得共、御地皆々様御揃御堅勝

ニ被遊御座、珍重御儀奉存候、当方無事ニ罷有候、乍憚御安意可被下候、然ル処昨年御申合置候江頭之儀、私浦方方吟味可致様ニ御申被成承知仕候、右江頭方へ引合申候得者、何分順番船相廻り不申間ハ小口船之相手人茂無之砌、無抛舟主方方急段ニ登り米申立、甚以困り入候様子ニ御座候、別而二廻り目、堅田浦船積米も都合致御座候得共船相廻り不申候、米主方ハ登り物船へ積入申度由被申甚困り居申候、此後ハ申合置候通、壺ヶ浦より壺艘ツ、之船相廻シ置候様ニ致度存候、何分小口船無之候而者致方無御座候浦方、舟積登り申候ハ、早々次舟ヲ御廻し可被成候、昨年とハ違当年ハ余程之舟ニ而候得者、相場次第急ニ茂登り申哉と帳屋方被申、何分壺ヶ浦方壺艘ツ、船相廻し置可申候、兼而御承知可被下候、先者此状右之段如此ニ御座候、以上、

二月十三日

八幡浦方

百艘御年寄衆中様

右之通書状到来ニ付、左之通返書遣し候事、

尚々御中間中様へも宜敷御達可被下候、已上、

先月十三日之御紙面、漸此節相達致拝見候、追日暖氣ニ御座候処、各々様御堅勝ニ可被成御座珍重奉存候、然者江頭表へ舟廻し方遲滞候而ハ、不取締筋出来候ニ付、一浦方壺艘ツ、之船ハ不絶様ニ廻シ置候様被仰越、御尤ニ致承知候、尤是迄共差心得罷有候義ニ御座候得共、猶更御差支無之様相心得申候、右御報申上度如此ニ御座候、以上、

三月五日

百艘年寄

八幡浦

船年寄衆中様

御答

(上に横書)

「此状^認置候処、舟年寄茂兵衛被登直段^談二而相濟参^り候二付不遣候事、」

以手紙得御意候、追日暖氣二相成候処、各々様弥御堅勝二被成御座珍重奉存候、然ハ江頭又次郎殿跡此度^後傳右衛門殿江譲り請、問屋帳屋共被致度旨二而、先頃右傳右衛門殿、太郎三郎殿、長左衛門殿御登り被成、其節御樽料御持参有之預り置、帳屋之義者三ヶ浦申談し、追而可及御報二と申置候、其後堅田浦舟年寄庄兵衛殿二逢候故、御咄合いたし候処、彼ノ浦方二ハ別段之存寄も無之様子二相聞へ候、夫二付貴浦江御談し申度義御座候間、追而御上津之序^{節ハ}二御立寄被下候様致度奉存候、尤貴浦御中間衆思召之処、御聞糺被成候上二而御登り可被下候、委細貴面二可申置候、以上、

三月六日

百艘舟年寄

八幡浦

舟年寄茂兵衛様

同喜十郎様

当用向

(上に横書)

「此状認置候処、舟年寄茂兵衛被登、直談二而相濟候故不遣申不用二成、」

三月七日辰中刻 西御組御目附菊地次左衛門様

但し挾箱壺丁、右ノ通矢橋迄御供六人御乗船之事、

三月八日

北国屋

一、壹貫文

喜兵衛

右ハ吾妻川下仲間持地分、浚賃錢渡ス、

上巳御礼

石庄様 青銅百疋

柴山泰藏様

内堀繁太様

曾根源次郎様

牧の九郎兵衛様

右鳥目五十疋宛

七里左六郎様ハ此節御差扣二付不勤、追而御出勤之節相勤可申事、右之外御門内御組屋鋪、新建の御手代衆、御同心衆不殘名札二而、

六兵衛、与次兵衛、供^{和助}五兵衛へ

一、御所司代酒井讃岐守様御登り二付、三月五日大津御泊り、石場江御

出迎^{太郎兵衛}孫右衛門、供和助、翌六日朝六ツ時御出立、御見立、八丁江^{孫右衛門}

勘三、供和助、御国若州小濱十二^万石三千石

一、三月十四日、志々飛下見分として京都御組御越被成候二付、小舟入

小船壹艘差出し御乗船被成候、御名前左之通、

牧野大和守様御組御案内方

大橋源七郎様

小長谷和泉守様御組

栗山糸之進様

一、三月十五日、吾妻川さらへ出来御見分として御町役内堀繁太様御組
(貼紙)
「一」井助九郎様、町代堀猪三郎殿御越二付、年寄多郎兵衛罷出無滞
相済候事、

一、三月 船方牧野氏を孫右衛門方へ呼二参り、先達ても治郎左衛門
江御沙汰在之候当浦之藻草、山田浦へ三艘計年々貫申度段無抛被相
頼候間、当津二而不苦候場所も在之候ハ、夏季毎日三艘程遣呉候
様被仰聞候趣承歸り、七日於中間年寄共及相談候へ共、逆も外浦へ
藻草遣候義ハ当時六ツケ敷候付、為御断御返事三月十日夕方孫右衛
門二与次兵衛同道二而牧の氏江参り、当浦之藻草堅田浦へハ是迄遣
来候へ共、外浦へ遣候義ハ、當時至而面到成もの二而御座候、昨年
も治郎左衛門江被仰聞、其節も御断申上候、外々と違御懸役之あな
た様御義御座候へハ、一牀訳合御咄申上度候間、とくと御聞被下候
上、相成りそうな義哉、御賢慮奉希候、抑安永年中二藻草御運上之
御沙汰在之、其節堅田浦と私共内々及懸合、弥御運上相究候ハ、已
後片田浦へハ差遣かたく、夫とも於当浦年々取来り候格別之由諸二
而も在之候ハ、可被差出、左様之義も無之候ハ、容易二ハ差遣し申
間敷、しかし是迄被取来候事故、急度相止ミ候而ハ差支二も可相成間、
当浦二印札二而も取拵、示談之上遣し可申哉之旨申聞候処、堅田之
者共於御役所二而もいろく申立、其上取来候由緒御座候間、持参
可致段日限りを致置其後及延引、或ハ日延をいたし、兎角申居候内、
御運上之御沙汰も相止ミ、尤藻草之義ハ尾花川之者共重々取、私共
ハ相抱り不申義二而是迄差支も無御座候、尚又其節者御役所二も御
存知之通、外二堅田浦と私共様々取合二および候義共御座候時節二
付、不得止事、其後強而不及鑿穿二、是迄双方むつちやりと済来り、
まづ此節迄、只仕来り二取計居申候、依之堅田の者共ハ兼而物工ミ

いたし居候様子二而、此度中間二而寄合候もの共風聞仕候者、毎年
外浦を隠レ参候者共をとらへ、我在所へ連レ歸り船なと取上ケ又ハ
誤証文を取、嚴敷取計候様子二御座候、然る処二此度御意之通、此
方山田浦之者差ゆるし、自然堅田浦を彼は申懸候而ハ、たちまち
下地之義共再発いたし、既二争論二相成可申と存候、尚又先年木濱
之者共、於京都御役所二誤証文差上候訳も御座候間、何分此度之義
ハ得と御勘考被成下度申上候処、牧の氏被仰候者、一々承知致居候
事二而、随分尤之趣二候へ共、則此節外出入事二付、堅田之者共召
出乍序藻草之義も荒々承見候処、只かさつ成者共二而自分勝手而已
申居候様子二候へハ、事二寄り此度打破候積候へ共候へともまづ夫ハ格別二
いたし、此度之義ハ手軽く致候而、何卒嶋関を東ハ不苦候趣承候へ
ハ、其場所二而も遣貫度段被仰候故、此方答候ハ、夫が則私共差
支二而御座候、同浦二而、西ハならぬ、東ハ不苦と仕分候而ハ規矩
相立不申候、勿論東と申而も夫々江懸合致さす二ハ相成不申候、牧
の詞、夫ならは或ハ当津之物二いたし、尾花川二而毎年三艘ツ、三ヶ
年ケ間為入込之書付二而も為致候ハ、則当浦之規矩と申もの、百
艘答、夫二而ハ又片田をダマツテモ居申間敷哉、彼是申セハ相手二
なり申さねはなり不申候、大こと二相成申候、牧の詞、是迄片田へ
八年々遣来、差支も無之候へハ、右此度三艘を片田之もの二いたし、
入込せてハ不苦哉、百、夫が此方第一のイヤ二而御座候、左様為致
候而ハ当津の藻を堅田をゆるし、為取候道理二相成、弥堅田の好ム
所二御座候、夫二付、私共別段御断申上置候ハ、此度被仰聞候御内
談之義を聊も堅田之者共へ御沙汰被下間敷候、万一堅田へ右牀御沙
汰在之候ハ、堅田二ハよろこび、御意候通、早束差赦可申候、堅
田を差ゆるさせ候而ハ、当浦の趣意相立不申、不得止事、此方取
合二および申さねハなり不申候、此義ハくれく御断申上候、依此

義乍憚態々^ニ与二兵衛付添参上仕候、此度御頼之御趣意不相立候段ハ、何とも恐入氣ノとくに奉存候へ共、右之段々御勘弁之上、品能御治メ被下候様奉希候、牧の詞、夫ハ早ヤ此^レ此方^ニ逆も強而取用候義ニ而も無之候へ共、あなち差支も在之間敷義と存候付、此間孫右衛門へも申咄候、尚此上相考可申段被仰聞候、右留書ハ極内々之事ニ候へ共、自然此後、牧印^ヲ此方へ御沙汰なし二片田浦へ入魂被致候ハ、當時此方ニ不存事、彼浦^ヲ差ゆるし置、後日の証拠ニ申立候而ハ歎ケ敷事故心得之ため記置候、

去辰十二月野田浦問屋源蔵丸舟壹艘かり請遣ひ申度段、当津石原庄三郎様御役所へ願出候処、同所市左衛門始村役人等当正月再三被召出、御利解ニよつて内済相調、源蔵方ニ舟遣ひ候様ニ相成候事、但し右一件留帳別ニ有之故、文略ス、

御上使

一、井伊掃部頭様 御登

当三月廿六日大津御泊、翌廿七日四ツ時御立ニ而京都へ御着、

但し当廿日頃江戸^ノ彦根迄御登り被遊御座、廿五日彦根御出立、武佐宿御泊、廿六日武佐^ノ大津御泊ニ付、同日七ツ時当所へ御着被遊候事、前々^ノ都而御上使二者当中間^ノ勤無之故、此度茂相勤不申候事、

一、四月朔日、例之通日吉御神事御配符三通、増加子御差留メ之御配符式通、神輿船へ御添触壹通、^ノ六通、御状箱四ツ、
一、御配符壹通 大津百艘船持

但し御文言例之通略之、

来ル十九日日吉御神事神輿船割賦之事、

大浦

丸船貳艘 水主九人 船年寄
外楫取壹人宛

但し百八拾石積^ノ式百石積迄

二宮方早船

今津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 宗右衛門
外楫取壹人

丸船壹艘右同断 十左衛門

丸船壹艘右同断 八郎左衛門

丸船壹艘右同断 船年寄

海津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 善八
外楫取壹人

丸船壹艘右同断 長次郎

丸船壹艘右同断 甚兵衛

丸船壹艘右同断 船年寄

塩津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 佐小右衛門
外楫取壹人

丸船壹艘右同断 弥右衛門

丸船壹艘右同断 孫三郎

丸船壹艘右同断 孫六

右之船例年之通致吟味、来ル十九日以前大津江着船可致候、尤服忌差合之者相改可申候、此配符^{（合）}合請印早々順達、留^{（可）}り可相返者也、

巳四月朔日 石庄三郎御印

大浦、今津浦

海津浦、塩津浦

右浦々船年寄

朔日午下刻船屋源介宅ニ而大浦ノ義左衛門渡入、

一、牧野九郎兵衛様ヲ御添触_レ尅通、御文言例之通、去卯年留帳ニ有之、略之、

右四ヶ浦船年寄中宛

覚

一、船数七艘、是ハ日吉御神事之節御馬船、右御文言例之通去卯年留帳ニ写し有之、依而略ス、 山田浦、矢橋浦船持

朔日午下刻魚積参り候北山田与治兵衛舟ニ遣入、

一、助加子御差留メ之御配符式通、御文言例之通、略之、

東かわ矢橋浦_ハ八幡町迄、_{四月朔日午刻小舟入江使和助ニ持セ遣シ候処、廻り与ハ_ハ矢橋舟へ直ニ遣入、}

西かわ坂本浦_ハ北小まつ迄、_{四月朔日同刻金蔵ニおゐて坂本四ツ屋源蔵ニ遣入、使和助}

四月四日

一、酒式升、但し白井の切手也、山田浦_ハ到来ス、

右ハ山王御神事馬船之御配符、例年世話ニ相成、猶又御当日七本柳ニ而も預世話ニ候、為挨拶と右御配符之請取書共為持被差越候ニ付、申請置候事、

一、三月中旬、堅田平兵衛、八まん茂兵衛登り被居、江頭又二郎跡傳右

衛門儀、帳屋為勤候而も差支無之哉及相談候処、右二ヶ浦ニも差障無之旨被申候故、然らハ先達而預り置候目録之返礼いたし、可然各々御浦方へも金貳百足到来被成候哉と尋候処、其通り之趣ゆへ、左候ハ、壹ヶ浦_ハ百足ツ、三ヶ浦ニ而三百足返礼遣候而可然と申談候処、八まん浦_ハ者先頃拾刃計之品を被差送候旨茂兵衛被申候故、三ヶ浦一牀之義を一応相談ニも不被及、勝手取計被申候段察当申入候処、御尤ニハ奉存候へ共、私共義ハ近浦之義ニ而是迄共存合居申、其後出合候節も挨拶之致方も無之故、右之通取計仕候儀ニ御座候間、此度三ヶ浦_ハ返礼被成候ハ、一牀ニ取計呉候様と被申候得共、残ル中間衆答も難計候間、帰村之上被申談、堅田方迄否哉の返事被致候様申聞置、扱又堅田平兵衛へ談置候ハ、追而八まん_ハ返事被致候ハ、三ヶ浦ならハ三百足、大津、堅田計の組合ニ候ハ、貳百足之積ニ而、江頭へ御出被下、祝義の御挨拶被致候上ニ而、_{帳屋}之儀も三ヶ浦共差支無之候ニ付、幾久敷御頼可申入候、尤始而御頼申候義ニ候故、取締之書付三ヶ浦へ申請置度由ニ候へ共、夫のミ御立逢申候而ハ、御互ニ氣之毒ニ候故、来ル九月付替之節委細可得御意旨一同申之居候間、左様相心得被居候様訳而申入置可被下と申談置候_{依之}、其後堅田庄兵衛_ハ片たや庄兵衛を以伝言申被越候ハ、八幡_ハ之返事_{浦根除キ}ニハ大津、堅田計ニ而取計呉候様と返事有之候付、貳百足致持参、猶帳屋取締方之儀ハ付替の節相揃ひ、得御意可申段申入置候間、左様ニ相心得呉候様と申被越候、_{依之}事_事当二月江頭傳右衛門_ハ到来之金貳百足ハ受納いたし置候事、

一、去辰年当所郡山御蔵裏石垣、当仲間へ無達新規積出し被致候ニ付、其節右御蔵所仲日野屋五兵衛へ及懸合、当巳春迄ニ取払可申候趣一札取置候_{依之}、何之沙汰無之候ニ付、当四月二日寄合之節、仲五兵衛

方へ使ヲ以得御意度趣申遣候処、折節留主中ニ而参り不被申候、翌日次郎左衛門途中ニ而出逢右之趣及催促候処、尚御蔵所へ申談候上返答致し候様被申聞候而、当六日ニ右五兵衛殿会所へ参り被申聞候ハ、右場所之義ハ不用ニ御座候間、近々之内取払可申趣被申之候ニ付、其段無相違趣得と太郎兵衛及引合置候事、

四月九日

一、鱒 三本

沖ノ嶋より例年之通到来候事、

右之内式本 内堀様へ献上致候、

是ハ此節膳所船積一件ニ付、度々年寄共御宅へ参り御苦勞之義とも御頼申上候ニ付、如此、

残壹本

是ハ会所ニ而、何れも喰候事、

一、当三月廿八日膳所御手舟ニ而若州御蔵所ハ大豆御積取被成候一件、別帳ニ委敷留置候付略ス、

一、四月十三日、右膳所一件初而御頼ニ罷出居候処、御上使井伊掃部頭様、明後十五日京都へ御下、当所御持屋敷へ御立寄之様子ニも候間、其節扇屋関、風呂屋関之舟無礼無之様制度可致旨、舟方御手代牧野九郎兵衛様ハ被仰聞候事、然ル処十四日四ツ時過、町方御役所御当番所ニ而、御組同心小頭佐久間正蔵様被仰候ハ、湖水際掃除為申付、組之内致出役候、勿論明日も舟ニ而御先払致候積ニ付、今明日共舟壹艘差出候様と被仰候付被仰聞候ニ付、舟方御懸り牧の様へ申上、即刻艀壹艘ニ薄縁二枚入加子壺人附、薄縁二枚、茶、たばこほん等差入遣候処、猶又町代部屋ニ而堀猪三郎殿被申候ハ、明日者

三井寺へ御参詣有之旨ニ而、何れハ御上乘之程も難計候故、大津浦東西とも浜側為見分、今日御組様御出役被成候間、舟之儀ハ其中間ハ制度被致候様被仰出候間旨被申聞、次郎左衛門答候ハ、浜側掃除之儀者町々被致、只又着舟之義も浜側家々積上ケ致候事ニ候間、着舟へハ其家々心添被致候様致度候、通舟御差留無之事故、迎も百艘方ハ制度ハ難行届段断申候ニ付、其段猪三郎殿ハ被申上、町方へ被仰付候様ニ相成候、扱又右出役御組岡本様ハ、中間年寄壺人右舟ニ乗参候様と被仰候へ共、是又断申不参候故、孫右衛門、孫九郎兩人、嶋ノ関、小舟入江罷出居候処、猶又御当日ニハ小舟入、嶋ノ関江壺人宛、扇屋関へ一兩人相詰、舟ノ差配致候事、

明十五日

御使井伊掃部頭就歸符、大津ハ石山筋へ乗船ニ付、右辺肥シ船通船不致様船持共ハ急度可申付候、此配符昼夜刻付を以早々順達、留りより可相返候、以上、

大津

四月十四日 御役所御判

大津

坂本

比叡辻

庄屋

舟年寄

此御配符只今御差出被遊候付、即刻為持遣候間、刻付之手形御越可被下候、以上、

大津

巳四月十四日申上刻

百艘年寄

坂本

舟年寄中様

右之通添書いたし、仕立飛脚小舟入多吉二為持遣ス、尤賃錢此方払、
一、同壺通箱入、御文言前同断二付、略ス、

松本、馬場、膳所舟町、山田、南山田、矢橋、大江、穴村、大萱新田、
大萱新濱、神領、橋本、里村、黒津、太支、関津、^{留川}、東村、中村、
濱村、龍門、外畑、南郷、千町、平津、石山、鳥居川

右村々庄屋

舟年寄

右ハ即刻松本へ為持遣ス、

急廻状

明十五日

御上使并伊掃部頭様石山筋江御乗船二付、右近辺肥シ舟通船不相成
段被仰渡候付、此段申通し候、以上、

巳四月十四日申上刻

百艘

下北国町 吉平
五兵衛

別所村

南大門町 仁右衛門
仁兵衛

北保町

観音寺町

土居町

尾花川町

右町々艀持中

(上に横書)

「右廻状廻りと与ハニ為持遣ス、^{相廻し候}尤さい川善四郎へハ、坂本行飛脚太吉
へ伝言にて申遣置候、」

右之通御手当被仰付候へ共、三井寺御参詣も無之、八町御本陣をす
ぐに京町通り御通行二相成御上乗^{乗舟ハ}ハ無之候事、

一、三月廿四、五日頃彦根を御座船壱艘、外二大^ヲ太郎舟を壱番として、
式番る七番迄の大舟六艘、八番る十一番迄の小舟四艘并御座舟之通
ひ艀壱艘、合十三艘、舟奉行御付添被成、三月廿四日頃を当所御た
や二御待受被成候へ共、御屋鋪へ御立寄無之、京町通り御通行二而
右之舟共不用二相成候付、不残^セセたへ相廻し御覽二入り候欤、同日
暮時又々た屋へ戻り候、

但し三月廿五日頃、石山御着舟場為試と右之舟共石山、セたへ参
り候事、

一、海津を積登り候木船二ハ当浦を乗前荷積不申筈、海ツ浦之左法^左二候
処、冬気舟切^{二而}之節無抛節ハ積下し候様致度旨、四月十七日舟年寄太
郎一へ申談候処、一同へも及相談二追而右返事有之候筈之事、

一、四月廿三日、例年之通三井寺政所を竹のこ拾本至来之事、役人中江
配ル、

四月廿七日、船方御役所を呼二参り年寄太郎兵衛罷出候処、牧野様
被仰聞候ハ、先達而を堅田浦与雄琴村と船積場出入御糺し有之候二
付、大津浦付舟積場際限之義御尋二付、左之通書付ヲ以奉申上候、

御尋二付口上書

一、大津浦舟積場之際限、西者寺門領さい川限、東ハ馬場村膳所領境迄

者大津浦付之舟積場二而、此里数凡四拾町余之間へ出候諸荷物、前々
を私とも舟にて積来り申候、尤馬場村、松本村二而舟持も有之候得共、
右両村舟之儀ハ大津を洩行候旅人ヲ矢橋へ渡舟仕并所商ひ物少分之
荷物積乗セ候迄二而、其外当津持越荷物者不申及、所商ひ物二而も
大分之荷物ハ私とも舟二而積受、勿論御用舟之儀者馬場、松本浜二
而も、私共舟ヲ以相勤来り申候御事、
右御尋ニ付奉申上候通相違無御座候、以上、

百艘舟年寄

文化六年

太郎兵衛印

巳四月廿八日

大津

御役所

右書付廿八日年寄太郎兵衛御役所へ持参仕、御掛り牧野様へ奉差上
候、

一、当月廿五日、片田町空泊り乗合之内老人物、矢橋江着船之砌ハ何之
障りもなく上り候故、船ハ其俣当浦江戻り候所、俄ニ矢橋二而持病
差発り難歩行成、彼是暮合ニ及ひ候故、矢橋番人吉兵衛方二而一宿
いたさせ、其趣同所船年寄方即晩手紙二而申参り候故、翌廿六日早
朝空泊り船頭太吉見ニ罷越候所、少々宛収氣ニ付、已之刻時分、草
津江向ケ出立いたし、夫故太吉当浦江戻り申候、右ニ付又翌廿七日
礼状相認メ矢橋舟年寄并庄屋宛二而、四廻り遣し候積之所、片田町
組四廻り五兵衛、俄ニ私用二而上京いたし候ニ付、五兵衛兄小舟入
舟屋嘉兵衛ニ申し付、右書面為相持挨拶旁遣し、猶又書状ニも御失
墜等無御遠慮被仰聞候様申遣し候処、矢橋浦舟年寄方挨拶二ハ、格
別之事ニ而も無之御互ひ之義故、其義ニハ不及申被為入御念候御使

之趣と申し返事参り、無難ニ相済申候、右旅人は身延山参詣之由申事、

五月節句扣

石原庄三郎様

青銅百足

御元々

柴山泰蔵様

御町役

内堀繁太様

同

曾根源次郎様

舟方

牧野九郎兵衛様

右四軒へハ鳥目五拾疋ツ、

御元々七里左六郎様義ハ、御差扣へ中ニ付上巳ニも不勤故、当日も
不勤、追而御出勤被遊候節相勤可申事、

右之外御門内新建御手代衆、組屋敷、御同心中不残并北出雲平殿へ
ハ名札計二而相勤候、孫右衛門、庄兵衛、供五兵衛

一、五月六日、雨天二而候へ共、例年之通日吉山王へ参社相勤候、

次郎左衛門、孫右衛門、孫九郎、八郎兵衛

供坂本新兵衛
関ノ次兵衛

五月六日、当日御目付御兩人御越可被成処、雨天ニ付御延引、天氣
次第御出可奉承知候事、

七日も雨天ニ付暫御延引之由、

一、石原様若殿捨之進様、五月朔日比ヨリ痂瘡之由承候付、為御窺金貳

百疋五月七日内御玄関江罷出、船方牧野様へ申上候処、取次へ申置候間差出候様被仰渡、則御玄関二御座候御取次役内、玄関江御出被成候而、口上之趣御聞被成、念入候事其段可申上候旨被仰聞候、与次兵衛、太郎兵衛、供新八

一、竹生嶋弁財天觀世音、去ル三月大坂江出開帳有之、御歸り大坂講中五十人計付添、五月六日藏橋町近喜へ御着被成、大船式艘かり切、委細ハ諸藏方舟積帳二記し有之候事、

大津孫右衛門船、十兵衛船也、

大坂御目附

扇屋関御出迎

鵜殿十郎左衛門様

次郎左衛門

蒔田八郎左衛門様

孫右衛門 供与八

右五月十日勢田川筋為御順見、京都方御出被遊候付、例之通御供舟三艘差出し、外二用意舟壹艘手当致置候へ共、不用二相成、尤定例ハ当所御役所へ御立寄被遊候処、御役所へハ御歸り二御寄被成候由二而直様御乗舟被遊候、右二付御用達若狭屋八兵衛殿御先へかけぬけ度被申、依之右御供舟之内壹艘加子四人かけおしきらせ遣申候事、

一、五月朔日七ツ時前、嶋ノ関辺方艀乗出東へおし参候もの、新地崎二てはまり難義之艀二付、小舟入加子共小舟おし切かけ付、今壹町計二相成不叶沈ミ、再浮不申候付、不取敢尋候様加子共へ申付、鍵なわ、竿竹等差入舟仕立遣置候処、右はまり候ものハ松本村伊助と申同所瓦師七左衛門方日手間業いたし候もの二而、其日も瓦を積候つもり二而、当所貸舟屋仁右衛門方艀をかり乗廻し候趣二相聞へ候付、年寄孫右衛門義舟方御懸り牧野九郎兵衛様迄内届二参候処、只今松

本方も播磨屋長兵衛届二来候、どちらの懸り場所二而有之候哉と御尋被成候故、其義ハ相調へ候上可申上積二候へ共、小舟入会所目先之儀二付、不取敢参上仕候旨相答候処、北出方へも申聞置候様と被仰候故、直様下役北出雲平殿方へ参候処、御同人方へも播磨屋届二参候旨被仰聞候、

一、右取計方旧記相調へ候処、寛政五丑五月五日了徳町油絞り庄兵衛と申もの、外二四、五人松本村之艀二乗組、甚七町の新地崎二而溺死致候節、諸懸りハ松本舟方被致候得共、当浦内之場所柄二候故、此方松本双方御訴申上、則御檢使茂小舟入乗舟被成、御見改相濟候上、死骸ハ松本舟方へ相渡候へ共、始終此方立会有之候へ共、此度之場所ハ松本わかれの見通し六、七町計沖二而、松本之もの相果候義二有之、尤当所貸舟屋仁右衛門艀二ハ候へ共、是以松本之ものかり請二候へハ、松本浦手切二取計させ置候共、元禄、安永両度之御裁許書二而、荷物舟積方之訳ハ相分り有之事故、後年舟積場所之障り二ハ相成間敷、乍併松本方存念相尋度存、小舟入会所迄参り被呉候様申遣候処、播磨屋被来、私義不取敢牧野様、北出様まで内届二参置候処、未死骸上り不申候故、網入尋候積二付、尾花川網方へ頼遣、則只今網舟参被呉候二付、御役所へ御届二参り混雜仕罷有候而、各々方へ御挨拶不行届段、御用捨被下度と断申され候付、此方方申候ハ、畢竟此度之義ハ御村方之仁借り舟被致、勿論場所も大津町内を離レ、松本地先二而之事二候故、御手切二取計被成候とも此方二差障りハ無之候へ共、何れ一応之御沙汰有之候上二而、御届等も可被成筈之処、無其儀御届被成候趣承之候付御招申候、湖上之義ハ陸地と違、睨与際目も分り兼、御覽候へ爰元見請候得者、鴨ヶ関方東の様二ハ見得不申候、既二寛政五丑年二ハ、此方と其浦方と立会二而取計致有之、此段迎も其所又ハ其仕宜二寄取計方違候義二

候間、左様御心得可被成と申聞候処、随分御尤ニ致承知候と被申候付、今夜中も死骸御尋被成候ハ、此方加子共も可遣と申入候処、千万忝候得共、今晚ハ網引尋候積り二付、私方人夫も休足為致候間、加子衆之儀も御引取可被申と被申候故、何れ今晚ハ当会所ニ相詰罷有候間、御用候ハ、何時ニ而も可被申聞と申入、則東方年寄肝煎為申合子刻過迄詰合候処何之用向も無之故、四廻り平兵衛、五兵衛兩人を為泊置、何れも引取候、

一、同夜酒三升為持、肝煎六兵衛、勘三郎同道ニ而、松本舟会所へ挨拶ニ参り置候、

一、同夜年寄孫右衛門、牧野様、北出氏へ参候処、御両所共御役所ニ被成御座候旨二付、直様御役所へ参北出氏江申入候ハ、此度之儀ハ松本之ものかり舟いたし、松本浦之地先ニ而相果候儀二付、松本手切ニ取計可被致候間此段御承知可被下、尤寛政五丑年ニハ双方立会取計仕有之、比度之義^{後ノ義}も其所又ハ其品ニ寄取計方も相変候間、此段も御含置可被下と申入、候^則処其段奥へ被申上候処、委細御聞届被成候との御返事二付、引取申候、

一、文化二丑六月廿八日、肥前町并筒屋宗七と申者、貸舟屋仁右衛門艀ニ而入水致候節、右仁右衛門^ハ御届書二百艘奥印可仕筈之処、手切ニ御届申上候旨申之承引不致、勿論津内之ものニ舟貸候ハ、此方へ可達筈ニ候処、無其義段旁以仕来りニ相振候儀二付、其節の舟方御懸り内堀繁太様へ其段申上候処、寛政七卯年、鍵屋佐七裏ニて入水人有之節之振合御尋被成候二付、則其時御届申上候書付之写、御覧ニ入候二付、貸舟屋へ段々被仰付候へ共、何分承知不仕候付、於御役所ニ其時之届書御穿鑿被成候へ共、相知レ不申趣二付、同七月朔日百艘并貸舟屋双方へ被仰渡候ハ、以来貸舟屋^ハ百艘方へ届出、御役所へハ百艘^ハ可相届候、尤右寛政卯年之届書追而相知レ候

節ハ元へ立戻り、仕来り之通ニ可仕段被仰渡、双方共御請印形差上有之候へ共、此度之義ハ松本之ものへ貸候而、津内へ貸候とハ訳も違、是等此方奥印を以御届申上候而ハ、当所貸舟屋^ハ湖水諸浦へ貸置候舟毎、同様ニ取計不致候而ハ不相当道理二付、此度之義ハ不及其義ニも候、尤以来心得違不致様、仁右衛門義小舟入会所へ呼、得と申聞置候事、

一、翌二日四ツ時、松本はりま屋西舟会所へ被来、昨日^ハ段々御世詰被成下候上、為御見廻御両所様御酒預御持参、別而昨夜中ハ小舟入御会所へ何れ様御詰合被下候段不浅忝存候、只今御役所へ参り掛二候へ共、此段御礼申置度参上仕候と被申来候事、

但し小舟入会所へ者茂兵衛、九太夫

右同様ニ被申参候事、

一、朔日夕、一網引被申候処掛り不申、二日朝少々所を替、又引被申候へ共揚り不申故、小舟入加子衆存寄之見^{ケントウ}当引呉候様と被頼候付、小舟入^ハ十四、五人参り、網引候へ共相知レ不申、都合三度網引候へ共無全候付、同七ツ時^ハ艀式艘ニ鶏をのセ尋ニ被出候故、小舟入^ハも艀二艘ニ鍵竹を入、十人余り遣申候、然ル^ハ同夜五ツ時舟屋彦助大坂屋喜右衛門、小舟入会所へ挨拶ニ被参、明日之所ハ村方限ニ尋可申間、小舟入^ハ出候義ハ見合呉候様被申聞、勿論西会所へも右兩人同様挨拶ニ被参候二付、小舟入加子共義ハ差扣へ不遣候事、

一、右二件ニ而混雜之中ニ、二日石場^ハ旅人廿人計のセ矢橋へ着致、皆々揚り候処、壹人卒中之様ニ而、石場へ連歸り候舟中ニ而相果、尤京町いセ長方縁者ニ而、京都之ものニ候由二付、村方^ハ京都へ懸ケ合ニ被登、未出舟無之内病氣之躰ニ取計、京都^ハ迎ひニ被参引渡候旨

二申立相済候趣二相聞へ候、

一、入水人之義も、三日夕方浮候を見付候旨二候処、右京都之死人と差湊ひ候付、其夜ハ穩便ニ差押へ置、四日ニ油茂、播長、瓦七并貸舟主仁右衛門同道二而、御役所へ御届ニ被出、即日牧の様、北出氏御検使ニ御出被成、御見改之上口書等相添京都へ御伺ニ相成、五月七日御下知有之相済候、

一、同七日七ツ時、油茂、はり長、九太夫右三人風呂屋閑、小舟入両会所へ口上礼ニ被参候、

但し上下兩組并四廻り、惣加子中へととして、酒五升礼ニ参候由ニ御座候、

一、前二留在之候若殿庖瘡追々御日立被遊、五月十四日為御祝赤飯四重、釣台二而当会所へ為御持被下、則役人内四廻り等迄配分致候、翌十五日朝年寄四人共袴羽織二而内玄閑江被出、船方牧の氏様へ名札差出御礼相勤候事、

即座ニ紙二折ため二入候、翌日鳥目式百文紙二折古望氏迄為持遣し、御使江相届被呉候様頼置候、

但牧の氏、古望氏江兩人御礼ニ参候、

口演

今般御内祝被遊候ニ付、御重之内被進各様方へ候ニ付、届ケ方被仰付相達申候、以上、

五月十四日

古望仁兵衛

次第不全

永原屋与次兵衛様

船屋太郎兵衛様

船屋治郎左衛門様

船屋孫右衛門様

御茶壺御下り御先触

五月十八日巳ノ刻、御役所より御配符式通御渡し被成、

但し野洲郡

飛脚賃

今濱始壺通

三百文

蒲生郡

飛脚賃

田中江始壺通

四百文

右者十九日早天、和介飛脚ニ遣候事、

一、七里左六郎様先達而出石丸岡の銀改メニ付、当三月ハ押籠メニ御逢被成候処、当五月十四日迄二而百日ニ相成、京都御奉行所ハ御召出事済被蒙仰候ニ付、為御窺五月十八日金貳百足持参、与治兵衛、治郎左衛門罷出候処、御役所へ御出勤被成御留主故、下女江申置歸り候、但三月節句の礼も差扣置候付、是又今日鳥目五十足ツ、式筋持参いたし候事、
一昨知年冬も右御引籠中
金貳百足御見舞ニ差出候事、

一、五月廿一日、例之通貴船御神有之、(酒脱カ)役人中不残祝ひ申候、右之節片田町組舟屋七兵衛殿、正月ハ再勤いたされ末席二而被勤候所、当御神酒ハ下地之席ニ被相成候故、酒壺樽、肴料壺封被差出候事、

一、廿二日、木濱むら役人中毎々当浦ハ出船いたされ候、為挨拶大升諸白貳升持参有之候、

一、六月八日、例之通三井寺政所^るそうめん三拾把、暑中為御見舞到来事、

一、六月十二日、暑中御伺左之通

石原庄三郎様 素麵三拾把 二重くり居台
下ヶ札包のし

御元々

柴山泰蔵様

小頭

佐久間正蔵様

御目附小頭兼帯

七里左六郎様

高橋角左衛門様

御町役

御目附

内堀繁太様

多賀喜曾太様

〃

〃

曾根源治郎様

川嶋文左衛門様

船方

右四軒江素めん拾五把宛

牧野九郎兵衛様

右五軒江素めん廿把宛、孫右衛門、勘三郎、供和助

右之外御門内新建御手代衆、組屋敷御同心中、不残并北出雲平殿共
名札計二而相勤申候、

六月十五日巳刻、從 御役所御配符式箱参ル、則左之通例年湖上船

増減相改帳面二記、来ル朔日^る十日迄二可致持参候、

右帳面之内浦方により貸船致混乱候間、借り主并貸船屋共入念相改、
船毎貸借符合致候様可書出候、

右之趣得其意、此配符致請印、無遅滞早々順達、留所^る可相返候、以上、

大津

巳六月十五日

御役所御印

大津始り川道迄、浦々庄屋、船年寄

右之通坂本四ツ屋宗兵衛艦へ渡ス、

東浦之分御文言同断

使五兵衛

松本三ヶ所始り伊庭迄、浦々庄屋、船年寄

右老通即刻松本へ五兵衛持参ル、

船年寄九太夫受取参ル事、

右貸船屋中へ茂即日廻状相廻候事、

但し船屋傳介へ渡ス、使五兵衛

六月十六日、京都暑氣窺

西御奉行

牧野大和守様

金子式百足

居台下ヶ札
二重くり

御用人中

御取次

小熊三郎左衛門様

嶋田政右衛門様

香西伴助様

岡野大助様

神山善太夫様

横溝市右衛門様

中村重右衛門様

大野万左衛門様

十九浦九十九様

右四軒江手札計

右五軒江手札計

(付紙)「当八朔小熊藤四郎様江進物之事、」

御公事方

御公事下

深谷平左衛門様

上田八蔵様

不破伊左衛門様

柏原治部右衛門様

入江吉兵衛様

廣瀬佐野右衛門様

本多新左衛門様

酒井宗助様

熊倉政吉様

山田傳左衛門様

右五軒江銀壺両宛

平川伴藏様

浅賀和作様

✕右七軒江手札計

東御奉行

小長谷和泉守様

金子貳百疋

居台下ケ札
二重くり

御用人中

小林八左衛門様

赤間三郎右衛門様

松野小右衛門様

右三軒江手札計

御公事方

上田弥右衛門様

山田釵治郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

右四軒江銀壺両宛

御公事下

中川奎左衛門様

同定右衛門様

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新左衛門様事新五郎

喜多尾八郎左衛門様

櫛橋平藏様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

右九軒江手札計

田内与助殿

右銀三匁

若狭屋八兵衛殿

右刺鯖式差遣ス

右之通相勤ル、孫右衛門、勘三郎、供和助

永順寺の永原屋与治兵衛方へ為持来り候
付、此受取書遣し申候、

覚

一、金貳百疋

一、銀四拾三匁

右者嶋関地料、当巳年分從御本山被下置、慥ニ受取申候、以上、

百艘年寄

文化六年

与治兵衛印

巳六月廿一日

永順寺様

一、膳所船積一件、貝屋七兵衛取扱二而、六月廿一日事済致候付、於当
会所双方証文為取替、勿論三月廿八日若州御藏の大豆百俵御積取扱
成候、乗前銀貳拾匁匁、右貝七方を受取申候、
右一件、留帳委細別ニ取拵置候付、委不留申候、

一、七月二日巳中刻、御役所の御先触御出被成、則牧野九郎兵衛御役所
左之通、

覚

一、人足三人 内乗駕籠壺挺

分持壺荷

右者就御用我等儀、明二日未明大津出立、伊香郡馬上村江罷越候条、
於宿々書面之人足、御定之賃錢請取之、無遅滞可被差出候、尤川越、
渡船等之場所前宿より及通達、無差支様可被取計候、此先触早々継
送り長濱の馬上村へ可被相達候、以上、

石原庄三郎手代

巳七月二日

牧野九郎兵衛印

矢橋迄船可
被差出候

百艘、矢橋、草津、守山、武佐

三日泊り愛知川、高宮、鳥居本、米原、長濱、伊香郡馬上村

右宿々問屋
年寄中

右先触通即刻矢橋江送る、但し小舟入会所へもたせ遣候事、使新八

七夕御礼

石原庄三郎様

青銅百疋、木札付

御元々

柴山泰蔵様

同

七里左六郎様

御町役

内堀繁多様

同

曾根源次郎様

御船方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ鳥目五拾疋ツ、

右之外御門内御手代衆并新建組屋敷御同心不殘、北出氏へ者手札計
にて相勤申候、与治兵衛、忠兵衛、供五兵衛

当七月九日、曉方前方かつのいぶき風吹、同日五ツ時大風二相成、
当浦せきく二有之地舟、入ふね共、大混乱二候へ共、同日八ツ時
前風止ミ、当浦二おゐてハ無別条候、尤御役所書役衆、貸船屋六兵
衛方余り舟之艀を前日御かり被成、坂本町吉田蔵之裏二暫被置候

処、右大風二而失せ候間、心当り出来候ハ、御役所へ知らせ呉候様
と書役衆御頼被成候得共、定而破舟いたし散々二流失可申、左候へ
ハ相知レ申間敷段申上置候事、

一、御高札早速おろし会所へ持帰り置候事、

一、御役所江大風御伺二忠兵衛罷出置候事、

一、米原舟真野二而破舟致候旨風聞候付、彦根た屋三湊会所へ勘三郎
罷越、用向候ハ、無遠慮可被申聞段申置候処、七日夕方米原長五郎
舟当所出船仕候処、真の辺二而難儀之趣申越候、飛脚今朝五ツ時
過当着致候二付、早速人数遣候処、其後便りも無之候、猶様子二よ
り御加勢御頼可申上候と被申候付、差扣居候処、翌朝三湊惣代衆礼
二被参、格別之義も無之由二被申聞候事、

一、当浦出船致候比良舟壹艘、柳ヶ崎辺二懸り居難儀之由、并比良
石積登り候舟壹艘、尾花川の北大田二而難儀致居候旨、尾花川舟方
年寄新助、忠兵衛方へ申参候付、忠兵衛、新助道同二而、舟宿中保
町木屋三郎兵衛方へ様子尋二参候処、右之舟頭三郎兵衛方へ参り居
申聞候ハ、段々相働候へ共、舟ハ次第二はセ上ケられ迎も難計、勿
論大二つかれ候付、爰元江参り在所辺登り舟之もの共を相頼遣し
置申候、様子二寄人数御頼可申上候間、まづ見合呉候様被申候故、
左候ハ、今一応見届之人被遣様子可被申聞、昼夜二不限人数差出可
遣段申置候処、翌朝当所二有之在所の舟を遣し、右之石積替候積
り二被申、此方人数ハ不遣候事、

七月十七日

八幡行忠兵衛船

一、金子百疋

加子友江相渡ス

右者八幡宿大津屋忠兵衛親死去致候二付、香奠として遣ス、尤悔状
相添遣候事、

一、内堀様御小兒達痘瘡二付、為御見舞金百疋、孫右衛門持參致ス、七月廿七日、年寄共四人江赤煎一重ツ、来候事、

(挟込文書)

(端裏書)「野田浦誤一札之下書」

「一札

一、私儀、年久敷舟遣ひ相止メ罷有候処、享和元酉年御役所へ奉願、小舟壹艘持立候砌、各方へたいし不行届計ひ方仕候而、御当津る之下り荷物者一切為積不被成、折角舟遣ひ候而も仕当二合不申渡世二不相成候付、無間も舟相止メ居申候処、何分二も小舟壹艘遣ひ不申候而ハ上下急之端荷物弁事能不仕候而ハ、客方用荷不輕通り二付、年来私方へ出来り候荷物、追々最寄之外浦へ出し被申身上取続難成、難渋至極仕候付、猶又此度九十五石積舟壹艘、南比良方買請遣ひ申度奉存候間、何卒御当浦る之下り荷物之儀為積被下度旨、段々御歎申上候二付、御聞濟被下忝奉存候、然ル上ハ御浦法通急度相守候様、水主共へも申付置、縦令聊之品積受候共其時々不洩様御断申上、龜略之義無之様可仕候、万一不埒之義有之候ハ、此後心得違不行届之儀仕候ハ、如何様御取計被成候共、子細申上間敷候、為後日仍而如件、

文化六年巳

野田浦問屋

舟持

市左衛門

百艘御年寄中

八朔御礼

石原庄三郎様 金貳百疋、二重くり足

白木台二のセ下ケ札付ル

元々

柴山泰藏様

七里左六郎様

町役

内堀繁太様

曾根源次郎様

船方

牧野九郎兵衛様

右各金百疋ツ、

小頭

左久間正藏様

目附

高橋角左衛門様

多賀喜曾太様

川嶋文左衛門様

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

小野宗九郎殿

町代

堀猪三郎殿

遠藤仁右衛門殿

船方

北出雲平殿

右九軒銀壹両ツ、

御門番吟助五百文 右内義貳百文
同小遣ひ、右徒足輕稻葉半七

貳百文ツ、三ツ

会所肝煎

山本俵五郎殿

吉本孫三郎殿

右鳥目貳百文ツ、

御門内組屋敷、白崎、御蔵番三人

平蔵町年寄

右者名札差出ス

右例之年通相勤申候事

年寄与治兵衛、六兵衛、供やとい多吉

✂金壹両三步

銀一両九ツ

◎五百文ス、

貳百文ツ、六ツ

八月朔日、京都御礼

西御奉行

牧野大和守様

金子三百足 目録台
下ケ札付

御用人

小熊三郎右衛門様

香西伴介様

神山善太夫様

中村重右衛門様

十九浦九十九様

御取次

嶋田政右衛門様

岡田大助様

横溝市右衛門様

大野万左衛門様

✂此九軒へ銀壹両ツ、

御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本田新左衛門様

熊倉政吉様

右五軒へ金子百足ツ、

御公事下

上田八蔵様

柏原治部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

酒井宗介様

山田傳左衛門様

平河伴蔵様

浅賀和作様

右七軒へ銀壹両ツ、

東御奉行

小長谷和泉守様

金三百足 目録台
下ケ札付

御用人

小林八左衛門様

赤間三郎右衛門様
松野小右衛門様

御取次

三郎

岡田長兵衛様

山田保兵衛様

吉川吉介様

飯塚五郎作様

〆右七軒へ銀壹両ツ、

御公事方

上田弥右衛門様

山田釵治郎様

石寫五三郎様

塩津惣五郎様

此四軒へ金百足ツ、

御公事下

中川李左衛門様

同定右衛門様

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

喜多尾八郎左衛門様

櫛橋平蔵様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

〆此九軒へ銀壹両ツ、

上丁代

田内与介殿銀貳両

奥田九右衛門殿銀壹両

下丁代

藤沢傳六殿貳百文

東西御門番三百文ツ、

//

藤村佐市殿貳百文

宿鍵屋下女へ貳百文

上町代中へ五百文

山しな大津屋孫兵衛へ百文

下町代中へ五百文

宿鍵屋佐介へ三百文

追分丸屋四郎兵衛へ百文

小番へ三百文

東西中番中へ三百文ツ、

金三兩三步

銀一 三十三

銀貳 壹ツ

〆五百文 貳ツ

貳百文 三ツ

三百文 六ツ

百文 貳ツ

右之通太郎兵衛、孫右衛門相勤ル、とも五兵衛、荷持和介、ヤとひ

先触

石原庄三郎手代

内堀繁太

中嶋剛之助

覚

一、人足三人

内

両掛貳荷

歩竿壹組

右者我等共就御用、明後六日曉七ツ時大津御役所出立、矢橋迄乗船
二而、左之通罷越シ翌七日帰津いたし候条、得其意書面人足往返共
御定之賃錢請取之、無差支繼立可被申候、

此先触無遅滞継送り、吉川村新田を可被相返候、以上、

巳九月四日

石原庄三郎手代

中嶋剛之助印

内堀繁太印

百艘、矢橋、草津、守山北桜村へ八人
足用意二不及野洲郡北桜村

守山五条村へ之人足、
繼立て可被申候六日泊り五条村、吉川新田

右宿々村々

問屋
庄屋 中

追而北桜村を守山宿迄、例年之通迎人足可被差出候、以上、

(下に横書)

「下ノ七兵衛船加子三人乗り、此舟賃貳百六拾文前日御渡し被成候、」

重陽御礼

石原庄三郎様

木札付青銅百疋

御元々

芝山泰蔵様

同

七里左六郎様

御町役

内堀繁太様

同

曾根源治郎様

御舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ鳥目五十疋宛、紙札付

右之外御門内新建御手代衆、組屋敷御同心中不殘并北出雲平殿へハ、

名札計二而相勤申候事、孫右衛門、川七兵衛 供雇和助

一、九月十四日、石山村を例年之通松茸甘本到来候事、則配らせ候事、

追而本文運上銀、大津橋本町古望仁兵衛方二而掛改候間、得其意納人印形持参可致候、以上、

湖上船運上銀、来月朔日を五日迄二持参上納可致候、遅滞致間敷候、此配賦令請印早々順達、留り所を可相返候、以上、

(割印影写)
大津

「九月十五日 御役所印

右浦々庄屋

船年寄

右十五日巳中刻、坂本艀甚八船へ相渡ス、

一、御文言 右同断 松本浦始り伊庭まで

大津浦始り川道まで

右十五日午刻 松本村へ廻り五兵衛持参、

口演

一、船御運上銀、来月朔日を五日まで二無遅滞上納可被致候、此廻状早々順達、留り所を百艘会所へ御返し可被成候、以上、

辰九月十五日 百艘印

仁左衛門、仁右衛門、甚吉、六兵衛、源助、清助、弥七、

五郎八、吉兵衛、孫六

九月十九日御役所を呼二参り、太郎兵衛罷出候处、中嶋剛之助様被仰聞候ハ、当廿四日を御代官様浅井郡へ為検見御越被遊候二付、矢

橋浦迄御乗船有之候間、例之通小船内屋形壹艘、供船貳艘手当致候様被仰聞、則左之通先触壹通御渡被成候二付、即日矢橋浦へ遣候事、

石原庄三郎手代

先触

内堀繁太

中嶋剛之助

百艘始

覚

一、御用長持

壹棹

此人足四人

一、具足櫃

壹荷

此人足壹人

一、乗物

壹挺

此人足四人

一、人足 八人

内

両掛

六荷

合羽籠

壹荷

竹馬

壹荷

外人足拾七人

外

乗駕籠貳挺、於宿々用意致置可給候、

右者当作毛為檢見、御代官来ル廿四日大津御役所出立、左之通り罷越候条、得其意、書面之人足於宿々御定之賃錢請取之、無遅滞差出、渡船、川越等之場所ハ従前宿及通達、無差支様可被取計候、且村々送迎人足之儀ハ例年之通申合無間違可差出候、且泊村之義檢見手操二寄治定難致候得共、先為心得相達候、人数者上下拾五人之積可被

相心得候、此先触早々順達、留り村より可被相返候、以上、

(割印影写)

「巳九月十九日

石原庄三郎手代

中嶋剛之輔印

岡田大八印

牧野九郎兵衛印

内堀繁太印

百艘、矢橋、草津、守山、武佐、^{廿四日泊り}愛知川、高宮、鳥居本、米原、

長濱、浅井郡^{廿五日泊り}北野村、龍岸寺村、池奥村、谷口村、龍安寺村、力

丸村、黒部村、上野村、木野村新田、^{廿六日泊り}北野村、古橋村、月ヶ瀬村、

^{廿七日泊り}曾根村

右宿村々問屋

庄屋 中

外二 大津

御用書付 御役所

江州浅井郡

北野村始

右二付 内屋形小舟壹艘 加子三人乗り

此舟賃貳百六拾文

供ふね 貳艘 加子壹艘二式人乗り

此舟賃四百文

六六百六拾文、九月廿三日足輕半七殿御持参ニ而御渡し被成候事、右御代官様檢見御歸路廿九日、日和悪敷矢橋浦方之御乗舟無之、其趣之添書、矢橋方中間方へ御先触書与一緒ニ参り候二付、即刻御役所へ戻ス、但し御近習之内京川宇一郎様へ相渡ス、

覚

一、百式拾四銅 壹ツ

一、四拾八銅 壹ツ

一、三拾六銅 貳ツ

一、貳拾四銅 三ツ

一、拾貳銅 十九

✕

右之通奉納仕候、以上、

巳九月廿一日

貴布祢御社中

大津

百艘

九月廿三日卯刻酒井讃岐守様御組

喜多川安之進様

三浦源八郎様

右ハ勢田川筋御下見与して御越し被成候二付、小船壹艘加子三人乗り、当関より御乗船被成候事、

但し当駅方々案内人当会所迄付添参り候、

一、橋本町米屋喜太郎居宅前二有之候、南北貳間、東西壹間半之内、壹尺八寸持出し有之小家壹ヶ所、右及破損候二付、建直し致度段、同人を被申出候二付、九月晦日右米喜へ及引合、書付取之聞済置候、尤右書付、本紙ハ津内空地堀一件、引出しへ入置候事、

覚

一、小艀船壹艘

滋賀郡馬場村

但櫓壹挺添

借り主市右衛門

右船松本浦船入二繫置候処、先月廿日風雨之節流失之様子二而不相見候二付、段々相尋候得共不見当由二て、浦々吟味之儀願出候間、浦限相糺右船有之候ハ、船主へ及通達可相渡候、此配符浦名下令請印早々順達、留り所可相返候、以上、

大津

御印 巳十月八日

御役所御印

大津始長沢迄

右浦々庄屋

船年寄

十月九日未ノ中刻

右配符坂本舟年寄召仕安二郎二渡ス、

東浦之分御文言同断、松本三ヶ所始り伊庭迄浦々庄屋、船年寄

松本浦方廻り平兵衛持参

湖上船運上銀今以不相納、等閑之至二候、此配符着早々上納可致候、遅滞致間敷候、其節此配符持参可罷出候、以上、

大津

割印 巳十月廿日

御役所印

須原 貸船屋

常楽寺貸船屋

右浦庄屋

船年寄

右之御配符御渡被成候二付、此節須原へ便り無之、依之常楽寺へ添状いたし、堅田市左衛門ふね二遣申候、尤ちん銭百文先取二いたし申遣候事、

覺

一、田地養船

滋賀郡和邇南濱村

船主次郎兵衛

右之船、和邇南濱村浜先ニ繫置候処、当月十九日西風強流失之様子ニ而不相見候付、段々相尋候得共不見当由ニ而、浦々吟味之儀願出候間、浦限相糺右船有之候ハ、船主へ及通達可相渡候、此配符浦名下令請印早々順達、留り所可相返候、以上、

大津

巳十月廿九日 御役所御印

御印

大津始長沢迄

右浦々庄屋

船年寄

右配符壹箱、同日午刻坂本源七江遣ス、

東浦之分御文言同断、松本三ヶ所始り伊庭迄、浦々庄屋、船年寄

此配符廻り五兵衛松本へ持参、

十一月廿九日

一、米壹表

右ハ石山寺方例年之通致到来候事、

一、当十二月四日北の町組上ノ番船ニ乗り被参候旅人之内、当津下片原町備前屋松兵衛と申者、矢橋へ着舟之折柄病氣差発り候付、早速矢橋村医師元仲を呼^をニ参候処、留主故子息被参呉大切之様子ニ候間、^{員被申}為候付乗合之旅人ハ不殘あけ、差急キ増水主を加へ押切戻り候処、舟中ニ而終ニ相果候旨右水主共方為相知候付、不取敢年寄太郎兵衛宅

へ打寄り、右松兵衛宿元へ其段申遣候処、同人妻并親類代徳兵衛同道ニ而参り見請被申、平生積氣持ニ候処、昨夜方差発今朝之出立ハ相止メ候様申聞候へ共、安養寺村ニ結構成御祈禱御座候而、心願之儀故押而出立仕候事ニ御座候故、舟中ニ而寒風ニ当り病氣重り相果候ニ全相違無之候得ハ、宿元へ引取乍此上養生相加へ見申度間、無故此俟御渡被下候様仕度旨被申聞、駕籠ニ乗セつれ歸り被申候付、

一札

一、下片原町備前屋松兵衛と申もの、東江州栗田郡安養寺村迄用向有之、今朝五時宿元を罷出候処、其御中間下方之舟ニ乗り矢橋へ着舟仕候折柄、持病之積氣差発候旨ニ付、其舟ニのセ歸り被下候段、同日八ツ時御為知被下候付、私共早速舟場へ罷越見請候処、舟中ニ而寒風ニ当り持病之積氣差発候ニ、全相違無御座候間、宿元へ連歸り養生為致申度段御頼申入引取歸り申候、然ル上ハ右ニ付跡方故障申者無御座候、為後日之一札仍而如件、

右松兵衛妻

文化六年

その印

巳十二月四日

同人親類

下関寺町

木綿屋藤右衛門

代徳兵衛印

百艘

年寄衆中

右之通一札取置有之候事、尤一札廻り与八ニ取ニ遣候節、右町内年寄方へ与八を呼、百艘衆方御役所へ御届被成候義哉と被尋候故、与八答置候ハ、御内義并親類衆病躰見届被申、引取被歸候義故、御届ニも不及旨申候処、定而左様可有之とハ存候へ共、為心得承置候と

被申候由、与八義罷歸り申聞候事、

一、酒三升入壺樽 矢橋へ遣入、

翌五日右酒持参二而孫九郎挨拶二参置候、

一、右北之町舟水主吉兵衛、鉄之助、靄三人也、

十二月五日、当所寒氣見舞

石原庄三郎様 鴨壺掛 二重繰台
下ヶ札付キ

元々

柴山泰蔵様

七里左六郎様

内堀繁太様

曾根源治郎様

船方

牧野九郎兵衛様

×五軒へ南簾一片ツ、

小頭

佐久間正蔵様

御門内組屋敷新建

名札計二而

目付

高橋角左衛門様

北出雲平殿

名札計二而

川嶋文左衛門様

多賀喜曾太様

右ハ銀一両ツ、

右之通与治兵衛、太郎兵衛相勤候事、とも平兵衛

覚

一、御納豆 五拾把

右者從御前様例年之通被下置、難有頂戴仕候、以上、

已十二月十二日 百艘印

觀音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

一、金子 百疋

右者從当津御家中様并御人足衆渡海為御挨拶与從御前被下置、慥頂戴仕候、以上、

已十二月十二日 百艘印

松岡市左衛門様

十二月九日、京都寒氣窺

東奉行

小長谷和泉守様

真鴨一掛 二重繰台
下ヶ札付

御用人

小林八左衛門様

赤間三郎左衛門様

松野小右衛門様

御取次

岡田長三郎様

山田保兵衛様

吉川吉介様

飯塚五郎作様

右ハ名札計ニテ

御公事方

山田釵治郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

加納萬五郎様

ノ四軒へ南鐐壹片ツ、

御公事方下

中川奎左衛門様

同定右衛門様

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

喜多尾八郎右衛門様

櫛橋平蔵様

森孫六様

吉竹勝右衛門様

ノ九軒へ手札計ニ而

西御奉行

牧野大和守様 真鴨二掛

二重線台
下ケ札付キ

御用人

小熊三郎右衛門様

香西伴介様

神山善太夫様

中村重右衛門様

右名札計

御取次

寫田民介様

岡野大助様

横溝市右衛門様

大野万左衛門様

右名札計

御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様

熊倉政吉様

ノ五軒へ南鐐一片ツ、

御公事下

上田八蔵様

柏原治部右衛門様

酒井惣介様

廣瀬佐野右衛門様

山田傳左衛門様

平川伴蔵様

浅賀和作様

町代田内与介様銀三刃

若狭屋八兵衛殿鴨壹羽

右之通孫右衛門、八郎兵衛相勤候事、とも五兵衛

一、観音寺町鍛冶屋六右衛門、火さい後難渋ニ付、持寄講取立申度、当

中間之義者、前々右躰得意之事二候へハ、加入致呉候様相頼、右六右衛門義者無如才職方相配候事故、年古キ別条之由縁以中間及相談候処、其時規ニより右^同得意と申二而も無之、勿論銘々加入致候義も難致、しかしなから双方互二年古ク用向承候へハ、格別之取計を以預掛ニして銀五枚差遣、尤已来迎も用向承候節者、組下無如才相勤候様申渡、則受取書取置候事、

右為挨拶と、鴨舌掛、酒二升被差出、一統相弘メ申候事、
一、加納萬五郎様此度公事役被蒙仰候二付、寒氣見舞之節為恐悦と金子百足遣候事、

十二月十五日

一、銀壹封拾匁 但し伏見屋七兵衛^ル持参

右者山田木内小兵衛殿^ル例年通到来候事、左之通請取書遣候事、

覚

一、肴料白銀壹封

右者木内小兵衛殿^ル慥ニ請取申候、以上、

巳十二月十五日

百艘印

伏見屋七兵衛殿

一、矢橋渡舟賃余錢其外取締方之儀二付、当十一月八日矢橋衆と会合いたし候一件、矢橋会合帳と申留帳を此度あらたに拵、委敷書留置有之事、

覚

一、金百足

右者辰年分朽木兵庫助様^ル被下置、慥ニ請取申候、以上、
文化六年巳十二月廿五日 百艘船年寄印
御用達

升屋六左衛門殿

覚

一、金百足

右者朽木兵庫助様^ル被下置、慥ニ請取申候、以上、

文化六年巳十二月廿五日

百艘船年寄印

御用達

升屋六左衛門殿

覚

一、金百足

右者当巳年為御挨拶^{アイ}被下置、慥ニ頂戴仕候、以上、

文化六年巳十二月

百艘印

膳所

御役人中様

右者十二月廿五日膳所船奉行中神藤左衛門様御使町同心山口重助殿御持参二付、如斯請取書認メ遣ス、

(上に横書)「但し当年^ル始り候事」

目錄

一、京都^ル包材木際川へ持越候一件、并尾花川町^ル山門^{三井寺}領舟積之儀二付受取候一札之写

一、米原舟式艘柳ヶ崎二而難風二逢候事

一、赤塚村出火二付見舞遣候事

一、吾妻川御見分

一、江頭帳屋又次郎代り傳右衛門二相成候事

一、京東御奉行小長谷和泉守様御登二付御出迎見送り之留并御初入御礼
二付田内氏之書状并返書之写

一、御高札一件

一、米原助十郎舟坂本浦二而水死人一件

一、江頭舟積之儀二付八幡浦之書状到来候写

一、御所司代酒井讃岐守様御登り

一、獅々飛下見分として京都御組様御下り

一、牧野様之山田浦へ藻草遣し候様被仰聞御断申上候留書

一、野田浦源蔵丸舟借り受遣ひ申度段願出候事

一、御上使井伊掃部頭様御登り并御下り二御蔵屋敷へ御立寄被遊候事

一、郡山御蔵裏石垣之義二付仲日野屋五兵へ掛合候一件

一、膳所御手舟二而若州御蔵之大豆御積取被成候一件

一、海津木舟二乗前荷為積度候二付舟年寄へ掛合候事

一、大津浦舟積場御尋二付書付差上候事

一、片田町空泊り二乗セ候旅人耆人矢橋浦二而病氣之事

一、当所若殿様御病氣二付御見舞差上候事、

右御全快被遊二付御祝ひ到来之事

一、竹生嶋開帳之歸り二当浦之乗舟之事

一、大坂御目附様当御役所へ御立寄不被遊直ク二御乗船之事

一、新地崎にて松本村伊助と申者致水死候一件

一、七里左六郎様押籠メ二御逢被成候所此度事済二付御祝ひ申上事

一、膳所船積一件貝七殿挨拶にて事済候事

一、七月九日大風二付所々二而難船之事

一、橋本町米屋喜太郎居宅前小家建直し之事

一、馬場村市右衛門艀流失御廻状、

和邇南濱治郎兵衛田地養舟流失御廻状

一、北之町上り番舟二片原町備前屋松兵へと申者病氣差出死去之事

一、鍛冶屋六右衛門難渋二付講之事

一、矢橋渡船二付取締一件

(裏表紙)

八拾四番 百艘

二、「万留帳」文化七年（二八一〇）

（表紙）

八拾五

庚 文化七年

万留帳

午 正月吉日

（本文）

目録

- 一、膳所御礼初り之事
- 一、御門吟助殿死去二付香典之事
- 一、川口町堀浚之事
- 一、利玄関堀浚之事
- 一、八郎兵衛船道下り北小松浦二而難船之事
- 一、風呂屋ノ関堀浚八まん屋之段橋本町へ掛合ノ事
- 一、芦浦観音寺様矢橋へ御乗船之事
- 一、横江濱、船木村の北小松村ヲ相手取出願ノ事
- 一、京御公事方入江様御退役跡役飯室様被蒙仰候
- 一、芦浦西川氏後室御死去香典之留
- 一、山王神事七本柳へ着船ノ義二付三井寺舟の着順之儀彼是被申掛候事
- 一、大浜御印場先ニ溺死人有之東八丁ノ者二而早ク落着之事
- 一、舟木船二入水人有之候事
- 一、今津七兵衛船則七兵衛致入水之事

- 一、当他屋町内へ買得被致候事
- 一、大溝分部様為御迎大溝の船印ヲ建当浦へ着船致候二付舟年寄へ掛合ノ事

- 一、京御奉行牧野様山門御修覆御見分
 - 一、貝七浜ノ持屋敷石垣積直し
 - 一、山門御修覆有之趣二付前以御公事方へ船積方之儀申込有之
 - 一、松本神社破損二付寄附之事
 - 一、石原様御実母様御死去被遊御香典差上候事并御忌中御伺
 - 一、金蔵堀二水死人一件
 - 一、伊庭門九郎艦船二而青物積入通行致候二付舟差留候事
 - 一、野田村弥三兵衛艦流失御廻状
 - 一、金蔵堀水中ニ水死人有之百艘へ取片付被仰付候御断之願書差上候事
 - 一、牧野様の櫓打銀之事御尋被成候事
 - 一、伊庭舟年寄門九郎義二付上津候事
 - 一、膳所網町出火二付見舞候事、且又魚屋町出火事
 - 一、嶋ノ関入水人一件
 - 一、山田浦源兵衛艦流失御廻状
 - 一、知内弥四郎心得違之儀有之掛合候事
 - 一、吾妻川さらへ御見分
 - 一、七里様御死去御香典
 - 一、浅小井橋船賃一件
 - 一、八幡喜十郎大濱崎二而難船濡米多当仲間を挨拶致候事
 - 一、内堀繁太様御元ノ役被仰付候事、跡町役篠田様被蒙仰候
- （下に横書）「船印之初祝義もの相互ニ無用ニ相究之事
- 一、北之町船へ旅人ふろしき包取残し置候事
 - 一、上組小舟ニ高張拵候事

- 一、堅田浮御堂へ寄附之事
- 一、伊庭門九郎艦二而青物等積、通行致候二付掛合候事
- 一、御役所御貯米土藏松本へ小渡候事
- 一、和邇南濱十右衛門を道下り難船ノ趣申来、段々吟味致候所、偽二而有之候事

文化七庚午歳

正月二日年頭御礼

石庄三郎様 金子貳百匹 目録台二のせ、下ヶ札付

元々

柴山泰藏様

七り左六郎様

町方

内堀繁太様

曾根源次郎様

舟方

牧野九郎兵衛様

右ハ金百足宛

目付小かしら兼帯

高橋角左衛門様

川嶋惣右衛門様、文左衛門様改名

多賀喜曾太様

小頭

佐久間正藏様

舟方下

北出雲平殿

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

小野宗九郎殿

町代

堀猪三郎殿

遠藤仁右衛門殿

右九軒銀壹両宛

肝煎

吉本^{弥四}孫四郎殿、孫三郎事改名

山本俵五郎殿

御足輕

稲葉半七殿

小遣ひ衆式人

右鳥目廿足宛

御門番吟助殿五百文

内義貳百文

白崎久太夫様

御門内新建

御藏番三人

平藏丁年寄

組屋敷不残、右ハ手札二而

右之通与次兵衛、太郎兵衛、供新八

京都御礼三日之处、当年ハ朔日節分二付、御所拜見三日ニ被仰付候二付、順礼之分二日ニ相勤候様飛脚来り、朔日ハ孫右衛門、七兵衛登京被致候、但勝手勤之分ハ矢張二日ハ登り三日ニ被初候処、いつもの通り御逢も在之候様承候、

二日、京都御礼

東御奉行

小長谷和泉守様

御用人

小林八左衛門様

赤間三郎左衛門様

松野小右衛門様

右八銀壹兩宛

公事方

山田釵治郎様

同

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

加納萬五郎様

右四軒金百足宛

中川奎左衛門様

同定右衛門様

平尾安左衛門様

中尾勇右衛門様

吉竹勝右衛門様

右八白銀一兩宛

西御奉行

牧野大和守様

御用人

小熊三郎右衛門様

香西伴助様

神山善太夫様

金三百匹 目録台のセ下ケ札付

御取次

岡田長三郎様

山田保兵衛様

吉川吉介様

飯塚五郎作様

中村重右衛門様

大野万左衛門様
■十九浦九十九様

右八銀壹兩宛

御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本多新左衛門様

熊倉政吉様

✕五軒金百足宛

公事方下

上田八蔵様

柏原治部右衛門様

酒井宗助様

廣瀬佐の右衛門様

右八銀一兩宛

町代

田内与助殿、白銀貳兩

筆工

奥田九右衛門、殿銀壹兩

下町代

藤沢傳六殿 藤村佐市殿

貳十足宛

東西御門番三百文宛 東西中番中江三百文宛

上町代中江、下町代中江五百文宛 小番へ三百文

追分丸屋四郎兵衛 山科大津屋孫兵衛百文ツ、

神せん町

宿鍵屋佐助三百文

// 下女江式百文

右之通孫右衛門、七兵衛、供五兵衛、荷持舟^(カ)太兵衛

✂ 金三兩三歩

銀式兩壹

銀一兩三十式三十三

◎ 五百文式ツ

三百文六

式百文三

百文式 外二大津在之、

正月三日、膳所船奉行

中神藤左衛門殿

外郎式卓^(棹)壹匁ツ、硯ふた二のセ

船方下

田八^(棹)喜右衛門殿

同壹卓

阿閉権三郎殿は相勤候に不及候へ共、最初を懸り役二付、御同人限り御勤中は、名札計持参二而相勤候様^事可申事、

右之通与治兵衛、太郎兵衛罷越候、とも五兵衛^{コト}

但当年初メ也、中神殿在宿二付致面会、同間二而致帶釦祝詞相演候、

外ハ両家共留主中付申置候、

兼而十五日迄之中と究置候へ共、例年三日二相勤候様可然事、

一、正月四日、初寄合、帳場勘定仕立例年通中飯在之候、
ヤきもの鰯
くしら汁

一、七日、惣番積、六日、組帳とし、

一、十一日、帳固メ祝儀、役人不残出勤、

尾花川、小舟入上下惣代、坂本新兵衛、関ノ治兵衛

右いつれも例之通持参もの存在也、

一、正月十五日、芦浦御礼

昆布のし

一、観音寺様

扇子三本人壹箱

但し扇子箱くりあし台、二重くり

不相替御逢有之、上より御酒并御節子被下、例之通相悦申候事、

御家中

西川五郎兵衛様

片岡喜右衛門様

下物

久松清右衛門様

右三軒へ扇子壹箱ツ、常ののし

右之通孫右衛門、忠兵衛相勤候、供与八

一、十六日、御門番吟助死去二付、為香典銀三匁遣し申候、右ハ遣候二不及候へ共、時の振合を以取計候事、但老母死去之時も白銀一兩遣し置候、

覚

一、百廿四銅壹ツ

一、四拾八銅壺ツ

一、三拾六銅式ツ

一、廿四銅四ツ

一、拾式銅十七

✕

右之通奉納仕候、以上、

大津

午正月廿一日

百艘

貴布祢御社中

正月廿一日、貴布祢御神酒、役人不残出席、相悦候事、

一、旧冬方川口町堀浚之義被及相談二候処、爰元は関々数ヶ所之事二候へハ、急々取^メセ^ワも^難致候間、町分^ノ可然取計被呉候様申置候春来出来上ヶ候二付、凡入用錢拾八貫文計懸候、中間^ノ三貫文計出し呉候様、升屋市左衛門殿内々孫右衛門方へ咄在之、於中間相談致刻合候而差出候も如何二付、何か之挨拶として金貳百疋遣可然趣二付、正月廿九日則孫右衛門、升屋市左衛門殿方へ持参いたし一礼申述置候事、已来之例二ハ成不申候、

一、此節干水二付、関々堀浚取付に在之処、利玄関白銀屋陸助殿より引請セわいたし浜先浚在之付、右為挨拶酒五升遣候、則六兵衛罷越挨拶いたし置候、二月十日

八郎兵衛船難船之事

一、二月三日積八郎兵衛船道下り、同五日北小松浦二而難舟致、同所舟道^ノ夜通し急飛脚兩人仕立被差越、六日朝五ツ時過、舟主八郎兵

衛方へ着被致、早速中間方へ被申出、則積出し問屋先へ通達いたし、右飛脚差返し置、中間^ノ孫右衛門、川七兵衛、舟主八郎兵衛、供廻り^ノ与八、積出し懸り之間ヤ升屋佐兵衛殿、志なや弥惣殿、手代庄七殿、万や四郎右衛門殿ハ折節病氣二付品屋手代相含被参、右何れも同道二而其夜四ツ時北小松浦へ着致、尤舟屋之内前以名染之惣助与申者、南小松迄迎二出、旅宿迄心懸置、則北小松豆腐ヤへ案内二預り着仕候上、難舟加子旅宿へ呼二遣し様子相尋候処、四日大津浦出舟ウバガ懷二懸り居、五日朝ミなみ氣二相成、堅田、真野之分舟揚候処風強ク相成、別而此砌之大渴水二付舟入へハ不通、最早跡へ不戻、勿論和邇浦へも不寄れ、帆二任し北へ走り、比良沖^ノハ頻二吹募、北小松浦へ走り辺候処、是又舟入へハ難困ヒ、無抛砂浜二いかりを入レ懸ケ^メ相守候得共、風波難凌危き舩舟道衆中見及早速懸ケ付、上ハ荷^ノ取揚ケ相働被呉候得共、何分手二余り舟道^ノ庄屋方へ被申出、即時村方家別惣出心有婦人迄手伝被呉、浜先ハ提灯、湖中水働故、浜二而か^ガりをたき出、夫之衆中相働被呉候へ共、大波打込水船二相成、乍併荷物ハ不残取揚ケ、怪我人も無御座、舟も不損、舟具等二至迄無紛失、空舟二して舟入へ通し囲ひ被呉候由、舟付加子相答候二付、早速舟年寄又左衛門殿宅へ参り候処、舟道一統寄り合被居、右加子申口之通相違無御座候二付、厚ク一礼申述、此方共漸只今着いたし、御村方へ挨拶二参り度申上候処、今夕ハ路次之勞れ殊二夜も更ケ、いつれ明朝立会之上与被申、其夜ハ旅宿へ引取申候、同夜村之下夕役を浜先上ケ、荷之番二被付候与申事承り候、

一、翌七日朝、舟道案内二任セ、舟入浜へ参り候処、舟道一統立会之上船并舟具浜二積寄セ有之候荷物とも被相渡、一切紛失無御座受取申候、夫より此方共加子与積出シ、問ヤ与立会印分ケいたし、万四郎出同所揚ケ之分、上粕四拾八俵、下粕四俵、着所方呼二遣し浜先二

而相渡し申候、且又升佐出南小松分下粕八拾俵、八郎兵衛船江積入
戻し揚二致候、品や出和邇行之分正ゆ粕百九拾五俵、是も舟へ積入
内五拾八俵ハ無難ゆへ和邇へ戻り揚ケ二致候、残り濡れ之分百三拾
七俵大津へ積戻り、嶋ノ関へ揚ケ立合品やへ相渡し申候、

一、小松浜二而舟道与立会相済、夫舟年寄五左衛門案内二而庄屋門三
郎殿方へ参り、右之一礼挨拶いたし、同村之惣代両家へ参り、是又
同様挨拶いたし引取候、右二付北小松浦へ差出し候為取替難舟浦手
形左之通、

一札之事 舟道を見せられ候下書之通認め遣入、

一、八郎兵衛船、堅田方北小松迄肥物荷物積合、去ル五日当村ニおゐ
て俄二大風ニ相成、風波難凌御当村舟入口ニ而いかり懸ケ合候得共、
何分大風ニ而水舟ニ相成、早速御村方衆中大勢御出合被下、右積荷
物ハ不申及、舟も無別条舟人へ御引入被下候段、千万泰奉存候、夫
ニ付早速御知らセ被下拙者共参り、右之舟荷物無相違御渡し被下候
様申達シ候処、此儀も無滞御渡し被下、忝慥ニ受取申候、依之、舟
荷物ニ付外方何角違乱申者有之候ハ、我等罷出急度埒明、御村方
ハ不申及、御舟中間江も少も御難懸ケ中間敷候、為後日引取証文一
札仍而如件、

文化七年

庚午二月七日

北小松浦舟年寄又左衛門殿

孫治郎殿

難舟場所北小松浦方大津浦へ取之候難舟浦手形左之通、

一札

一、大津八郎兵衛船、堅田方北小松浦迄肥物荷物積合、去ル五日当浦ニ
而大風ニ出逢、波打懸難儀之躰御座候二付、早束舟方并村方人足差
出し、荷物類取揚ケ并船具等取集メ、立会之上相改不残相渡し、出
入無御座候、為後日浦手形仍而如件、

文化七年

庚午二月七日

大津百艘船年寄

孫右衛門殿

七兵衛殿

舟主

八郎兵衛殿

右二付北小松浦へ謝礼之覚

一、酒貳斗
するめ三把
村方出夫之衆中へ

一、酒壹斗
するめ貳把
右同断、若衆中へ

一、酒壹斗
するめ貳把
舟道衆中へ

一、酒三升
するめ貳把
舟年寄兩人へ

一、南鐙壹片
舟年寄又左衛門

是ハ難舟之加子水濡れニ而勞れ候故、舟宿も無御座所、彼宅へつれ
参り、別而厚ク介抱いたし被呉候二付遣入、

一、五百文
舟道ノ内惣助へ心付

是ハ先達而大津浦へ参り、舟乗りいたし名染之もの故、別而厚きセ
話いたし候二付遣入、

払ひ

一、金壹歩
三百文

五日夕夜通し
北小松より大津迄

飛脚兩人賃錢北小
松舟年寄方へ相渡

一、六貫貳百五拾文

難舟場所夜分
かざり何角諸人用

右舟年寄方へ相渡

一、五貫三百四拾文

遣ひもの
酒四斗三升

同所
いせや文蔵へ渡

但し酒や詰合二より四斗四升五合代払、百廿文かへ

一、壹貫八拾四文

遣ひものするめ九
把代、百廿文かへ

豆腐屋茂八へ渡

一、五百文

五日坂本より北小松迄 人足賃

一、百文

山ノ下タニ懸り居候大津舟之内より難舟の様子知ら
せ大津へ向ヶ参候者、途中三而逢酒手として遣ス

押手宗吉へ渡

一、金壹歩二朱
七百七拾文

北小松旅宿払 宿豆腐屋茂八へ渡

一、壹貫三百七拾八文

上下往来之入用方

✕

右村ハ御領之所、凡家数貳百軒計之在所二而四組二分り有之由、依
之一組二酒五升当テニして貳斗、又若衆中へ酒壹斗、且又舟道へ酒
壹斗、同三升ハ舟年寄両名ニして遣ス、此所小浦舟道之義ニ付、右
之仕合ニ而村方出夫之衆大勢殊ニ春寒之節夜分与申、難舟浜之諸入
用も別而多キ事ニ承リ、夫故舟年寄へ申聞候処、相断入用錢高被申
出候間、右ニ記し置候通払申候、右礼物濟セ此方共引取節、舟年寄
又左衛門殿宅ニ而無滞相濟候、盃出され双方互ニ盃濟セ歸り申候、
但し右之遣ひものハあらまし舟年寄ニ承り合、其上見計ニいたし遣
し候事、

右八郎兵衛船道下り積口

一、上粕貳拾俵
下粕貳百廿四俵

真野行

品屋弥惣出

此分五日朝揚ヶ無難

一、正ゆ粕百九拾五俵

和邇行

右同人出

内五拾八俵ハ無難、和邇へ揚ヶ渡、残百三拾七俵濡ノ分積戻ル
一、下粕八拾俵 南小松行 升屋佐兵衛出

此分濡れながら揚ヶ渡

一、正ゆ粕拾六俵

堅田行

万屋四郎右衛門出

此分五日朝揚ヶ無難

一、上粕四拾八俵
下粕四俵

北小松行

右同人出

此分濡れながら揚ヶ渡

✕

二月三日積、但し壹俵も紛失ハ無御座候、

一、干水ニ付関々堀浚在之處、風呂屋関も段々埋在之付、他屋中江及引
合、夫々揚先江も懸合被呉候様及相談候へ共、区々ノ了簡ニ而難相
調、依之他屋中時のきニ堀浚候段、木地屋忠兵衛、親市左衛門、大
坂屋六兵衛被申来、北隣万屋四郎右衛門前より当会所迄凡十一間、南
隣塩屋藤助前五間、✕十六間六貫文、内壹貫五百文万四郎より差出ス、
藤助ハ浜ハつかい不申、近頃宿這入事故断被申候、為挨拶と諸白貳
升被差出候、大坂屋六兵衛前五間、南隣間屋小兵衛前五間、✕十一間
三貫文被差出候筈、右間屋小兵衛藤助同前ニ而除ヶ置申候、木地屋
忠兵衛前より南へ凡十七間計、木忠引請四貫文ニ而別請負ニ被堀候、
にし千之助、当会所万四郎、大六分✕九貫文、二月十四日ハ堀懸ル、

請負尾花川宇右衛門、同町黒鍬相渡ス、

内四貫五百文中間出し、壹貫五百文万四郎

三貫文大六

×五百文

右之割合ハ時之振合を以取計候事故、已來の例ニハ不相成候事、

右被堀立候処、木忠前ハ直段相応ニ而余程あらく相見候二付、木忠相招、此上同様ニ被堀立候様、無左候而ハ、錢三步出し、ろく二不掘杯と申候而ハ近所ノ手前も不宜、勿論一鉢之義ニ而不相濟候ハ、無如才手伝方へ被申付可然申達候処、御尤之事者随分出精為致、弥不引合候事二候ハ、まし二而も少々遣し何分同様ニ為堀候様被申之候、

一、二月十七日、橋本町年寄翁屋小兵衛、五人組品屋惣兵衛、坂田屋甚右衛門、塩屋七兵衛、右之方へ勘三郎参り、此節干水二付外之関々一統堀さらへ在之候へハ、大橋奥も夫々浚被成下悦入申候、然る処八幡屋之段近來二大二埋り在之候へハ、乍御セわ御町中御セわ被下堀浚出来候様御頼申上候、依干水入船出這殊之外難儀仕候間、此段中間御頼申上候、夫々申置歸ル、

一、橋本町年寄翁屋、五人組品惣同意ニ而申來、跡寄町内寄合致候処、明和寅年堀浚之節右場所ハ中間堀浚被致候趣、町内之留書も在之間、町内堀捨候こもくは取のけ可申候へ共、水中ハ御中間堀被堀候様被申來候、孫右衛門承之、右之段中間相談いたし跡御返事可申段申置、

芦浦観音寺様山門江御碩学ニ御出被遊、御帰館之節、二月十七日俄二小舟入より御乗船、矢橋浦へ御越し被遊度被仰出、則御近習其由被申來候二付、早速小舟仕立テ差出し、御機嫌能御越し被遊候、俄

之儀ニ而舟中場取繕ひも不行届候二付、則御近習迄無存懸ケ急卒之御断申上置候、但しハツ時過二小舟入浜へ御ひろい被遊、右御道勢侍分御兩人、僧御壹人、供壹人、至而輕き御行粧ニ而御忍之由二承り候、右舟賃与して貳百五拾文被下、下ノ小舟七兵衛舟へ相渡し遣入、加子三丁同夕方二歸舟いたし候、如此無存懸ケ仕合ニ而御召船之取繕方等甚不行届事故、翌十八日、御家老西川氏迄御着岸御悦旁、御前御乗船之砌不敬之段、宜御取合セ被下度御断書、左之通差出し候事、一筆啓上仕候、春寒難退御座候、益御勇健ニ被成御座、珍重之御儀奉存候、然者昨十七日御前様就御帰館、小船入浜ハ矢橋浜迄被遊御乗船候処、御機嫌能被為在御着岸恐悦奉存候、右二付当浜之儀者突掛被遊御越候儀故無存掛、何之取繕も不仕不敬之儀共甚奉恐入候、此段幾重二茂御高免被成下候様、乍恐御前宜御取成奉願上候、先者右御断御挨拶迄、以愚札奉申上候、恐惶謹言、

二月十八日

大津百艘年寄

西川五郎兵衛様

猶々小船入浜御乗船被成下候儀、千万難有仕合奉存候、右二付直様御礼参上可仕候処、乍不驥以書中右御礼奉申上候、失敬之段真平御宥免奉希上候、以上、

当関堀浚二付、前書之通隣家近江屋藤助諸白式升被呉候、尚又堀浚之請負之者方已來も可相頼ため二候哉、鮎式枚くれ候二付断申候へ共無抛申二付、ふなハ会所二遣ひ、諸白二升切手、壹升ツ、大六、万四郎江右之訳申聞遣し申候、

一、高嶋郡横江濱、船木村ハ北小松村を相手取旧冬願被出候処、段々御糺中、当二月十四日百艘被召出取曖可然旨柴山様方被仰聞、右取曖

中留書有、別帳二記在之候事、但網漁之事也、

一、三井寺政所宇野少進殿を長持寺卓櫛笥を本片岡行二付、吉田船二積
又、段々及引合乗前銀壺匆四分、貳百五十文、二月廿二日^{与治兵衛、勘}

三郎直々請取歸り候事、委細ハ藏用留帳ニも記在之候、

一、二月廿日、船方牧野氏を御召二付孫右衛門罷出候処、高嶋郡新庄を
阿曇川渡し舟之義二付願差出候付、河原市之者、或は其辺之訳承度
候間、舟木村去年登り合居候へ共不相分候間、今津船直キ乗の者ニ
而も居候ハ、承呉候様被仰渡候、無程右書付来ル、
先刻之艀船名前人相知候間、最早申聞ニ不及候事、

二月廿日 湖上方

一、二月廿八日、朽木様を例年之通、炭式俵被下置候事、升市取次

上巳御礼

石原庄三郎様

青銅百疋、木札附^(張紙下)「百艘□□□□」

御元々

芝山泰蔵様

同

七里左六郎様

御町役

内堀繁太様

同

曾根源治郎様

御舟方

牧野九郎兵衛様

此分五軒、鳥目五十疋、紙札付、下々二出札之名前を記、
右之外御門内并御組屋敷不殘、北出雲平殿手札計

孫右衛門、川七兵衛、供廻り五兵衛相勤ル、

一、前段二留書在之候八幡屋段堀浚之儀、橋本町元録^(録)年中を享保、明和
寅年等、其時々留書在之、勿論坂本町連印ニ而、彼場所ハ兼而百艘
浚場と申義、御役所へ書付差上在之候へハ、其後切替り候義も在之
候欤、なんぞ申立無之候而ハ町分を堀浚候義ハ難致趣、尤当中間ニ
も享保年中差上在之候書付、并ニ去ル古望一件之節申立ニ茂、橋を
北八百艘浚場と申上置候事、^{夫故}当中間を浚立候節ハ、夫々揚場之衆
中江懸合可申事候へ共、當時之振合ニ而ハ一円ニ中間引請堀候様
銘々心得被居候、^{夫故}夫故容易ニ熟談も難調、表向及引合候而ハ自然不
熟之儀等在之候而ハ其向も難差置、旁不得止事御願申上候道理ニ相
成、其レニ付而も、橋本町ニも當時御役方へ入魂ニ致候仁あれこれ
在之、何分六ヶ敷時節、^(角脱カ)兎申而今更打捨置候義も心外候事ニ付、以
勘弁町内木屋嘉兵衛江与治兵衛を熟談致、双方意味立候而者何共難
ヶ敷事ニ候間、此度義者其元了簡を以内々御取計被下、双方已来差
支ニ相成らざる様勘弁致被呉度、段々入魂いたし候処、當時右嘉兵
衛殿ハ少し穩徳之心得在之仁物ニ付、能吞込被呉御尤ニ存候間、一
応相考可申段被申聞、其後被申聞候者、^{依之}切於町分内々両三人熟談い
たし候処、仰之通表向ニ而ハ難相調、^其下候ハ、上ハごもく^ハの^ハ処、随
分可成丈余慶取捨させ可申間、其余ハ御中間を御さらへ被下度、尤
水際之事候へハ、万ニ^其此候ニ而御打置被下候而ハ意も立申さす間、
此段双方相含可申段被申候ニ付、与治兵衛答候者、思召候段忝存候
へ共、夫ニ而ハ矢張上へ下々の差別在之候而、心かゝり二候間、し

からは御町分を離、当時重立役関^(席力)を御遣ひ被成候、御銘々或ハ貴公様、坂甚殿、米喜、塩七殿、古望氏、若六杯へ別頼二いたし、御曆々事候へハ、強而御いとひと^も在之間敷、勿論格別之大金と申事二も無御座候間、大牀銘々壹貫文つゝ御出被下候へハ出来可申間、右様之事二いたし候而ハ如何可有之哉と色々申咄候処、尤二存候間、今一応内談いたし見可申^{旨付}、二月下旬又候面会いたし、扱右之段咄し合候処いろくの仁物在之、兎申而のけても不被置、甚困り入候もの二御座候、此上ハ前段之通、たとひかゝり物ハ少し余慶二而も出し可申間、筋合をわけ呉様被申候付、其筋合をわけ候義が甚六ヶ敷御座候、しからは上へ下タなし二只惣堀二いたし可申間、其内を御町分ハ半分御出し被下度、勿論此度義ハ双方是切の事二いたし、重而例二ハ相互二いたす間敷段申談候、其趣二相究メ申候、

一、三月二日、請負人黒鍬尾花川卯右衛門呼二遣し、場所見分いたし相談致候処、東側角ハ南大橋際迄、凡拾三間計在之、仍而廿六坪二相成夥敷埋り在之間、壹坪三百文位の積り二而、錢八貫文二而渡し堀二いたし、尚又北側之所ハ格別埋り無之、勿論此節石垣そんし在之二付、家主みのや庄兵衛殿ハ普請二而も被致候義哉、水中の落石等拾ひ上ケ在之、西ハ彦根他ヤ地境に彼是六ヶ敷場所二付、先此度ハ手ざし不致、只其俣二致置、又時節を見合渡可申、太郎兵衛、孫右衛門、与二兵衛相談之上、右之通二申渡候、翌日年寄翁屋小兵衛方へ孫右衛門参り、先達而御返事被下候渡之義、御内談を以弥四郎ハ為掘可申間、乍御苦勞右場所へ御出被下、思召之義等御座候ハ、無御遠慮御談し被下度旨申入候処、此節年寄代り船屋源兵衛二相成申候、右被仰聞候段拙者方ハ申達可申、御念入之御義御座候与被申候、同日、与治兵衛、木屋嘉兵衛殿へ致面談、八貫文二而渡し申候間、

弥半江御渡し被下候様示談致置候、

一、大橋下之義ハ小唐崎町其外ハ三丁ハ堀可被申例二而、近来尾花川ハ頼二付堀候間其節も引合取不申、又此度其俣二いたし置候而ハいよく例二いたし而もあしく候間、町分ハ可然通達致置可申段嘉兵衛殿被申候二付、如何様共宜御取計被下候様申置候、尤橋下ハ深く其上右之振合二付、此度中間ハ堀不申候事、右一件ハ此度限の事二而例二引不申、勿論内談候事故橋本丁ハ坂本町へも沙汰不被致由被申候、右二付此段町分二も右之旨被留置候筈二候へハ、至後年能相考任時宜可申候事、

一、二月七日、芦浦御院下小船入ハ御乗船在之候付、翌日為御挨拶西川五郎兵衛殿迄書状差遣候処、但前二留書在之、三月二日右西川氏ハ返翰来り候、本紙在之付略文、

一、前段之通当風呂やの関堀さらへの義ハ、坂本町、橋本町共已前ハの留書扣も在之趣二而、夫々持場所も在之趣、当中間二ハ急度いつ方くと申慥成扣も見へ不申候へ共、セわいたし中間ハさらへ候へハ、夫々揚場江懸合可申義御座候得共、年久敷事故揚場の衆中も変り、二相成、此度急度相改候も前段之通六ヶ敷折から二付、跡之かまひ二不相成様引合置申候、兼而此段相心得可申事、橋本丁ハ申被居候ハ、大橋奥ハ銘々居宅前限二堀申候、橋北東側の所も八幡屋の段同様二而、百艘ハ堀可申候旨被申居候、大橋下ハ京町辺三丁の懸り之由二御座候、

一、右之通坂本丁、橋本丁共被相心得居候趣候へとも、万一なかれ物又ハ捨身捨子にても在之候ハ、近来東側へ度々流寄候節、坂本丁ハ引請セわ被致候事候へハ、向側も右同様二相心得可申事、

三月十五日

一、鱒三本 沖ノ嶋

右ハ例年之通到来致候二付、即刻貝半へ預ケ置候事、使与八

一、京都西御公事方入江吉兵衛様御義、願二付御役御免被^蒙下候二付、跡役之義者飯室助左衛門様へ被仰付候二付、則三月九日年寄孫右衛門上京致候節、例之通御悦与して金百足持参いたし相勤申候事、

三月廿六日、勢田橋本権兵衛被来、如例ウグヒ三十尾持参二付、即刻当役中江配分いたし候事、使新八

一、四月朔日、例年之通日吉御神事御配符四箱、増加子御差留添触壹通、当浦とも合六通御渡可被成候、則左ニ記ス、

一、御配符壹通 大津百艘船持

但し御文言例之通略之、
来ル十三日

日吉御神事神輿船割賦之事

堅田浦

丸船貳艘 水主九人
外楫取壹人宛 船年寄

但百八拾石積る貳百石積迄

二宮方早船

今津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 宗右衛門
外楫取壹人

同壹艘 右同断 十左衛門
同壹艘 右同断 八郎右衛門
同壹艘 右同断 船年寄

海津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 善八
楫取壹人

同壹艘 右同断 長次郎

同壹艘 右同断 甚兵衛

同壹艘 右同断 船年寄

塩津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 半兵衛
外楫取壹人

同壹艘 右同断 孫三郎

同壹艘 右同断 佐小右衛門

同壹艘 右同断 源六

右之船例年之通致吟味、来ル十三日以前大津江着船可致候、尤服忌差合之もの相改可申候、此配符令請印早々順達、留り所可相返もの也、

午四月朔日 石庄三郎御印

堅田浦

今つ浦

海つ浦

塩つ浦

右浦々

船年寄

朔日午刻片田通ひふね政次郎へ渡、

一、牧野九郎兵衛様を增加子御差留之添触

右片田浦始、今津、海津、塩津迄、片田政次郎へ渡、

一、御配符 壹箱 是八即刻坂本柳町与兵衛渡也、

但し御文言去寅年二記有略之、

坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川、本堅田、同體方、西之切釣漁師、

今堅田、小の、和邇南北濱、五ヶ浦、南比良、北比良、南小松、

北小松 右浦々庄屋、船年寄

一、船割賦 壹箱 日吉御神事之節御馬船

船数七艘

但し御文言例年通略之、

山田浦、矢橋浦船持

二日北山田甚之助へ相渡、

一、御配符 壹箱

但し御文言前之通り略之、但し寅年留アリ、

矢橋、南山田、下笠、駒井庄大萱、穴村、志那、吉田、中村、

津田江、下寺、下物、山賀、森河原、杉江、赤ノ井、矢鷲、大曲、

開発、木濱、今濱、水保、戸田、五条、幸つ川、小濱、吉川、堤村、

安次、^(須)深原、野田、比留田、野邑、小田、江頭、田中江、加茂、

牧邑、大房、長命寺門前、南津田、舟木、八幡舟木、八幡町、右浦々

庄屋、船年寄

是ハ小舟之会所へ孫七持セ遣ス、

先触 石原庄三郎手代

御用 牧野九郎兵衛

百艘を浅井郡曾根村、夫を雨森村迄

覚

一、人足三人

右者就御用我等儀、明九日未明大津出立、左之通罷越候条、於宿々

御定之賃銭請取之、無遅滞可被差出候、尤川越、渡船等之場所、前

宿を及通達、是又無差支様可被取計候、此先触早々継送り、長濱宿

を浅井郡曾根村へ早々可被相届候、以上、

^(割印影) 石原庄三郎手代

午四月八日 牧野九郎兵衛印

百艘、矢橋、草津、守山、武佐、九日泊愛知川、高宮、鳥居本、

米原、長濱 ^{此先触着早々雨森村へ可被相届候、} 浅井郡曾根村、十日泊雨森村

右宿々村

問屋

年寄中

庄屋

追而北郷村江書付、曾根村を早々可被相届候、以上、

外二屯通左之通

書付御役所

江州浅井郡北郷村

右之通御役所を為持被遣候二付、八日午ノ刻後、矢橋浦へ添状いたし、

小船入を相達候事、

四月十一日

一、山王御神事御配符、山田浦へ先二遣候、為挨拶酒二升持参致くれ候、

一、三月晦日、橋本町年寄船屋源助堀浚割合凡半分通、銭三貫八百文持

参被致、孫右衛門受取申候、源助被申候者段々御セわ忝奉存候、此

已後八町分もせわいたし、ちりあくた為捨ましく段被申候、

此方答候者、堀端八百屋勘兵衛酒^(通)ごもく大クはき込被申候、得^{とく}

と被申遣被下度申候処、町内^(通)早束使やられ候事、

一、芦浦西河五郎兵衛殿後室死去二付、為香典昆布一包、代錢三百文、書状差添四月廿日、廻り与八悔二遣候、

一、北小松^ろ網出入之せわいたし候二付、汐鱒三本被呉候、

一、木屋嘉兵衛殿前段之通堀浚之義何角内々セわ被致候付、尤此節自分蔵普請も在之付、ありなしニ与次兵衛口上を以右鱒三本為持遣候、四月十八日

四月廿六日、大坂御目附御双頭様、勢田川筋獅子飛、供御瀬御順見御越し可被成旨、御役所より被仰渡候二付、例之通舟之手当テ致置候処、雨天二付御延引、

四月廿七日、大坂御目附、勢田川筋獅子飛、供御瀬御順見、御案内方若狭ヤ八兵衛殿

長崎半左衛門様 扇屋の関御出迎、孫右衛門、六兵衛、供平兵衛

牧野式部様

例之通御供舟差出ス、右御二頭様故小舟四艘差出し、無滞相勤メ候事、

端午御礼

石原庄三郎様

青銅百疋、木札附

御元々

柴山泰蔵様

同断

七里左六郎様

御町役

内堀繁太様

同断

曾根源次郎様

舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒江島目五拾疋つゝ、

右之外御門内新建御手代衆并組屋敷御同心衆不残、北出氏共名札計二而相勤候、与治兵衛、六兵衛、供与八

一、当四月山王御神事之節、於七本柳二如例年御召船を始メ順々二着ならべ、年寄船之義は御供舟之次へ着置、其次へ川口弥蔵船、次三井寺政所船と順着之積り二致置候処、弥蔵船はいまた不来、三井寺はいつ茂^ろ早ク七本柳江来り、百艘年寄船を三井寺船之次へ着置候様、三井寺船の加子の者を以年寄船へ被申越候二付、当中間船之義ハ外見物船とも違ひ御用旁参居候事故、着場手遠ク相成候而ハ自然御用之節不便^み通り、尤例年相究在之候儀二候へハ、矢張此俣二致置可申段申遣候処、しからは年寄中三井寺船へ被来候様被申越候二付、太郎兵衛、孫右衛門参候処、重之衆中ハ面談不被致、右被申越候船頭坊主取次二而、前同様彼是被申居候二付、前々^ろ着船場所は夫々相定り在之候間、外へハ着不申段答歸候、然る処、御奉行船へ右船頭坊主罷越、何分百艘年寄船者前々^ろ三井寺船之北へ付義候間、其段被仰付被下度旨被申上候処、則御奉船^(行脱カ)二者内堀繁太様、岡田大八様外御若手御乗船在之、内堀様早答二被仰聞候者、百艘船ノ義は此方

御用向も在之候間、手遠ク為着置候而ハ勝手悪ク、尤例年着場所は相究在之、外へ為着候義は申付かたく、夫とも達而被仰立候義二候ハ、表向二而御申立可被成旨被仰渡、依之無是非船頭坊主は御引取被申候、無程内堀様方呼二来候、太郎兵衛参候処、右之趣三井寺方へ申聞候間、夫二而宜候哉と被仰聞二付、難在奉存候、随分右之通二而宜御座候、先刻私共方へ参候節、乍恐只今被仰下候通同様二引合申候、其上不得止事奉申上候義二奉存候、しからハ兼而其段相含居可申段被仰渡、難在旨申上引取候、

右之通二付定而川口船来り候ハ、又彼は申懸候哉と存候処、最早夫切二而沙汰も無之候、

全体^是当迄船積之義二付而も、何角気障り候事茂も在之、当年は年寄共心得候而内々三井寺船へ参り、御用向之義も無御座候哉と挨拶致可申所存二候処、以之外おとなげなき致方二付、しかし三井寺二而引合之後二、今日者御一同様御苦勞二御座候、私共隨身之御用も御座候ハ、可被仰付旨申置帰候、

四月廿九日、与次兵衛^{カネ}金藏^{カネ}方東へ帰候途中二而、内堀様二出合候処御呼止メ被成、態々申遣候程之事二而も無之、幸ひ見懸ケ候付咄置候、定被承居候哉、当山王神事之節七本柳二而其中間年寄船着場所之義二付被聞及候通、三井寺へ返答致達而之義二候ハ、表向二而可被申出段申置候処、二三日已前公門所役人御役所へ来り申候者、表向二而調へ受候様被仰聞候へ共、寺門二も急度証拠も無御座候へハ、此義は御内分二而御聞濟被下度、表立不申候様是限二致呉候様申之ニ付、此方^カ吟味二及候義二而ハ無之候間、其御心得二御座候ハ、是限二承置、沙汰なし二致可申段申遣候間、此段得と相心得居候様乍途中被仰渡候、与治兵衛段々御苦勞、殊二七本柳二而御早答被成

下、御心配之程猶更難在奉存候、只今被仰渡候趣慥二承知仕候段申上、引われ申候事、

右二付翌三十日朝、内堀様御宅江百艘年寄名札持参いたし、孫右衛門御礼申上候事、

五月六日申刻

一、堅田小いと船^カ小鮒十七八枚^{まい}計到来、退刻^{即カ}役人中へ配分致候事、

一、五月十日未刻、從御役所急御配賦^カ通、高嶋郡下小川村へ相届ケ候様被仰付候付、即刻飛脚を仕立差遣ス、但し中間方添状遣し候、雨天二付賃錢^カ貳貫貳百文書加へ申遣ス、飛脚名前了徳町市兵衛

一、五月十二日朝、京都東御目附方吉岡兵次様、西御目附方菊池次左衛門様上ノ

右御兩人様矢橋へ御乗舟被成度義二付、当駅方案内有之、小舟入浜へ御出二付、即刻舟差出し候事、

一、五月十二日早朝、川口丁^カ使来り、大濱御印場先二溺死人在之候旨、為相知^カ被^来候^二間、則与次兵衛孫右衛門^カ町年寄大濱へ参り見分致候^カ処与治兵衛同道二而同町年寄菱屋治郎兵衛殿方へ参り、只今見受候^カ処女之死骸在之、尤昨日ハ向風^{サキ}二而流来候者共も相見へ不申、捨身致候者二候哉、尤堀二拔捨候物も無御座候へ共、一昨辰五月在之候同様之義二御座候へハ、其節從御役所被仰渡置候通、御町内^カも御届ケ可被成義哉と相尋候^カ処、只今町内兩三人寄咄合候へ共、町内^カハ御届不申候旨右治郎兵衛被申、しからは此方ハ御船懸り役江御届可申間、何れ御町内御苦勞之義も可有御座段申置、於御役所船方

牧の九郎兵衛様へ口上二而、右浮物之義御届ケ申上候処、暫差扣候様被仰渡、其中御目付衆中江も内届致し九ツ時分罷出候処、牧野様一昨年右躰之義在之候振合二而、町方立会只今検使二可参旨被仰渡候二付、私共義ハ何か不取敢御届ケのミに罷出候、夫故何之用意も不仕、尚又町方御役所二も未出不申候、乍恐一昨年ハ御町懸り方町内を御召出、其上町内方何角取計致候義哉と存候、左候ハ、此度私共方御町方へ御届不申候而も宜御座候哉と申上候処、場所二待受居候ハ、宜段被仰聞、しからは弥私共懸り二相成候ハ、諸入用、諸浦懸り二相成申候二付、委細書付差上候様先達而も被仰付候へハ、右死骸なふり候者私共方雇候而ハ自ラ高料二御座候、下小や二而も被仰付被下間敷哉と申上候処、左様之義二も御座候へ共、此度之義ハ粗人主も相知レ候様噂も有之、差懸候事故急々其方二而相雇候様しからは暫御待可被下候、用意出来次第可申上段申上置、中保丁小歩久米と申者、川口町小歩と兩人二而、壹貫貳百文二而相雇、但引上ケ候而長持二人、夜分初夜迄番致シ山迄送り候而右之通也、則用意出来候此段申上候処、為御検使と牧野九郎兵衛様、北出雲平殿町方御目付高橋角左衛門様、手塚熊太様、町代遠藤重五郎殿、右立会二而御検使相済、尤大向風二而壹町計流出候付、艀二而取二遣候、船方ハ直様御引取被成、御印場行事之外右段之上へ上ル、高橋様川口町町役呼二御遣被成、鳥乱之義も無之哉、御尋之上暫立宿之用意可致旨被仰渡、浄願寺へ御入被成候、百艘、町分御呼被成、右死骸者西今嵐町之者二而、此節上東八丁錢屋七郎兵衛方二居候者之由風聞致候へハ両町共呼遣候間、弥夫々相究候へハ、宜候へ共無左候ハ百艘へ、引請とか町内之引請とか、いつれとも可申談置被仰渡、則双方申談候処、一昨辰年同様之振合二候へ共、此度は堀二捨在之候物も無之、しかし昨今先風二候へハ、打寄候者とも不被存、全捨

身之躰二相見へ候へ共、下タ二而とかふ相究義も難致、何分御下知次第二致間敷哉と、双方申談置候処、其中両町共来り申上候者、西今嵐丁二貝屋治郎兵衛と申者御座候、十日余り已前頓死仕、元来独身者二御座候処、不寄存家内二右之女居合セ候付様子承候へハ、上東八丁錢屋七郎兵衛方二居候下女二而、被雇ハ来居候由申也、其後右七郎兵衛方江歸り申候而、当時七郎兵衛方二居候者二御座候段申之也、七郎兵衛申候者、生国いセの国の者二而、前方私方二奉公仕居候得共、廿五ヶ年已前いとま遣歸国仕候処、身内之者もなくなり候而、又候近来登り来、已前遣ひ候者の事二候へハ、私方二差置方々江為雇遣、此節今嵐町治郎兵衛方へ為雇居候内、右治郎兵衛も相果申候、然る処ほトなく痲症之病発り折々不心成義も御座候二付氣ヲ付居候中、今朝明ケ方二拔出、いつ方へ参り候哉と相尋居候事御座候、何分右之訳二御座候得ハ、少々入込候義も御座候間、乍恐御賢慮を以宜御取計被下、死骸も被下度段被申上、其段御聞済被成、依之上東八丁之引受二相成申候、

右之趣二付、御慈愍二御取計を以、品^{能カ}札被仰渡口書相済、御役所へ御引取被成、百艘之義ハ町代部やに相待居候処御伺相済、東八丁町役計御召出し於御前死骸被下、高橋様当会所小脇二て百艘御呼二被成、立会死骸相渡候様被仰渡候、

右之通二而存候外早ク落着いたし、尤辰年之振合とハ少し違ひ申候、右雇賃壹貫貳百文、艀かり賃四十八文

外二少酒手、右ハ東八丁ハ直二相渡ス、其外諸入用札金等東八丁ハ被相勤候事、

高橋様、手塚様、町代遠藤氏

牧の様、北出氏、外二御目付二軒

右之通名札二而孫右衛門札二廻ル、御前二而御立会ハ曾根源次郎様

ノ由、

右一件書付致呉れ候様相頼置候間、筆工武六、筆料式勿計中間_方遣し中間払、

十四

十三日、東八丁年寄いか屋治郎兵衛

酒三升切手持参、礼二被来候、

今嵐町_方何らあいさつ二も不来候、

一、五月、西河五郎兵衛殿忌明礼状并為挨拶白銀壹両来り申候、
右受状五月廿日下物うら仁兵衛二遣ス、

一、四月十六日、船木浦衆中三人、艀二乗合太田浦へ用事有之二付出
船被致候所、俄二北風強吹出し、太田沖二而乗合之内壹人入水被致、
残り貳人ハ沖寫へ吹流サレ無難二候得とも、入水人死骸相知不申候
二付、当御役所へ訴被出、御吟味中蔵橋町升屋弥兵衛方二逗留被致
候故、仲ヶ間_方為見舞五月九日二孫右衛門参ル、
右一件相済候二付、五月十五日年寄代式人礼二被参候事、

一、五月五日、今津浦七兵衛^(代呂)船四_る物積受候而八幡浦二被参、帰舟之節
伊吹風俄二強相成、わらその七八町沖二而舟主七兵衛入水被致、死
骸相知不申候二付、当御役所へ訴被出二付、御吟味中倉橋町高嶋屋
佐四郎方に逗留被致候二付、仲間_方為見舞五月九日二孫右衛門参り
候事、尤加子ハ無難二候よし、

覚

一、百廿四銅壹ツ

一、四拾八銅壹ツ

一、三拾六銅貳ツ

一、廿四銅四ツ

一、拾貳銅十七

✕

右之通奉納仕候、以上、

午五月廿一日

大津

百艘

貴布祢御社中

五月廿一日、貴布祢御神酒、役人不残出席有之候事、

御茶壺御下り御先触

六月廿八日巳ノ刻、御役所_方御配符式通御渡し被成、両浦連名二而
添状致遣ス、

但し

野洲郡

飛脚賃

小濱始壹通

三百五拾文

同

同

小田始壹通

四百文

右ハ廿八日巳ノ刻、近江屋藤介飛脚二遣ス、

一、六月朔日巳ノ中刻、從御役所急御配賦壹通、蒲生郡長命寺門前へ相
届ケ候様被仰付候二付、即刻飛脚を仕立差遣ス、但し中間_方添書
二飛脚賃九百文書入申遣ス、飛脚近江屋藤助

一、例年之通三井寺より筭拾本到来候事、

但し当年ハ六月三日政所より使を以被相送候、役人中へ配ル、

先触 石原庄三郎手代

御用 牧野九郎兵衛

百艘始り野洲村迄

覚

一、人足三人

右者就御用我等儀、明六日大津出立、野洲郡野村迄罷越候条、於宿々書面人足御定之賃錢請取之、無遅滞可被差出候、此先触早々継送り、野洲村ニ留メ置、我等着之節可被相返候、以上、

(割印影) 石原庄三郎手代

午六月五日 牧野九郎兵衛

百艘、矢橋浦、草津、守山、野洲村

右宿々

問屋

年寄中

右者御役所を為持被遣候二付、五日未ノ刻後矢橋浦へ小船入を相達候事、使新八

一、六月十二日、当町内を呼二来り詰合勘三郎罷越候处、年寄酢屋仁兵衛殿宅二而、同人組木屋作兵衛、川村屋喜助、塩屋喜兵衛立会、外当他屋中も一同二被致演舌候者、当家屋敷之義、此度町内へ買得いたし候付、家賃之義当月を町内へ被差出候様、先ツ当年中は此俣二而宜御座候、来春を者及御対談二候義二も可有之、此段承知いたし、尚又家付建道具之義者書付も在之候間、引合候而近々相改不申候、

其節前以御案内可申入段被申聞候、勿論家代は無之旨被申候、

一、同十三日、与治兵衛悦の挨拶二年寄仁兵衛方へ参ル、

一、同十四日、中間相談之上、右為悦と諸白巻斗町内へ為持遣申候、

一、六月十五日、町内酢仁、原田、木作、川喜、右之衆中立会間ニ数被相改候、南北四十八間、東西九間四尺五寸、但所二よりて少々出入在之、当会所之处五間、同下之物入三間、メ八間、表側、裏側共戸九枚、家付之書付付渡り候段被申候付、其段承知いたし置候、与次兵衛、太郎兵衛立会、右之外一切家付之諸道具等無之候事、并二向イ在之候蔵ヶ所、当中間を建置候旨及引合置候、次キ奥二在、

例年之通湖上船増減相改帳面二記、来月朔日を十日迄可致持参候、

一、右帳面之内、浦方ニ寄り貸船混乱いたし候間、借り主并貸船屋共入念相改、船毎貸借致符合候様可書出候、右之趣得其意、此配符致請印、無遅滞早々順達、留候所を可相返候、以上、

大津

午六月十五日 御役所印

大津、坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川、本堅田、同櫛方、西之切、釣獵師、今堅田、小野、和邇南濱、同北濱、五ヶ浦、南比良、北比良、南小松、北小松、打下、大溝、同櫛方、永田、下小川、今在家、藤江、横江、舟木南濱、同横江濱、同北濱、南古賀、新庄、太田、藁園、深溝、針江、森村、馬原、木津、今津、新保、領家、北仰、貫川、桂村、深清水、大沼、中庄、

北新保、知内、西濱、海津、大浦、菅浦、月出両組、岩熊、塩津、

片山、石川、東尾上、延正寺、海老江、案養寺、早崎、下八木、

八木濱、大浦^濱、南濱、川道、右浦々庄屋、船年寄

右御配賦六月十五日巳ノ中刻、坂本よつや長兵衛へ遣ス、使廻り平兵衛

一、同御配賦耆通、松本浦始メ伊庭迄

右御配賦六月十五日午刻、松本浦舟年寄方へ持セ遣ス、使廻り平兵衛

右之趣即日貸舟屋へも、いつも之通廻状遣し可申候事、

一、六月十八日、坂本町中ノ家屋敷買得挨拶として^{鮎節}十本返礼ニ被差

越候、代銀拾匁二貝半へ預ケ、同日中飯後呼ニ来り候付、年寄酢屋仁兵衛宅江与次兵衛罷越候処、当他屋中被呼被申聞候者、是迄ハ銘々

藏地代甲乙在之候ニ付、此度町内相談之上一同相改、六分坪ニ相究

メ候間、其段承知致候様、依之当中間分是迄セに百文候処、耆匁ニ

直し月々相渡候へ共、已来式匁二分五り宛差出し候様被申聞候、尚

宿料之義も月々取集メ申候間、月渡しニ致候段被申聞候、原田、酢仁、

河喜、木作立会也、

一、三拾三匁三分、例月宿料

一、式匁二分五り、藏地代

メ三拾五匁五分五り

六月廿九日、町内へ渡ス、

六月廿一日当所暑中御窺

石原庄三郎様 素麵三拾把

二重くり足台

包のし下ケ札附

御元メ

柴山泰藏様

同

七里左六郎様

小頭

佐久間正藏様

御町役

同目附兼帶

内堀繁太様

高橋角左衛門様

同

曾根源治郎様

御目附

多賀喜曾太様

船方

同

牧野九郎兵衛様

川嶋惣右衛門様

右五軒へ素麵廿把ツ、右四軒へ素麵十五把ツ、
右之外御門内新建御手代衆、御組屋敷御同心衆不殘、北出氏共、名
札ニ而相勤候事、孫右衛門、六兵衛、供新八

六月廿一日、京師暑氣伺

東御奉行様 金貳百匹 二重くり台、下ケ札

西御奉行様 同断

兩御門内御組不殘名札

東公事方

山田釵次郎様

石嶋五三郎様

塩津宗五郎様

加納萬五郎様

西公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

本多新左衛門様

熊倉政吉様

飯室助左衛門様

✂九軒白銀壹両宛

東西公事下、年頭之節之通御名前

内東中川左衛門様御引被成候代り

田村此左衛門様

右各名札計二而相勤、

町代田内与助殿、白銀三匁

外二わかさ屋八兵衛殿、刺鯖式さし、壹匁三分ツ、

右之通与次兵衛、太郎兵衛、供五兵衛

右之外替候事なし 平尾安左衛門様事演左衛門様ト改名

一、定得意家大工与惣兵衛死去被致候付、為香典酒五升遣申候、六月廿四日

一、六月廿二日、三井寺^ろ素面式拾把例年之通来候事、

当屋敷町内持二相成候付、此度相改受状差出候様申来り、則左之通相認在之候、

借屋請状之事

一、其御町持借家江、此度私共中間船会所二借り宅仕候処実正二御座候、
一、御公儀様御法度之趣、一々堅相守可申候、勿論御町内御定目、御示し合、家並之通急度相守可申候、尤借宅仕候内、自然御公边江相掛り候儀出来候とも、其御町内江者少も御難掛申間敷候、尚又家御入

用之節者、何時二不限家明ケ可申候、其外如何様様々六ヶ敷儀出来候とも、我等罷出埒明、御町江者少しも御難掛申間敷候、為後日借家請状、仍而如件、

百艘中間

上片田町年寄

永原屋与次兵衛印

文化七年

午六月

帳場之判

惣代船頭町

船屋孫右衛門実印

坂本町

御町中

右借宅之儀ハ往古^ろ住来り候二而、いつ之頃^ろと申年曆も相知レ不申、前書之通此度町持二相成候事故、右之通二御座候、是迄式日之礼等無沙汰二致置候へ共、向後年八朔礼之砌町内年寄方江名札を以相勤可申事、

覚

一、金子貳百疋

一、銀子壹枚

右者嶋ノ関地料、当午年分従本山被下置、慥二受取申候、以上、

百艘年寄

与次兵衛印

文化七年

午七月四日

栄泉寺様

右之通栄泉寺殿会所へ持参被致候二付、右受取書遣し置候事、

七夕御礼

石庄三郎様 青銅百匹

元々

柴山泰蔵様

七里左六郎様

町方

内堀繁太様

曾根源次郎様

舟方

牧野九郎兵衛様

鳥目五十足宛

右之外御門内ノ御手代衆、組屋敷、新建

北出雲平殿

右名札二而相勤、

右之通与次兵衛、孫右衛門、供五兵衛

八朔御礼

石庄三郎様 金貳百匹 目録台二のセ 下り札付ル

元々

柴山泰蔵様

七里左六郎様

町

内堀繁太様

曾根源次郎様

船

牧野九郎兵衛様

右金百匹宛

目付小かしら兼帯

高橋角左衛門様

目付

多賀喜曾太様

河嶋惣右衛門様

小頭

左久間正蔵様

船方下

北出雲平殿

矢嶋藤五郎殿

小野又三郎殿

堀伊三郎殿

遠藤仁右衛門殿

九軒銀壺両宛

肝煎

吉本孫四郎殿

山本依五郎殿

稲葉半七殿

御小遣衆兩人

右鳥目廿足宛

御門吟助殿 鳥目五十足

内義 二十足

御蔵番三人

白崎久太夫様

御門内新建

御手代衆不残

御組やしき不残

平蔵町年寄

坂本町年寄、当年初メ

貝屋七兵衛殿、昨年方

右手札二而

右之通与次兵衛、太郎兵衛、供やとい多吉

八月朔日、京都御礼

東御奉行

小長谷和泉守様

金子三百疋 目録台二重ぐり、下ヶ札付

御用人

小林八左衛門様

岡田長兵衛様

赤間三郎右衛門様

山田嘉藤治様

松野小右衛門様

吉川吉助様

飯塚五郎作様

ノ七軒江銀壹両宛

御公事方

山田釵治郎様

櫛橋平蔵様

石嶋五三郎様

中川定右衛門様

塩津惣五郎様

喜多尾八郎右衛門様

加納萬五郎様

平尾演右衛門様

右四軒江金百疋宛

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

西御奉行

牧野大和守様

金子三百疋 目録台二重ぐり、下ヶ札付

御用人

小熊三郎右衛門様

御勝手御用人

十九浦九十九様

香西伴助様

御取次

神山善大夫様

嶋田政右衛門様

中村重右衛門様

岡野大助様

横溝市右衛門様

大野万左衛門様

ノ九軒江銀壹両宛

御公事方

深谷平左衛門様

御公事下

上田八蔵様

不破伊左衛門様

柏原治部右衛門様

本多新左衛門様

廣瀬佐野右衛門様

熊倉政吉様

酒井宗助様

飯室助左衛門様

山田傳左衛門様

右五軒江金子百疋宛

平川伴蔵様

浅賀和作様

右七軒江銀壹両宛

上丁代

筆工

田内与助殿銀貳両

奥田九右衛門殿、銀壹両

下丁代

藤沢傳六殿貳百文

上町代中江五百文

同

藤村佐市殿貳百文

下町代中江五百文

宿

東西御門番中江三百文宛 鍵屋佐助江三百文

同中番中江三百文宛 同下女江三百文

同小番江三百文宛 追分丸屋四郎兵衛江百文

山科大津屋孫兵衛江百文

×金三兩三歩

銀貳兩壹、銀壹三十三

五百文貳ツ、三百文六ツ、貳百文三、百文貳ツ、外二大津も有、右之通相勤ル、孫右衛門、勘三郎、供四廻り船頭伊八、荷持雇

一、大溝分部若狭守様大坂御加番御交退^(付)二付、大溝丸船六艘船印を建、為御馳走金藏堀江着舟致在之候、八月四日船持源右衛門、又次兩人呼二遣候、与次兵衛、太郎兵衛、孫右衛門、勘三郎及引合、右荷物藏所へ積入られ候分、則藏所へ此方江通達在之候、万一取込之事故金藏へ荷物積入之義等在之候而者不宜候間、兼而相心得被居候様申置、承知候旨返答致被歸候、

一、八月九日、西御奉行牧野大和守様、山門御修覆御見分として、前日へ山中御越一夜御止宿候而、小関越二御歸館在之候、

右御□出迎として孫右衛門、忠兵衛、尾花川出離レ迄罷出、九ツ時御通行被成候事、

御与飯室助左衛門様

深谷平左衛門様、御供被成候事、

一、小唐寄丁貝屋七兵衛持屋敷、塩屋町膳所藏二相成在之候、浜先石垣損し積直申度旨二付、仲間相談之上与次兵衛、太郎兵衛八月十一日見分いたし、別紙書付取置候事、

一、北野天満宮御造営御成就二付、当八月二日へ廿二日迄三七日之間、御内々陣被為解候旨、宿坊常久殿へ書状二而申来ル、此度は勸化普請願相叶候よし、

一、来未春へ山門御修覆在之候旨粗承候付、大津へ坂本迄舟積二相成候分は、都而百艘舟二而運送致候処、請負方船方之義は不案内之事故、差懸り彼是隙入在之候而者あしく、既寛政十二年二も前広二京都御懸り江参御頼申置義二付、此度も右之趣可然段、中間相談之上八月十九日へ与次兵衛、孫右衛門上京いたし、西公事方深谷御氏、同飯室御氏江参上致、具二申込候条并二山門懸り一件は、別帳二相認置候事、

一、元々七里左六郎様御帑御死去二付、為香典八月廿一日金百疋与次兵衛持参高山寺へ、葬式山七ツ時忠兵衛相勤ル、

一、八月廿三日、治郎左衛門先養子仙次郎不縁二付、此度縁類内へ後仙二郎養子被致、今日仲間顔見セ相済、即諸白二升、南鐙壹片肴料として被差出候事、

同日

一、山門一件之義二付、当御役所へ口上届いたし候、委細右別留帳二在之、

一、八月廿五日、於片新宅三ヶ浦寄合、江頭着船之義申談候条三ヶ浦対談帳二記置、

大ツ与治兵衛 片た新左衛門 八幡喜十郎

太郎兵衛 ヲ大門^(内カ)太郎兵衛

孫右衛門 平兵衛 与八事治郎右衛門
忠兵衛 利右衛門

一、八月廿七日、年寄治郎左衛門死去二付、金百疋香典遣入、

一、松本神社及損破所々寄進被相頼致成就候処、当中間之義ハ是迄松本村ハ間々及取合、互ニ不心能二付寄進物等一切無之候へ共、近来村方茂兵衛杯取合被致自うおとなしく、当時何ノ申分も無御座時節候処、平蔵町年寄六兵衛を以村方内々被相頼、依之此已後迎相互楯鉾無之様、於神前祈念被致候由二而、中間相談之上、金百疋奉納致候事、当番町高見丁年寄市郎兵衛受取書来り在之候、右二付神主并惣代町年寄礼二被来候、

一、石原庄三郎様御郷元御実母八月廿七日御死去之処、九月六日午時ハ悔御請被成候付、七日為御悔金貳百匹、太郎兵衛、孫右衛門持参いたし候事、拾二上下也、

追而本文運上銀、大津橋本町古望仁兵衛方二而掛改候間、得其意納人印形持参可致候、以上、

湖上船運上銀、来月朔日ハ五日迄持参上納可致候、遲滞致間敷候、此配符合請印、早々順達、留り所ハ可相返候、以上、

大津

(割印影写)
印 午九月十五日 御役所印

大津ハ川道迄
右浦々庄屋、船年寄
十五日午刻

外二老通御文言右同断二付略之、

右唐崎越前屋権之助艦
へ相渡入、

松本三ヶ所ハ伊庭迄

庄屋

船年寄

右老通者午刻松本へ

廻り清吉持参、

口演

一、船御運上銀来月朔日より五日迄二無遲滞上納可被致候、此廻状早々順達、留候所ハ百艘会所へ御返し可被成候、以上、

午九月十五日

百艘印

仁左衛門 仁右衛門 甚吉 六兵衛 源助、清助 源七 五

郎八 善兵衛 源六

坂本町美濃屋庄兵衛殿持橋本町之抱屋敷、八百勘前八幡屋之段、先達而之洪水之節損シ、并石垣上ハ石杯も堀へ落チ有之、此節渴水二付、石引揚ケ勿論下地之通積置度由、九月十五日庄兵衛殿代届二被参候上二而取懸リ被申候事、

乍恐口上書

一、私共仲間年寄役之内、治郎左衛門死去仕候付、右跡役年寄七兵衛為相勤申度候間、此段御届ケ奉申上候、乍恐御聞濟被成下候ハ、難在可奉存候、以上、

文化七年

百艘年寄

与次兵衛

午九月十九日

太郎兵衛
孫右衛門

大津

御役所

覚

一、百貳拾四銅壺

一、四拾八銅壺

一、三拾六銅貳

一、貳拾四銅四

一、拾貳銅拾七

右之通奉納仕候、已上、

大津

午九月廿一日

百艘

貴船御社中

外二百文飯料、御役江遣ス、

前段年寄成り御届書与次兵衛持参仕、於御役所牧野様へ差上候処、
承届候旨仰渡され候、

一、廿一日、貴布祢神酒役人不残出仕、七兵衛年寄成り盃相済申候事、

酒貳升、生鯛壹尾、七兵衛被差出ニ付飯後打祝申候、

一、九月十三日、蔵橋町浜先字金蔵堀ニ水死人有之ニ付、右二件之義ハ

別帳委細相認メ「有^(張紙)之候故爰」ニ略ス、「^(張紙)故、爰ニ略ス」

九月廿三日

一、御忌中為御伺、金貳百足差上候、

石原庄三郎様 与次兵衛、太郎兵衛相勤、

於御内玄関御取次佐野栄吉様

但是迄廿三、四夕計、茶子献上致候へ共、天氣之品ニよりしめりニ
而見苦敷相成候へハ、右之段牧の氏江御断申上候而、此度ハ目錄
ニ而差上ケ申候、代相嵩候義ハ時宣ニより又減し可申事、

一、九月廿三日、石山むら庄屋松茸甘本到来候事、右早速役人中へ配
分致候、

一、伊庭門九郎、艀舟を以荷物、青物等勝手ニ積入年来通行致候義ニ付、
毎度利解申聞相止メ候様為申聞候へ共、文盲成ものニ候哉一切不聞
入、無抛当九月廿四日る預り置、三ヶ浦立会相談之上、在所船年寄
へも懸合、其上御役所へ御訴可申候段申聞候処、打驚段々断申候へ共、
あまりむくつけ成もの故一日艀留置候処、丸屋吉兵衛、板屋庄兵衛
被致挨拶、向後艀舟ニ通ひ候義決而為致間敷、たとひ青物等積登り
候共、私共問屋三軒共一切受申間敷間、何分此度は預用捨歸村為致
申度段々断被申候付、此度之義ハ任其意ニ了簡を以歸遣し候、

右ハ全体是迄ニも差留メ可申事ニも候へ共、門九郎段々年相寄ふつ
と相止メ候而ハ及渴命候間、何卒浦法を立船年寄る相願、丸ふねニ
而もつかい、双方名利ニも相成候ハ、及相談ニ遣し可申段、内々申
含遣候義も在之処、只ゆるかセニ致居候而不及其義ニも、依之右之
段取計候事、

尚又先月同浦卯兵衛艀舟ニ而往返いたし、剩隠積致候ニ付、増舟賃

取之已来往來為相止メ候義も在之候、

青物問屋當時 八百屋勘兵衛、板屋庄兵衛、丸屋藤兵衛

覺

野洲郡野田むら

一、田地養船壹艘

水主弥三兵衛

右之船野田村浜先ニ繫置候処、七月四日右場所ニ不相見候二付、段々相尋候得共不見当由二而、浦々吟味之儀願出候而浦限相糺、右船有之候ハ、船主江及通達可相渡候、此配符浦名下令請印、早々順達、留り所可相返候、以上、

大津

午九月廿八日 御役所御印

松本三ヶ所伊庭迄

右浦々庄屋、船年寄

右即刻松本船年寄江為持遣候事、

使廻り与八

覺

一、乗物壹挺

此人足四人

一、分持貳荷

此人足貳人

一、合羽籠壹荷

此人足壹人

一、竹馬壹荷

此人足壹人

又人足九人

右者御代官明朔日曉七ツ時大津出立、矢橋迄乗船二而野洲郡北桜村檢見為御用被相越、日歸之積ニ候条、得其意書面之人足往返共無滯差出、御定之賃錢請取之可被繼立候、此先触早々順達、北桜村二而可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

曾根源次郎印

内堀繁太印

午九月廿九日

百艘、矢橋、草津、守山、

北桜村へ之人足
用意ニ不及候、野洲郡北桜村

右宿々村

問屋

庄屋中

年寄

追而北桜村より守山宿へ例年之通迎人足可被差出候、以上、
外二

書付 石庄三

九月廿九日、御役所呼参り太郎兵衛罷出候処、明十月朔日御代官様野洲郡北桜村へ為檢見御越被遊候二付、矢橋浦迄御乗船有之候間、例年之通小船内屋形壹艘、供船壹艘手当致候様被仰聞、則左之通先触壹通御渡被成候二付、即日矢橋浦へ相達候事、

江州野洲郡

北桜村

一、九月^十二日、御配賦、本堅田、西ノ切江

右ハツ時過為持遣わされ候、依之態々以飛脚為持遣し候事、

飛脚博勞丁喜兵衛

添状致遣ス、賃錢四百文先取、

十月七日、御役所呼二参り孫右衛門罷出候所、牧野九郎兵衛様被仰候二者、勢田橋御掛替之節櫓打銀相掛り候浦々、并二丸船計掛り候哉艀二も掛り候哉、其仲ケ間二者掛り不申故相知間敷候得共、若相知候ハ、吟味いたし呉候様被仰候二付、留帳吟味いたし候得共見^{貼紙}「当不申」、八ヶ浦宿片庄方ニて相尋候所、文化元子年御掛替之節取集過錢割戻之和帳有之ニ付、右之振合ヲ以口上ニて左之通申上候、

一、私共仲ケ間之儀者、前々由緒御座候二付掛り不申、急々吟味仕かたく故、仲ケ間内片田屋庄兵衛義、八ヶ浦宿仕候二付、同人方ニて相尋候所、当時庄兵衛若年二付祖母申候二者、丸船計相掛艀二者掛不申、且松本、矢橋、山田、坂本ハ山王御神事役相勤候二付掛り不申、品浦者芦浦觀音寺様御用相勤候二付掛り不申、其外浦々へ相掛候趣申伝受給居申候由申上候所、右ニて随分相分宜せ話之段被仰候、則右之別紙帳面為心^{得脱カ}、仲ケ間へもらひ置、諸浦書物之内へ入置候事、

一、十月十二日、伊庭船年寄甚左衛門被来、与次兵衛、七兵衛承候処、門九郎義兼而艀二而通舟いたし、不埒之義二付御差止メ被成候段此度承り申候、右二付私共も不念候段ハ御用捨可被下候、右門九郎義段々年被寄候へ共、外二可致業も無御座候、甚難義仕候、此上御用

捨を以丸舟二而通舟為致度、左候へハ村方□弁りも宜候間、何卒勘弁いたしくれ候様段々被相頼二付、此方答候者、不筋之事とハ申なから長々致来り候義相止候而ハ、定而難義二可在之、依之前以每度道理為申聞候へ共聞入不申候、併浦法を立相頼候義二候ハ、已前庄兵衛之形も有之候義故、此上三ヶ浦共相談二可及段申入候処、甚左衛門被申候者、随分御尤之事御座候、已後御用捨被下候ハ、私共る急度制度いたし、聊不埒之義ハ為致間敷候間、何卒御勘弁被下度、猶又罷歸り得と門九郎へも引合、刎せん之義も船毎二差出候而ハ、自然間違等出来候而ハ不相濟、年分何程と申て差出し申度候、左候へハ、船数二不抱候間、セわも無数旁何れも引請セわ致可申段被申聞、此方二も尚とくと相考、跡示談可申旨申聞セ被歸候、

明十五日、石原庄三郎様御役人中御三人、東江州へ御出被成候二付、分持人足三人、籠人足三人、^{ハカ}六日差被出候様申達候旨被仰渡候間、無間違御手当可被成置、以上、

十月十四日

百艘年寄

矢橋浦

舟年寄中

一、和邇南濱源助魚船通ひ候二付、いさゞ老籠持参いたし候、昨日よりさゞあみ初り候由、

十月十九日

一、十月廿日、野田市左衛門享和元酉年船持立之節、心得違在之二付下り荷物船積一切不為致候処、段々断二付書付印形為致、已来用捨いたし遣候事、右書付別二在之、

一、十月廿一日、為例日祝定祝候事、

一、十月廿日曉七ツ半時を膳所網町五、六軒計出火致候二付、左之役方へ右為見舞年寄太郎兵衛、供太吉召連参置候事、

船奉行 中神藤左衛門様

加子頭 田原喜右衛門殿

一、十月廿五日朝、嶋之関波留場外つら二女之死骸在之、近辺承候処下堅田町ふどうのすし、已前押手致候左兵衛と申者四、(年晚カ)五前相果、其後家くらし二而、小児式人京都白川橋辺二十八才二相成候男子、十五二相成候女子、十六才二相成候男子、右兄弟五人在之由、則下堅田町を引請被及御訴、中間義も寛政元酉年之指合二而、連印二而町方御役所へ御届ケ申上候処、為御検使と川嶋惣右衛門様、岡本弥一郎様、町代堀猪三郎殿、筆工武六、右之通被来、八ツ時為検使相済、下堅田町宿水口屋善五郎、下宿馬淵屋平兵衛、与治兵衛、太郎兵衛、詰合下堅田町年寄善五郎、平兵衛五人組白銀屋陸助、乗屋久兵衛、水口屋善五郎

家主いせ屋町やわた屋六兵衛

右兄弟之者、京都へ以飛脚呼二遣候処、夜五ツ時二来り、口書相済候処四ツ時、翌日廿六日右懸り之者共御役所へ罷出、九ツ時二相済、死骸被下土葬二可致段、残居候子供ハ町内を心遣添遣候様被仰渡候、

於御白砂、柴山様、内堀様 右検使之衆中御立会、
右謝礼

白銀壺両川嶋惣右衛門様

白銀式刃岡本弥一郎様

白銀壺両堀猪三郎様

白銀壺刃五分筆工武六

右之外なし

此分中間出し

右之通夜二入候付、町内を酒飯被差出候、
付り長座二相成候故、中間を御目付江菓子差出申候、代五匁、玉屋丁ふちや仁兵衛門殿

右一駄諸入用町内を被相弁候、尤中間へは礼物挨拶等なし、

一、十月晦日曉七ツ半時を膳所魚屋町式、三軒計出火致候二付、左之役方へ早速右為御見舞、肝煎六兵衛、供与八召連参置候事、

船奉行 中神藤左衛門様

加子頭 田原喜右衛門殿

右挨拶二翌十一月朔日、小舟入会所并二年寄太郎兵衛方へ使参候事、

覚

栗田太
栗田郡

南山田浦船主

源兵衛

一、田地養船壹艘

右之船去ル四日膳所木下浦二繫置候処、其夜風烈敷流失之様子二而不相見候付、段々相尋候へ共不見当由二而、吟味之儀願出候間、浦限り相糺右船有之候ハ、船主へ及通達可相渡候、此配符浦名下令請印、早々順達、留り所を可相返候、以上、

大津

午十月晦日 御役所印

大津、坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川、本堅田、同體方、西ノ切、釣漁師、今堅田、右浦々庄屋、船年寄

十一月朔日坂本四ツヤ源七へ遣ス、使廻りと八

右同斷、松本始メ品迄之御配符沓箱、同日松本浦舟年寄方へ持セ遣ス、使廻り新八

一、知内浦祝儀積之儀ニ付、弥四郎心得違之義共在之候付、十一月朔日右船登り候付呼ニ遣候処、幸ひ弥四郎忤兩人共被来段々及引合、已来心得方書付為致候様申聞候処、御尤之義ニ御座候へ共、此来出来最中ニ而暫時も印形持出候義難致、来未正月廿日頃迄相待くれ候様段々相頼、依之承届遣、則此度祝儀積四百六十俵之不足丈ケ受取置事、但委細ハ右書付ニ認在之候、

一、十一月朔日、赤ノぬ欠米之義ニ付寄合、又二日寄合ニも談合いたし、太右衛門以飛脚ヲ呼ニ遣候事、

一、十一月四日四ツ時、吾妻川浚ニ付、為御見分町役内堀様、御組手塚熊太様、町代遠藤右御越ニ付、年寄太郎兵衛右場所へ罷出候処、内堀様被仰聞候ハ、此度川浚之義願出候ニ付、今日見分罷越候間、其仲間方持場之処、町方浚方ニ准シ相浚候様被仰渡候ニ付御請申上候、則町方与仲間方立会場ニ而式尺浚、右二応し仲間持場之処相浚へ可申事、

但し嶋ノ関会所ニ而、暫御休足被成候ニ付、茶、たばこ盆、火鉢等差出候事、

一、八月ニ留書在之候、貝屋七兵衛持屋鋪膳所蔵湖水端石垣積直之義被

申出候処、此節出来致候付、右為挨拶と金貳百足、諸白五升被差出候事、

十一月三日

一、前書ニ留在之候野田市左衛門、右為挨拶南鐐沓片、酒五升差越、此節不快ニ付尚追而上津可致旨、使之もの申居候、

一、七里左六郎様御死去、是迄御当人御死去被成候ニハ香典差出し不申候へ共、長々御馴染御事、御譜代かた故銀沓兩遣し申候、重而八時のもやうニ取計可申候、
十一月十一日

一、十一月十二日浅小井橋舟賃一件ニ付、与次兵衛、七兵衛早朝小舟入船ニ而出舟、片田浦江立寄、庄兵衛、出来嶋久助同船、同日七ツ時過八幡浦江着船致、同夜宿忠兵衛方ニ止宿、八幡喜十郎、舟木利右衛門及相談、翌日浅小井宿九郎右衛門方於て浅小井西屋九兵衛古手屋半兵衛、米屋喜八江及引合候一件、委細は三ヶ浦談合帳ニ在之候事、

十一月廿三日

一、八幡喜十郎、常樂寺積小笠原沓艘積登り、大濱先二而かゝり居候処、大雨大北風ニ而波打かけ、色く相働候へ共大舟込ミニ而水入、当所船頭共不残為相詰、夜明ケ次第第八幡、常樂寺へ飛脚被遣くれ、翌日朝四ツ時八幡茂兵衛、太郎兵衛、常樂寺問屋右馬次郎、忠右衛門、伝左衛門、甲屋平右衛門被致上津、早朝船揚被致候処、濡米六十俵余り在之候事、

廿四日朝

酒五升

右喜十郎は当時年寄役二御座候、

大こん、棒たら

(堺カ) □重二重入

船へ遣し候、年寄七兵衛参り候

右此節甚多用、問屋中三軒共代人也、

廿五日、右常楽寺、八幡衆中被登来候二付、為見舞

大鱸老本、〃かき二、酒三升、代五匁、×常楽寺宿橋本町いつゝ、

ヤ宗介

右者鳥目式百文、使五兵衛、新八兩人へ遣ス、

大たこ耆はい、かき二かこ、酒二升、×代五匁五分、ため紙計

八幡衆中宿堅田屋庄兵衛方へ遣申候、

十一月廿六日、堅田年寄代長右衛門外二耆人見舞来ル、此節年寄共他出致居二付、此断被申居候、酒三升切手持参、

右二付村々庄ヤ、年寄被登来、八幡、常楽寺の段々断申され候へ共、何分聞不申候、中二も馴合村庄屋申聞候者、此度之義全難舟と申かたく、一たん湊入致候義を、船頭之勝手二よつて、上乘へも相談不致大濱先へ出候義、実二事を好ミ候事故了簡難致、右六十二俵銘々の相弁候様達而申立、一向喜十郎、甲屋杯被申候義取用不申、大二被因候二付、何卒百艘方の挨拶致呉候ハ、相和らき候義も在之候間取喫致くれ候様、喜十郎始間や中方も被相頼候付、中間相談之上廿七日舟頭丁船吉殿方へ罷出与治兵衛、太郎兵衛、孫右衛門右村方宿船屋吉兵衛殿方へ参段々及挨拶、此度義ハ各方之眼二而者、船方無念も有之候様被仰立、尤之義二ハ候へ共、又船方二も全如才有之候義二而も無之、既此方共の助け加子大勢差遣せわいたし候様之義

二候へハ、難舟二違無之、於此義二村方無念二相成候義二在之候ハ、此方共の申聞可致間、此上彼是隙入候而ハ氣之毒二存候間、村方二利と被存候ハ、非々曲拙者共へ被下候様仕度、右双方為方を存挨拶二出候段申達候処、鈴村平助と申庄屋重々被及引合、尚左様之義二御座候ハ、村方及相談、跡の返答可致段被申聞、翌直様常楽寺問屋呼二来り、則右馬次郎代甚兵衛、伊左衛門代礪治兩人被参候処、平助被申候者百艘方の挨拶二被及、此上ハ無惣義二候間急々濟方可致、右二付御蔵へ揚之内二も式百俵計乱俵在之、内百俵ノ右上ハ後いつれか成共被差出、又濡米六十二俵は、是非村方へ引取候間、当地乗前之所も可然被取計候ハ、先ツ外二申分も無之段被申聞候趣、早束礪次百艘方へ被相達候付、百艘の問や方へ申聞候者、各方ハ如何被存候哉と承候処、何分客先キ之事情間、最早右様之義ハ問屋方の相弁可申、しかし積帰候乗前之処も随分差出し可申候へ共、御中間二も勘弁致くれ候様被申聞、しからは夫二而随分相分り候上ハ、後之義ハ問屋中の被相弁、積戻米ハ此方共庄ヤ江直之及引合候へハ、急度乗前受取可申事候へ共、問や中の被相弁之義は氣之毒二存候、併浦法之事候へハ皆無二も致かたく、半減差出し可被申哉、しかし此義も各方代人之事二候間、急度受取候義も如何二候間、歸村之上問や本人中江被申達、其上之心任二可被致旨申談、勿論積高四百何拾俵と申、元舟賃無滞村方の被差出候義二付、依之船方之左法も相立問や之規も相立、双方和談相調一統悦ヒ被申、十一月廿九日朝歸村被致候事、

一、八幡の被申聞候者、此度御セわ二相成候一件書付等差出し可申被申候へ共、三ヶ浦内二事不及其義候段申聞候処、悦び被申候、

右相濟候為挨拶美濃紙三束

酒五升 加子中

鳥目三百文 //

△右ミの紙戻し候へ共達而貰呉候様、舟木利右衛門被来、十二月未弍束到来いたし候事、

右持参被致候付、酒三升出合候加子共江遣入、鳥目ハ其節使立候四廻り三人江遣候、みの紙ハ断申宿堅庄迄戻し置候事也、

十一月五日

一、米壹俵

右者石山寺ノ例年之通致到来候事、

一、内堀繁太様是迄御町役御勤被成候処、此度元メ役被蒙仰、為御祝儀金百匹、十二月九日年寄与次兵衛持参、但七り様之御代也、

一、篠田牧太郎様右内堀様御跡役町方御勤被成候へ共、是迄例無之候間何も差上不申候、

一、十一月廿七日、上候ハん北之町組小舟ニ、旅人取のこし候風呂敷包在之候、委留書は矢橋会谈帳ニ記在之、

一、北組小船ニ小舟入船仲間と書記高桃^(提)灯壺張、高張壺張拵候段申之候付、為相止メ候一件矢橋会谈帳ニ在之候、

一、堅田浮御堂^(領)ぼんさま被来、近年不景氣ニ付勧進舟も差出しかたく、此節相止メ申候族ニ御座候、右ニ付湖辺浦方御頼ニ廻り候間、何卒当所之義も聊なりとも寄附いたしくれ度段、尤例年と申義ニ而も無之、先達而開帳之節は御頼申上候へ共、其後左様之義も無御座候段無廻相聞へ候付、中間及相談南鐐壺片寄進いたし遣候事、十二月十

日ノ事也、

十二月十五日、当所寒氣見舞

石原庄三郎様

鴨壺掛 二重繰台
下ケ札付キ

元メ

柴山泰藏様

〃

内堀繁太様

町役

曾根源次郎様

〃

篠田楨太郎様

舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ南鐐壺片ツ、

小頭

佐久間正蔵様

目附

高橋角左衛門様

〃

川寫惣右衛門様

〃

多賀喜曾太様

右四軒へ銀壺両ツ、

御門内組屋敷、新建、北出氏へ名札計

右之通太郎兵衛、三郎兵衛相勤候事、供清吉

重陽御礼

石原庄三郎様

御矇中二付不相勤

御元々

芝山泰蔵様

〃

七里左六郎様

町役

内堀繁太様

〃

曾根源次郎様

舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ鳥目五十足ツ、紙札付

但し重陽之節殿様御矇中二付差扣、寒氣見舞之節相勤ル、

右之通太郎兵衛、三郎兵衛相勤候事、

一、伊庭村門九郎与申もの、是迄艤船二而青物等積受通行いたし候二付、差留メ候二付、村方不弁利相成候二付、右村方船年寄方も俱々被頼出候二付、先年小丸船壹艘同村庄兵衛与申ものへ差免し遣候例も有之候二付、三ヶ浦相談之上、当十二月九日村方船年寄甚左衛門并船主門九郎右両人罷登り候二付、浦法通得と為申聞候上三ヶ浦へ一札取之置、差免し遣し、尤委細之義ハ三ヶ浦対談帳二記し有之候故、爰二略ス、

十二月十五日、京都寒氣見舞

東御奉行

小長谷和泉守様

真鴨一掛 二重繰台

下ヶ札付

御用人

小林八左衛門様

赤間三郎右衛門様

松野小右衛門様

御取次

岡田長兵衛様

山田嘉藤治様

飯塚五郎作様

吉川吉助様

右者名札計

御公事方

山田釵次郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

加納萬五郎様

右四軒へ南鐙壹片ツ、

御公事下

櫛橋平蔵様

中川定右衛門様

喜多尾八郎右衛門様

平尾演右衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

右九軒へ名札計

西御奉行

牧野大和守様

東同断

御用人

小熊三郎右衛門様

香西伴助様

神山善太夫様

中村重右衛門様

御勝手御用人

十九浦九十九様

御取次

嶋田政右衛門様

岡野大助様

横溝市右衛門様

大野万左衛門様

右八名札計

御公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

本多新左衛門様

熊谷政吉様

飯室助左衛門様

右五軒へ南鐐沓片ツ、

平川伴蔵様、御死去

浅賀和作様

畔柳三右衛門様、平川代り

右八軒へ名札計

町代田内与助殿、銀三刃

若狭屋八兵衛殿、鴨沓羽

右之通与治兵衛、孫右衛門相勤候事、供五兵衛、荷物喜兵衛

山門御修覆御用物近々 飯室様
船積仕難在段手札二而 深谷様

(搦脱カ)
江御挨拶申置、

覚

一、御納豆 五拾把

右者從御前様例年之通被下置、難在頂戴仕候、以上、

午十二月廿日

百艘印

觀音寺様御内

奈良岡市左衛門様

覚

一、金子 百疋

右者從当津御家中様并御人足衆渡海為御挨拶、從御前被下置慥二頂

戴仕候、以上、

午十二月廿日

百艘印

松岡市左衛門様

十二月十二日、今堀町大工市左衛門、孫右衛門宅へ参り被申候二者、此度御役所御貯米土蔵三間二五間沓ヶ所、松本村二御建被成候二付、木材木艀舟二て遣し度段、御掛り篠田牧太郎様、三好順之助様へ申上候所、舟方御役牧野九郎兵衛様へ申上候様被仰候二付、只今牧野様へ参り御頼申上候所、孫右衛門方へ参り可申入旨被仰候間、御仲ヶ間方宜御頼申上候様被申候故、則牧野様へ御尋申上候所、此義御用二相違無之候得共、請負之事故如何二存掛り兩人相尋候所、何卒含置被呉候様被頼候間、格別差支二も相成不申候ハ、此度之儀者用捨いたし被呉候様御頼故、其趣二小渡し用捨いたし置候事、

一、十二月廿四日、勢田橋本年寄代り、已来次郎兵衛相勤候様被申来、小鳥五羽持参被致候事、

即刻貝半へ預ケ遣候処、五匁五分二買候由申之候、預ケ置、あじ鴨也、

十二月廿四日

一、金貳百足

右者從御本山嶋之関材木小屋当年切二て明ヶ候故、寒氣御見舞何角御挨拶旁々榮泉寺殿持参被致候故、左之通受取書遣ス、

覚

一、金子貳百足

右之通御本山を被下置難有頂戴仕候、以上、

午十二月廿五日

百艘印

榮泉寺様

覚

一、金貳百足

右者当年為御挨拶被下置慥二頂戴仕候、以上、

文化七年午十二月百艘印

膳所御役人中様

右八十二月廿六日、膳所船奉行中神藤左衛門様御使奥村李兵衛殿御持参二付、如此受取書認メ遣し候事、

(上に横書)「但し、巳年より」

一、十二月十九日朝四ツ時過、和邇南濱重右衛門方を仕立飛脚参り申聞候ハ、道下り積之船、荒川浦二而難船いたし候趣、夜前右船加子衆被申参候処、折節重右衛門義留主中二而、則私義隣家二居申候善三郎与申もの忤二而、重右衛門内義二被相頼参り、右難船之様子ハ荷

物之義ハ無別条、勿論船并加子衆共無難御座候へ共、上道具之分風波強ク候而吹取られ甚難義之趣候間、錢壹、貳貫文計貸呉候様、尤飛脚ヲ以此段大津表へ相知らせ呉候趣段々被相頼候二付、右重右衛門義留主中故、私方を錢壹貫文取替遣候、外二提灯壹張、ミの壹ツ貸遣し候趣申聞候二付、此節道下り積受候船吟味いたし候処、新右衛門、忠二郎貳艘有之候へ共、新右衛門船ハ昨十八日歸船致、則右船加子与ハ八へ相尋候処、忠二郎船ハ真野へ歸り居申候様申之候得共、態々飛脚参候程之義二御座候故、早速忠兵衛方を廻り之内清吉、外二尾花川町を式人、右三人之もの共同日八ツ時頃を遣し候処、真野村へ参候処、右忠二郎船居申候二付、早速様子相尋候得共、右難船等之義ハ一切無御座趣申之候二付、夫を南濱重右衛門方へ参り此段申聞候得共、睨と相分り不申候故、態々荒川浦迄参り様子承り見候へ共、難船等之義ハ一切無之趣申之、勿論右等之義、実々有之事二御座候へハ、当村方を早速相知らせ可申趣被申聞候二付、夫を和邇村へ罷歸り、南濱村二而一宿いたし、翌廿日二右三人之もの共帰津致し此段申聞候、全此度之義いつわり事二而、右之錢壹貫文かたり取候義と存候、然ル処、其後南濱重右衛門罷登り当会所へ参り申聞候ハ、此間ハ折節私留主中二而不行届取計仕候二付、不存寄御心配相掛ヶ趣段々断被申聞候而、右飛脚賃錢之義ハ不苦候得共、右壹貫文之義ハ隣家二而借り遣候義二而、何共氣毒二存候間、右錢之義ハ何卒可然勘弁いたし呉候様、段々被相頼候二付、此度之義仲間を相并遣候義二而ハ一切無御座候へ共、右重右衛門方ハ毎度加子共参りセ話二も相成候事故、此度之処ハ船頭中間を取替遣候趣二而、仲間を右壹貫文船頭中間へ相渡し遣候事、

一、中間造舟之砌、是迄祝義もの取やりも有之候得共、此義者相互二心遣ひ之事二付、已来者一統祝義もの無用二可致趣、相談之上相究り

候間、心得違無之様急度相守可申事、

(裏表紙)

八拾五番

百艘

三、「万留帳」文化八年（二八一二）

（表紙）

八拾六

辛 文化八歳

万留帳

未 正月吉日

（本文）

目録

- 一、芝山様御子息御元服祝義之事
- 一、山門御普請ニ付薪中間其外中間へ掛合之事
- 一、矢橋浦久兵衛艦流失御廻状
- 一、圓光大師御忌之留
- 一、平方振舞日限相究候事
- 一、膳所桜ノ馬場出火ニ付見舞
- 一、当他屋井戸普請
- 一、朝鮮人対州へ来朝
- 一、御蔵御願見金藏掃除之事并同堀へ用達小船為廻置候事
- 一、尾州ノ者北ノ町舟ニ而風呂敷包取残し置候事
- 一、吾妻川浚之事
- 一、当所武兵衛舟御役所樹木ノ枝ヲ折書付差上候事
- 一、尾花川町方嶋ノ関砂貫度被相頼候事
- 一、大濱御印場道筋ニ付切門木戸之事

- 一、木濱渡し之儀ニ付杉江、赤井、開発相手取出願之事
- 一、御所司代唐崎方御役所御願見舟手当被仰付候へ共御延引之事
- 一、牧野九郎兵衛様方御頼ニ付海津へ鵜ノ事相頼候事
- 一、尾花川網引場御休所取しつらひノ義御尋之事
- 一、嶋ノ関地面本願寺方御戻し被成跡玉屋十兵衛、池田屋嘉七へかし申候事

- 一、新在家、正興寺、赤塚、山上、右村々参宮之事
- 一、所司代御願見
- 一、忠兵衛船海津行古手荷物切解盗取候事
- 一、御普請役菊名直市様方坂本へ舟賃御尋ノ事
- 一、猿ヶ関ニ而小船持徳藏召抱ノ女水死ノ事
- 一、大溝五兵衛船へ盗人這入御届ケノ事
- 一、酒屋甚兵衛艦入雨覆被致書付取之置事
- 一、上番船ニ水戸女中方ノふとん壹つ紛失ニ付桑名方書状来り、返書遣し候事
- 一、彦根他屋へ尾上、片山ノ船着候故荷問屋当仲間と堺長方ニ而寄合ノ事

- 一、北比良舟年寄新左衛門丸船願之事
- 一、坂本町鍵長裏へ盗賊這入尾花川艦持兩人へ掛合候事
- 一、尾上船他屋へ着候故呼留吟味致候処段々断申同所船年寄登り断被申候事

- 一、塩津浦御召状舟大工之事
此留所々ニ有之候
- 一、坂本新兵衛死去ノ事
- 一、東尾上丸船願出候事
- 一、小野又三郎於江戸死去ノ事

一、道中御奉行御通りニ付御出迎

一、牧野様舟方掛り御転役

一、嶋ノ関堀端ニ六十余ノ男行たをれ居候事

一、永濱善四郎船石灰積登金蔵ニ而出火之事

一、京都御奉行三橋様御登り

一、松本へ東本願寺仏具長持類持越舟積一件

一、当屋家賃直上ケノ事

一、酒井讃岐守様御組獅々飛御下見

一、薩州御隠居様御登り御下り一件

一、御高札一件右場所石垣之事

一、吾妻川浚へ土砂土井御蔵、若州御蔵裏へ持出し候ニ付内堀様へ御届

ケ申上候事

一、京都御組様廿人計矢橋へ御乗船ノ事

一、大溝蔵へ大豆船積之事

一、当所若殿様御元服恐悦之事

一、廻りと与八養子之事

文化八辛未年正月二日、年頭御礼

石庄三郎様

金子貳百疋 目録台ニのせ下ケ札付

御元々

柴山泰蔵様

同

内堀繁太様

御町役

曾根源治郎様

同

篠田牧太郎様

御舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ金百疋宛

御目附并小頭兼帯

高橋角左衛門様

川嶋惣右衛門様

多賀喜曾太様

小頭

佐久間正蔵様

舟方下

北出雲平殿

惣年寄

矢嶋藤五郎殿

小野惣九郎殿

町代

堀猪三郎殿

遠藤仁右衛門殿

右九軒へ銀壹両宛

当駅肝煎

吉本弥四郎殿

山本俵五郎殿

御足輕

稲葉半七殿

小遣衆式人

右五軒へ鳥目廿疋宛

御門番吟助殿五百文

//内義貳百文

白崎久太夫様 御門内新建

御蔵番両三人 平蔵町年寄

御組屋敷不残 右手札計二而

右之通与治兵衛、太郎兵衛相勤ル、供

其外当町年寄手札計、是ハ昨年ハ当屋敷買得ニ相成、家主ニ付、

貝屋七兵衛手札計

正月二日、膳所船奉行

中神藤左衛門殿 外郎貳卓、壹匁ツ、
硯ふた二のせ

船方下

田原喜右衛門殿 同壹卓

阿閉権三郎殿ハ相勤ルニ不及候へとも、最初ハ懸りニ付御同人ニ限り御在役中ハ名札計持参ニ而相勤可申事、

但し中神氏風邪ニ而御引籠ニ付、当年ハ御逢無之候事、

当年ハ御役所お札相済候上、直様右之通与治兵衛、太郎兵衛相勤ル、

三日、京都御礼

東御奉行

小長谷和泉守様

金子三百足 目録台二のせ
下ケ札付

御用人

小林八左衛門様

岡田長兵衛様

赤間三郎右衛門様

山田嘉藤治様

松野小右衛門様

飯塚五郎作様

吉川吉助様

右七軒へ銀壹両宛

御公事方

山田釵治郎様

櫛橋平蔵様

石嶋五三郎様

中川定右衛門様

塩津惣五郎様

喜多尾八郎右衛門様

加納万五郎様

平尾演右衛門様

右四軒へ金百足宛

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

右九軒へ銀壹両宛

西御奉行

牧野大和守様

金子三百足 目録台二のせ
下ケ札付

御用人

小熊三郎右衛門様

嶋田政右衛門様

香西伴助様

岡野大助様

神山善太夫様

横溝市右衛門様

中村重右衛門様

大野万左衛門様

御勝手御用人

十九浦九十九様

右九軒へ銀壹両宛

御公事方

深谷平左衛門様

上田八蔵様

不破伊左衛門様

柏原治部右衛門様

本多新左衛門様

廣瀬佐野右衛門様

熊倉政吉様

酒井宗助様

飯室助左衛門様

山田傳左衛門様

右五軒へ金子百足宛

浅賀和作様

畔柳三右衛門様

右七軒へ銀壹兩宛

町代

田内与助殿銀貳兩

筆工

奥田九右衛門殿銀壹兩

下町

代藤沢傳六殿鳥目廿足ツ、

藤村佐市殿

東西御門番三百文宛

東西中番中へ三百文宛

上八町代中へ五百文宛

下夕町代中へ五百文

小番へ三百文

追分丸屋四郎兵衛へ百文

山科大津屋孫兵衛へ百文

宿鍵屋佐助へ三百文

同下女へ貳百文

右之通孫右衛門、七兵衛相勤ル、供新八、荷持東ノ喜兵衛

✂金三兩三步

⑤五百文二

銀貳兩壹包

三百文六

銀壹兩三十三

貳百文三

百文

二

正月四日、初寄り、帳場勘定仕立、

例年之通中飯有之候、鰯のやき物、かき汁

六日、例年之通組ノ帳とじ、

七日、天氣能、惣ばん積、

正月六日、芝山^(巻)泰藏様御子息御元服二付、金子三百足送ル、右躰相祝ひ候類例無之候へとも、當時元^(速カ)御筆頭二而都而惣兼帶之事二付、既ニ去冬も中間方より申^(速カ)辺置候義も有之候間、旁以如此之取計ニおよひ候事、与治兵衛持参いたし候事、

正月十一日、帳固メ祝儀、役人不残出勤、無滞相済申候、不相変尾花川舟方惣代兩人并小舟入上下、小ふね惣代、関ふね治兵衛、坂本新兵衛、例格持参物、左之通、

一、諸白 貳升入壹樽 尾花川舟方惣代

一、酒 貳升入壹樽 下組小舟中

一、まんちう百 上組小舟中

一、酒 貳升入壹樽 関舟治兵衛

一、諸白 貳升入壹樽 坂本新兵衛

右出礼之もの、勝手ニおゐて例之通祝ハセ申候事、関舟治兵衛、坂本新兵衛ハ台所并奥ノ給仕世話いたし候、

堅田町組三郎兵衛殿、当時勝手勤メニ付、右会釈旁金子百足差出され候事、

北野町組太郎兵衛子息貞太郎殿、去ル辰正月廿一日より見習ひ与して出勤候処、其後不快旁ニ而中間へ相断り休居いたし有之候処、此

度中間へ被頼出、評儀之上十一日帳固メより被出候、右二付樽肴被差出候、

但し諸白式升、肴八鯉壹本、後段二料らせ給ひ候事、

堅田町組庄兵衛殿、昨年ハ眠氣あしく中間へ相断療養いたし被居不参かち故、右挨拶として鯛壹枚、生貝式つ添被差出候事、後段二料らせ給ひ候事、

大津町組六兵衛義、山上蔵仲相勤被居候処、昨年は同役無之不役二而始終蔵詰候付仲間不参、為挨拶鮎三枚正月四日二被差出、即座二遣候事、

正月十五日、芦浦御礼

当日北風甚敷候而下物へハ着舟致かたく、漸々山田上り、

昆布のし

一、観音寺様

扇子三本人壹箱

但し扇子箱くりあし台三重くり

京都へ御登り被遊候而御逢無之、御酒・御せちハ例之通相悦申候事、

西川五郎兵衛様

片岡喜右衛門様

久松清右衛門様

此三軒へ扇子壹箱つゝ、尤台有之、常のし付、

右之通七兵衛、庄兵衛相勤ル、とも新八、

覚

一、百廿四銅 壹ツ

一、四拾八銅 壹ツ

一、三拾六銅 式ツ

一、式拾四銅 三ツ

一、十二銅 十九

×右之通奉納仕候、以上、

未二月廿一日

貴布祢御社中

正月廿一日、貴布祢御神酒各々御出席之事、

但し七兵衛殿、勘三郎殿、忠兵衛殿、不快二付御不参之事、

大津

百艘

同日、大津町組清次郎子息仁兵衛、此度清次郎と相改、父清二郎義

は藤次郎と名候段、組内を被及披露、当清次郎今廿一日を為見習と

出役被致候、酒二升、小ふな五つ被差出候、

当日出勤之衆中盃相濟、於勝手一飯被相認候事、

組内ハ前ノ七日二年寄与次兵衛方ニ而盃相濟候事故、当日ハ為惣

代与次兵衛計盃いたし候、組内八日、

八寸するめ

牛房

かつのこ

一、此節山門御用御普請中ニ付、船積方心得違在之候而ハ惡候故、薪仲間惣代川口枿屋市左衛門、丸屋町炭屋仁兵衛、竹屋仲間西今嵐竹屋源右衛門、石灰仲間惣代平蔵町品屋理助、右之銘々方江年寄孫右衛門罷越、自然坂本行御用荷物二候とも庭はなし売ハ御無用二候段申達し置候、

右ハ前以膳所行之義二付、御役所を被仰渡在之候二付、得と承知居候段被申候、

右之内升屋市左衛門は惣代二而ハ無之候へ共、当廿一日平蔵町近江屋伊助と申者江炭百俵庭はなし二被壳候、右伊助を坂本櫛二為積候付、即呼二遣し及引合、乗前九匁七分八り受取候二付、重而心得違不被致候様申置候、廿二日、廿三日之事也、乗前は伊介を差出候、右留書ハ山門一件帳へ写可申事、

一、田地養舟壹艘

栗太郡矢橋浦

舟主久兵衛

右之舟矢橋浦船入二繫置候所、去ル午十二月二日夜流失之様子二而不相見候二付、段々相尋候へとも不見当由二而、浦々吟味之義願出候之間、浦限り相糺右舟有之候ハ、船主へ及通達二可相渡候、此配符浦名下二令請印早々順達、留り所を可相返候、以上、

未正月十二日

大津浦北小松留り

大津

御役所印

右同断壹通 松本始メ
伊庭迄

正月廿三日御認、廿四日御渡し、前文同様之御配符壹通

田地養舟壹艘、堅田浦舟主清右衛門

大津浦始

川道迄

同断御配符壹通 同所同人

松本三ヶ所始

伊庭まで

即日四つ時坂本長七江渡ス、松本浦江は与八二為持遣ス、

一、圓光大師御忌六百回、京都知恩院、黒谷浄花院、百万遍、誓願寺、圓福寺等二而被執行、正月十七日弘覺大師之送り号、御勅使廿二日中日二付宮様御導師、本堂前二而伶人之舞、御鐘、廿三日保科寺ノ六才在之、其外日々種々結構之御法事二候也、
右二付参詣之旅人遠国を夥敷被登候事故、小舟入渡し場人当テいたし相待候へ共、廿三日、廿四日、廿五日、右三日ハ相応之往来も在之候へ共、船切二相成候程之事ハ無御座候、勿論右御忌中は雪降大寒シ大あれ、一日も天氣快晴は無之、寒中二も無之さむき御事二候也、為後年記置候、

平方振舞之事

当仲間安永之頃大借出来、既銘々相続方も無覺束及騒動、一同相談之上、則天明条目主法相立、冥慮二叶再仲間建直、然る処当時仲間江出勤無之、平方之衆中其恩義被存、其後例年中春之頃出勤之役人中不残不致請招、年中之□を払、年々之参会大慶不過之、移りかわるは世の倣^{ナヒ}二而、年月過二随ひ人もかわり、適々相催候事茂互ニ心安たて二而、趣意二振事茂右流左死、依之旧冬中間講会之節平方之衆中江相断、尚更時節さミしき折二も候へハ、向後は被相止呉候様及辞宜二候へとも、今更止メ候而ハ平方中心濟致かたく、猶又平方一同無底意申咄候上ハ、質素儉約を不失弥内心二ハ無疎意、嚙町ニ相心得可申義二付、不相替集会致くれ度旨、再三相頼被申出候上ハ、中間方一同及再談ニ、平方之申条二随ヒ、已来例年三月五日二日限を相究、双方及入魂二候上ハ、兼而其心得をいたし、不参無之様銘々心懸ケ、自己之勝手を省、神妙二出会可致条如件、

文化八年

未二月九日

与次兵衛、太郎兵衛、孫右衛門、七兵衛、孫九郎、三郎兵衛、
六兵衛、勘三郎、忠兵衛、庄兵衛、八郎兵衛、定太郎、清次郎
右何角之世話人塩屋佐右衛門殿、船屋十兵衛殿也、
平方

一、二月十日巳刻、膳所桜之場、阿閉樵三郎殿屋敷前出火致、三、四、五
軒計焼候二付、年寄孫右衛門早束見舞^(速)二罷越候而、船方中神藤左衛
門殿、田原喜右衛門殿、右三軒へ以名札相尋候事、
全躰阿閉氏は見舞不及申候へ共、此度は近火二付如此、尚又酒五升、
鯛三把直様跡を以致五兵衛遣入、
旧冬十月廿日、同晦日、両度共出火之節、廿日は太郎兵衛、晦日は
六兵衛罷越、見舞候事、但中神氏、田原氏計也、
右廿日之出火ハ新堀東南側ハ東角迄凡七、八軒はやケル、夜分ハ明ケ
方迄、晦日は船屋形之通り只老軒ヤケル、夜明ケ時分、
右留書ハ膳所一件帳へ写可申事、

一、当町内井戸普請初り、日々手伝大工半七出情被致候付、当他屋中ハ
酒五升、するめ三把遣候、
此わり合

一、二月十二日、右為見舞酒五升切手、町内原田五郎助殿方江孫右衛門
持参いたし候、手前也、

一、十三日、右二付年寄原田五郎助殿挨拶礼二被参候而、大工手伝へ酒

之義も挨拶被致候、

当年朝鮮人来朝二付、於対州二御受有之候、依之為御名代信使

小笠原大膳太夫様 豊前小倉城主、十五万石

脇坂中務大輔様 播州龍野城主、五万三千石、当時寺社御奉行也、

是ハ跡を御登り被成候由、

右御下向被成候義二付、道中御奉行

井上美濃守様 寛政年中の比京都西御奉行也、

柳生主膳正様

右双方二月十九日石部宿御出立、当所江昼八ツ時御着被成候、石場

迄御出迎、与次兵衛、太郎兵衛、供清吉

是迄道中御奉行御登りハ例無之事、此度ハ大目附勘定役二而御登被

成候、当所御着之節、大雨二御座候、

翌朝

八町ノ上迄御見送り、孫右衛門、三郎兵衛、供五兵衛

明六ツ時分御出立、

右之外御普請役も式三方御付添二付、石場出向之節御窺申上候事、

一、二月十四日、町代部屋を呼二来り、与次兵衛罷出候处、小野宗九郎
殿、遠藤仁右衛門殿被申聞候者、明後十六日京都西御奉行牧野大和
守様山門御用二付坂本江御引越被遊、当所御蔵御順見并御役所江御
立寄被成候、右二付金蔵堀掃除為致候様奥を申出在之候、其中間を
被致候義哉、与次兵衛、善兵衛、此義先達而も左様之義御座候へハ、
御断申上候而、私共かゝり二ハ無之段御断申上候处、小の氏奥江其
段被申上、即刻蔵橋町、御蔵町右両町呼寄右之段被承候处、御蔵町
年寄米屋吉兵衛、蔵橋町年寄小松屋仁兵衛被申上候者、寛政十一年

末年町内并百艘三つわり二而さらへ申候、此度茂其通り二被仰付被下度旨二付、又候其段奥へ被申上候処、船は百艘を差出し、後は両町をいたし候様被仰渡候段被申聞候へ共、何分両町断被申御受不申二付、何分三方示談いたし、善惡明朝申出候様二と被申聞引取申候、百艘も留書相改、否哉可申出段申置候、

留書相改見候処、

一、寛政十一未八月十九日、御所司代牧野備後守様山門御順見、唐崎を御乗舟被遊、当所御蔵江御着船之趣二よつて、其節右(掃除)の義、百艘并二両町を可致段被仰付、達而御断申上候へ共、差懸り候義日間々無之申立候段、取調居候而ハ及延引候間、此度之義は只双方仕来りを不論、明日中二浚立候様利解被仰聞、差懸り候急御用二付、無是非三方共一同御受申上候而請仕候へ共、雨天二付御延引相成候、入用は三つわり二致申候、

右一件其節の留帳二在之、外二船御揚(揚)之訳茂在之候事、

一、同十二申五月六日、右御順見之節は両町を浚被致、百艘を舩差出し候事、

一、右掃除申付候而は差支之段、書付差出候様被仰渡、五月晦日町方御役所石丸三平様江書付差上、尚又船方御懸り内堀様へも差上置候事、
一、同八月廿九日、当所為御順見、御所司代牧野様御越被遊候付、金くら堀、御蔵近辺、塵、あくた、穢物類掃除入用二付舩差出候様、取捨人足は外方江手当申付候、前両度共差懸候義故、三方江申付候へ共、いつれ茂迷惑之由申立、三方を書付差出し在之、未糺中候処、又此度も差懸候、後之例二ハ不相成、一舩之義は御調之上可被仰渡間、其意を弁船差出候様被仰渡、則舩船壹艘差出し候、尤其節も御順見は延引相成申候、柴山様也、

一、同十三年酉二月七日、船方御役所を内堀様被仰渡候、明後九日御所

司代牧の様当駅御順見在之二付、兼而金蔵堀掃除之義於町方御役所御糺在之、此度右懸り町々江被仰付、依之町分を船は御役所を申付候様相願、則御聞濟被置候間、明八日舩式艘差出可申被仰渡、加之之義は御免被下度相願候へ共、無御聞入壹艘二老人宛のせ遣し候事、右先達而願出候町方御役所は、別段之仰渡無之段被仰渡候、向後右之通二而、先づ相片付候事と存候、但此時も御乗舟ハなし、

一、享和式戌四月廿五日、御所司代土井様御順見、金蔵堀掃除両町江被仰付、舩は例之通百艘を差出候様被仰渡候、

此時御蔵江砂揚被仰付御断申上候訳、

御代官様正連坊迄早船、土井様は馬上浜町通御越被遊訳、留書

二在之候事、

右之条々之趣留帳二在之、尚又掃除之義は右之通酉年二月二相片付在之候事二付、十四日夜分蔵橋町年寄小松屋仁兵衛方江、与次兵衛・孫右衛門参り、則蔵橋町五人組肴屋権兵衛・年寄仁兵衛・御蔵町年寄吉兵衛、右五人及示談、前段留書之振合二而相済在之事二候へ共、右両町は右舩之義覚へ無之、併蔵橋町留書二ハ薄く百艘を舩差出し候留書も相見へ候へ共、御蔵町吉兵衛直様立歸り、町内改見候へ共、何も左様之義無覚之、勿論帳面預りも今晚不致在宿、右私一人之了簡二も難相片付、右帳預り歸り次第得と相改、明朝取究可申条二而引別レ候、

一、十五日朝待受候へ共、両町を沙汰も無之候付、蔵橋町江尋被遣候処、未御蔵丁返事無之間、追而否哉以使可申達段被申越候、使廻り五兵衛、一、右返事無之、無程四ツ時二至候へハ、与次兵衛町代部屋江罷出、小の氏、堀氏御詰合、昨日引取あらし留書相改見候処、則此度被仰渡候通二而相済御座候、右之段々町内之者共江示談仕候へ共、承知不致候、百艘之義ハ舩舟何時二而も差出し可申間、此段被仰上被下

候様申込置、引取、

右二付町分は、何分三方懸りならてハ御受難申、段々御断被申上候へ共無御聞入、已前之姿二而被仰渡、可相願義は十七日二也共可申出旨被仰渡候由、

右之趣二而ハ、寛政酉年船方は百艘へ被仰渡候へ共、町方御役所は町分へ御沙汰無之義二被存候、

右之通故町分へ被請、百艘ハ艀四艘出しくれ候様、蔵橋町方以小歩被申越、又候与次兵衛小松屋江罷越、右様子承り、仁兵衛同伴二而金蔵堀中見受候二、余程塵、こもく故両町引分レ、式艘つゝかしくれ候へハ勝手宜段被相頼候、承知致、しかし今日ハ快晴二候へ共、明日之天氣ハ難計日あいた無之、晴雨とも明早朝差出し可申段義定致歸り候、御蔵町へも可然伝言申置候、

一、為念引取かけ二町代部や江立寄挨拶いたし置候、

一、十四日夜ハ雨天二而、十五日終日雨降、蔵橋町方人足共

右人足ハ濱通り在之方へ申遣由、家割二而ハなし、

一、当仲間之義ハ尾花川艀四艘、加子四人、則忠兵衛方へたのミ遣候、

右加子へ両町方酒のまされ候由、

右賃錢之事、艀壹艘百文宛、加子貳百文つゝ、

四艘分ハ壹貫貳百文相渡し可申事、

一、当月十六日、船方ハ何茂被仰渡ハ無之候へ共、金蔵堀上下小船五艘相廻し、当会所へ御役人不残袴、羽織二而相詰候、但前日船方懸り牧の様へ孫右衛門参り、自然御用之程も難計、金蔵堀二小船貳三艘相廻し置候間、此旨御内々含置被下候様申上候、念入候段此方二ハ甚取込居候而、不心付旨被仰聞候、

一、十六日明ケ六ツ時御出立、但雨氣不勝、九ツ時二当御役所へ御入被成候、八ツ時過御出立二而、御機嫌よく坂本へ御入在之候、

右御出迎八丁ノ上迄、孫右衛門、定太郎、供清七⁽²⁾

御見送り尾花川片原町迄、同人

一、地ふね加子不残曉六ツ時ハ八ツ時迄、当会所二為相詰候、いつ茂百日御目附様之例を以て、今日雨天二候へ共、只傘・下駄かけ二而銘々来り候付、已来ハケ様之節ハ加子ノ銘々笠わたす用意致来候様申渡置候事、

一、上下小船惣代、上組治兵衛、下組平六、金蔵堀二詰切居候、八ツ時船諸共為引取候事、

一、坂本江御窺之一条は、山門留帳二在之候、

一、去冬尾州中ノ鄉村太助と申者、北ノ町舟、上之方両船二か吉兵衛、長五郎也、風呂敷包取残し置、此節二取二来り候二付、証人名古屋飛脚佐助と申仁江及引合、受取書取也、相渡し遣候事、二月廿七日

一、京都西御公事方下田耕左衛門様へ、熊倉氏ノ御代り、先例之通金百疋与次兵衛孫右衛門持参いたし候、

二月廿六日

一、坂本御留主見舞も相勤候へ共、留書は山門帳二有之候、

一、閏二月九日、吾妻川浚出来、見分与して町役篠田牧太郎様御組一井祐九郎様、町代堀猪三郎殿、右御越被成候二付、仲間ハ年寄太郎兵衛右場所へ罷出候处、無滞御見分相済候上、嶋ノ関会所二而御休足ハ無之、直様川上へ御越被成候事、尤後日御登事也、

一、閏二月七日、平方振舞弥三月五日二日限相究候付、打揃参会致くれ

候様、伊勢屋船屋十兵衛、酒屋佐右衛門兩人挨拶ニ被来候、

一、閏二月十日、武兵衛船内海より戻り船、帆を下し竿を入レ候処、北風つよく竿折レ御役所石垣へ打寄、右内之樹木ニ帆はしら先当り枝折レ、舟付之もの早速御断ニ参候処、舟主并加子名前御聞印被成、跡方御沙汰可有之間歸り候様被仰候ニ付、引取申候、翌十一日御役所方呼ニ参候、孫右衛門罷出候処、牧野様被仰候ニハ、奥方御代官様甚御気障之由申出候間、只口上詫ニ而難済、已来之儀ニ而ハ地舟ハ勿論、其外右舳之儀無之様心を付候様被仰渡、依之書付差出シ、舟主并加子とも召連罷出候様被仰付候ニ付、則左之通書付差上ケ候事、乍恐口上書

一、昨十日七ツ時後、私共仲間内市松船、北浦方入船之砌風波強、折節加子之者遣ひ居候竿竹折レ、御役所石垣へ打寄、御樹木枝損し候段承知仕、相驚早東右船加子共相糺候処、相違無御座奉恐入候、已来之儀者急度右舳之儀無之様申付候間、此度之義者幾重ニも御用捨可被成下候様、乍恐御願奉申上候、此段御聞濟被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

文化八年

未閏二月十一日

百艘之内

船主

市松印

水主

文蔵爪印

同

弥蔵爪印

年寄

孫右衛門印

大津

御役所

右此度之義は御聞濟被置候へ共、已来急度相心得可申段、繼添ニ兩人印形御取被成候、右之通当所加子共へ、已来無念無之様可致段、急度申渡候事、

一、閏二月十日、尾花川町郷中、去ル卯年高水後地低ニ相成在之候処、其まゝニ而差置候へ共、此節山門御普請御用京都御奉行様折々御通り被遊候、依之通り筋直し申度、嶋関砂貫申度段、中間内忠兵衛方被相頼候、然ル処、此節幸ひ嶋関御本山御小屋被取払候跡高低在之候付、外ニハ一切遣し不申候へ共、不外成町分之事故、勿論右道直しは自己之普請共訳違候間、相談之上地面高キ所中間方差図致、艀三十艘計乗り被来、人足は凡五六十人も可在之、暫時ニ可在分取仕舞被申候へ共、地面は広キ場所故、中く聊之事と相見申候、

一、御目附為見習手塚傳十郎様被蒙仰候付、いつもの通り白銀壹兩遣し候、孫右衛門持参致候、

一、前段ニ留書在之市松船、為挨拶と諸白三升持参被致候、

閏二月十三日

一、前段市松ふね懸り、御役方牧の九郎兵衛様へ諸白貳升、孫右衛門持参致ス、

一、閏二月十七日、御役所方呼ニ参り、早速年寄太郎兵衛罷出候処、船方御掛り牧野様被仰聞候ハ、昨日大濱御印場へ罷越候処、此節竹ノ内借家普請有之候而、浜先へ瓦かけこもく等多捨有之、其上不浄之もの扱有之、甚見苦敷候間、町内へ掃除いたし候様可申遣候、勿論

去ル文化五辰年右町内ノ道筋ニメ切門木戸取拵度段願出候処、其仲間方より差支之義申出、依之難出来候間、此義者格別之仲間方差支ニも相成間敷様存候間、町内と熟談いたし、門木戸出来候様被仰聞候二付、太郎兵衛御答申上候、随分私共ニおゐてハ格別差支ニ相成候義ハ無之候得共、船込候節杯ハ諸浦ノ昼夜ニ不限入船之もの共、メ切門木戸出来候而ハ甚迷惑仕候二付、無抛辰年町内ノ御願被申上候節、御尋有之、差支之願書奉差上候義ニ御座候、達而左様ニ被仰聞候ヘハ、此義ハ引退キ相談仕候上、及御返答候趣申上、尚又掃除之義ハ早速町分ヘ可申遣段申之、罷歸り仲間相談仕候処、最初ノ牧野様ニハ門木戸取拵度思召御座候故、此度又候被仰聞候義御座候ヘハ、押而御断申上候義恐多、乍併筋合ニ寄候而ハ、達而御断可申上候ヘ共、此度之義ハさして差支ニ相成候程之義ハ無之、且ハ浜先ヘこもく等多捨候得者、自然と堀埋、其上変死人等出来候ヘハ、是又場所ニ寄此方之厄介ニも相成候ヘハ、矢張門木戸出来候義却而宜敷義ニも存候二付、当時川口町年寄市左衛門義ハ、孫右衛門兼而懇意之仁ニ付、同夜孫右衛門、市左衛門方ヘ参申聞候ハ、今日船方御役所ノ呼参り被仰渡候ハ、此節御町内竹内借家普請有之候付、大濱御印場浜先ヘ瓦かけこもく多ク捨、其上不浄之もの有之、甚見苦敷候間、町内ノそうし致候様可申遣候趣被仰渡候間、此段御承知可被成旨申聞、夫ニ付去ル辰年御町内ノ右道筋ニメ切門木戸取拵度思召有之、此段御願被申上候二付、則其節仲間方ヘ差障り之有無御尋二付、差支之趣御願申上置候処、今日牧野様被仰聞候ハ、町内ヘ毎度掃除之義申付候段、余り気毒ニ存候間、其仲間方格別之差支も無之候ハ、町内ノ手輕キ竹樋ニ而も取拵置候ヘハ、自然とこもく捨ニ参り候ものも無之間、此段町内と熟談いたし候様被仰聞候趣被聞候二付、市左衛門被申居候ハ、右場所之義ハ日々制度も不行届候故、おのつか

ら捨もの等も有之候二付、毎度掃除之義被仰付折ニハ、変死人等出来、甚以町内ニも迷惑仕候二付、仰之通去ル辰年ニハ御願も成就不仕候ヘ共、此義ハ各々方御仲間差支ニも不相成候ハ、町内ニも失却等も相掛り、甚迷惑仕居候間、何卒此度又候御願申上候間、此段承知致し呉候様段々被相頼、何共気毒ニ存候故、不得止事承知致候趣申之候得共、去ル辰年町内ノ御願被申上候節仲間方ノ内堀様ヘ内々御伺申上、御役所ヘ差支之願書等奉差上候義ニ御座候故、町内ヘハ当御掛り御役方ヘ此段御伺申上候而及御返答ニ候間、先御願被出候義ハ暫差扣被呉候様申之、此方ノ沙汰いたし候趣申之罷歸り申候、依之十九日夜太郎兵衛内堀様ヘ参り申上候ハ、一昨日牧野様被仰聞候ハ、昨日大濱御印場ヘ罷越候処、此節町内普請等も有之候哉、浜先ヘ瓦かけこもく等多捨有之、其上不浄之もの等も有之趣甚見苦敷候間、右町内ヘ申遣し掃除為致候様被仰渡、尚又去ル辰年右町内ノ道筋ニ門木戸取拵度段願出候処、其仲間方ノ差支之義申出、依之御役所ニも御聞濟無之間、此義ハ格別之仲間方差支ニも相成間敷義と存候間、町内と熟談いたし、手輕キ竹樋ニ而も致置候ヘハこもく等捨候もの無之間、何分町内と熟談ニおよひ候様被仰聞候、尚又町内ノも段々相頼申候二付、達而御断難申上候義御座候、乍併去ル辰年尊公様ヘ内々御伺申上、差支之願書等奉差上候義御座候処、此度差支無之段申上候義恐多奉存候間、如何可仕哉、此段内々御伺申上候趣申上候処、内堀様被仰聞候ハ、此方ニハ如何躰ニ而も不苦候間、仲間方可然様可致旨被仰聞候二付、左様御座候ヘハ、町内熟談之上町分ノ御願被申上候様可仕候間、此段宜敷御聞濟被成下候様申上罷歸り申候、然ル処、翌廿日町内ノ御願被申上候二付、廿一日四ツ時町方御役所ヘ罷出候様申参候二付、年寄太兵衛罷出候処、御用場ニ而御町役篠田様被仰聞候ハ、昨日川口町方大濱ヘ下ル道筋ニメ切門木

戸取拵候趣、則其仲間方へ掛ケ合、差支も無之趣二付、此段願出候、此義ハ去ル辰年右町内へ願出候砌、其仲間方へ差支申出、此度ハ差支無之趣如何之義二御座候哉与御尋被成候二付、太郎兵衛御答申上候ハ、辰年町内へ御願被申上候節ハ、仰之通仲間方へ差支之願書、船方御役所へ奉差上候得共、此度右町分へ被申聞候ハ、右道筋二門木戸無之候而ハ捨もの等も多致候故、度々掃除人足等相掛り、折二ハ変死人等出来候義有之、甚以町内難渋之趣段々被申聞候二付、何共気毒存候故、無抛差支無之段御答申上候処、左候ハ、右之趣書付相認メ差上候様被仰渡候二付、則左之通之書付奉差上候事、

御糺二付口上書

一、川口町地先字大濱船御印場へ通路之道筋、巾着間半程之処へ竹樋仕、平日メ切候様仕度、尤当仲間へ掛合候処、差支之義無之様申聞候趣二而、右町分へ願出候処、被召出御糺二御座候、

此段去ル辰年三月川口町へ右之趣願出候処、早速地方御役所へ被召出、差支之有無御糺御座候処、右場所ハ御城米等積登り候船二而も、船込之節渇水之節杯ハ、是悲共右大濱崎へ着船等仕候ハてハ、外二差置候場所も無御座候故、前々へ右場所へ着船仕来り、又ハ平日二而も右場所二掛り居候船も有之、別而荷物隠積等仕候船、右場所へ乗り出し置候義儘御座候二付、日々昼夜に不限私共仲間之もの共、見廻り二罷越候義二御座候処、右躰メ切之門木戸出来候而ハ通路差留り差支二相成候旨、御返答書奉差上候処、早速川口町役人被召出、右之趣御利解被仰渡候二付、願書御下ケ相願候段、難有奉承知候、然ル処、其後右場所二溺死人等有之候二付、此度右町役人へ奉願上候願書之趣ヲ以、向後差支二不相成様可仕間、承知致呉候様段々被相頼候二付、甚気毒二奉承承知致遣し、勿論差支之義ハ不仕様被申聞候二付、何卒御慈悲ヲ以、右川口町より願之通御聞濟被成下候様、

於私共も俱々奉願上候、以上、

文化八年未閏二月廿一日

百艘年寄

太郎兵衛印

大津

御役所

右之通書付町代部屋にて相認メ、惣年寄小野氏差上被呉候二付、部屋待請居候処相納り候二付、小野氏へ勝手引取候様被申聞候二付、罷歸候事、

一、船方御掛り牧野様義、当廿日へ御上京被成、四、五日計御逗留有之趣二付、御歸津之上此段御届ケ可奉申上候、尤北出氏へハ早速孫右衛門参り、此段御嘶申上置候事、

一、廿四日夜、孫右衛門義外用向二付、牧野様宅へ参候節、右一件之義委細「御嘶申上」置候事、

閏二月廿五日

一、御役所へ御配賦志通

右ハ今日中二木濱浦へ相達候様被仰聞候二付、則右浦方通船彦右衛門船二、右村方役人十兵衛与申人乗り被歸候二付、右之人へ相渡候事、

一、閏二月廿八日、勢多橋本村へ如例ウゲヒ三十尾到来候二付、即刻当役中へ配分いたし候事、

一、木濱渡し之義二付、杉浦、赤ノ井、開發ヲ相手取御願被申上候由、赤ノ井浦へ返答書取り候段、太右衛門被申来、別紙二写在之、閏二月廿四日

一、坂本山王末御供所、室町仏光寺角

勅願所山王寺

右惣年寄小の宗九郎殿を寄附之義被相頼、諸白五升住持持參被致候、右之義聊か、ハリ無之候へ共、無扨小の氏を被相頼候二付、金百疋孫右衛門持参いたし候、小の氏迄酒五升ハ返し申候、

上巳御礼

石庄三郎様 青銅百疋、木下札付

元々

柴山泰藏様

内堀繁太様

町方

曾根源次郎様

篠田牧太郎様

船方

牧野九郎兵衛様 鳥目五十疋宛

御門内御手代衆、組屋敷新建、

北出雲平殿手札二而相勤、

右之通孫右衛門、三郎兵衛、供五兵衛

一、三月三日、船方御役所へ呼二来り、庄兵衛罷出候処、牧の様被仰聞候者、明後五日を九日迄之内、御所司代唐崎を当御屋敷迄御順見在之候、しかと相知し候義も無之候へ共、船ノ手当致置候様、尚又尾花川二おゐて網為引候二付、御着船場見繕置可申段、依之与次兵衛尾花川江罷越、船方年寄義兵衛立会見受候処、此節高水二而着勝手

随分宜候付、当町方をも掃除之差図等も可有之間、可然取計置被呉候様申置候、

一、御召船手当 忠八

一、御奉行 同断善左衛門

右式艘為洗候、

一、金藏堀掃除、例之通艘式艘差出候様、尾花川江申遣入、藏橋町を頼二来り候、

但前段御用付罷出候歸りかけ二、町方於御役所二町役曾根様、目付多賀様御呼止メ被成、与次兵衛承候処、金藏堀掃除両町江申付候間、其中間を艀差出し遣様被仰付候、

一、御役所前砂為揚候様、分量ハ跡を可申遣間、兼而心得置候様内堀様被仰渡候、

一、右段々手当申付候処江呼に来り、弥五日二御越被成候へ共、船は不被成御好由二付、一切相止メ可申段、内堀様被仰渡候、然ル処、又呼二来り、八日九日比二相成候段被仰渡候、右之趣二付、夫く延引候段、申遣候事、

一、四日、朝呼に来り、与次兵衛罷出候処、昨日砂之義申置候処、延引二付相見合せ候様、尚又此方を沙汰可致段、牧野御氏被仰渡候、

一、五日、朝呼に来り、庄兵衛罷出候処、町役篠田牧太郎様被仰聞候、尾花川迄為下見御代官御出被成候間、船差出し候様、依之小舟二畳四五帖入か子二丁、平六ふね早束差遣し申候事、

乍憚紙面を以啓上仕候、先以御勇健二御座被成、珍重二奉存候、随而當方皆々無事二罷有候、乍憚御安意思召可被下候、然者一昨日書

面差上申候、定而相届キ可申と奉存候、^(暖)左候へハ、右之鳥除ニ今日狩人ニ打せ申候、御入手可被下候、最早段^(暖)段氣之節ニ御座候へハ、一寸も早速御料理世話可被下候、先者右之趣ニ御座候、乍恐御上様へも宜敷被御申上候様奉頼上候、早々頓首、

三月三日

七太夫

又ハ

永原屋与次兵衛様

右返書

以手紙得御意候、暖氣趣候処、弥御壮健ニ御勤役被成、珍重奉存候、誠ニ先日ハ御上津被下、一件之儀も品能相済候旨、目出度奉存候、其節ハ御樽御肴被下忝奉存候、早速御礼可申上候、遠方之儀故延引之段御用捨可被下候、

一、無抛方^(速)御頼ニ付、鵜之儀同役共^(速)御頼申遣し候処、早束御調被下、慥ニ相届ケ千万忝奉存候、御序之節右料物之儀被仰下度、何角と御面^(側)働之段忝、尚御一同へ宜御礼御伝達被下度、右御礼貴節迄、早々以上、

三月六日

百艘年寄
与次兵衛

海津浦

舟年寄

七太夫様

又八様

尚々乍失礼南鑑沓片差遣し申候、定而懸り申間敷候間、此上無御遠慮御申越可被下候、毎々御手紙被下候度毎、御返事も不申入、失礼之段御断申上候、以上、

此返書海津左兵衛へ六日朝渡、

右者朝野九郎兵衛様御願ニ付如此、前段御所司代段々御延引、八日九日之由、依之五日平方振舞無滞相済申候、

五日、呼ニ来り孫右衛門罷出、本庄彦六様被仰聞候ハ、是迄尾花川網引場江御休所取しつらひ候処、白砂ハいつ方^(罷脱カ)引候哉、其中間被致吟味否哉、明朝申出候様ニ付、六日孫右衛門出篠田牧太郎様江申上候者、右砂之義私共中間敷候例無御座候、外いつ方江被仰付候哉、相知レ不申候段申上候処、御役所^(罷脱カ)雇ニいたし、尾花川辺之者へ為持候由被仰聞候事、

^{七日}八日、呼ニ来り太郎兵衛罷出候処、牧野様被仰渡候ハ、此間申置候砂之義、御屋敷江七十荷、御蔵江五艘、明朝迄ニ為持候様、依之坂本新兵衛江申付候事、

右中間之事故相働六艘分ニいたし置候様申之、并ニ賃錢之義も寒き時分ニ者人も無之候間、式百文つゝニ相雇、折ニふレ足しも入候へ共、此義ハ同中間之役と心得、不苦旨申之候付、無如才礼之事ニ候へハ、年老氣之毒ニ付、矢張此度も働人式百文、自分ハ百五十文之積リニいたし、都合式貫百文相渡し申候、外百文酒手遣ス、右砂之義、御屋鋪之分ハ是迄揚来り候へ共、御蔵江当中間^(蔵カ)揚候義ハ無之、享和式戌四月御断申上置候義も有之候へ共、迎も御聞入も無之様子ニ付、不得止事、此度も此儘ニいたし置候、

八日、蔵橋町^(蔵カ)方艸式艘出しくれ候様申来候事、昼^(蔵カ)方金堀堀掃除也、御蔵町^(蔵カ)方ハ沙汰無之、兼帯二而可有哉と存居候処、町代部や江被申参、又部や方申来り候付、壹艘遣し申候、

藏橋町年寄

小松屋仁兵衛

金藏町年寄

米屋吉兵衛

右之通段々取捨在之處、又候延引二付十一日之由、夕暮二御沙汰有之候、

右二付兼而被仰渡置候、御屋鋪を尾花川迄小船早船壹艘日覆いたし、御代官御乗船之御積り、

十日、雨天終日

七ツ時過、孫右衛門御所司代様之義承二参候處、先御延引程は相知不申由被仰渡候、

嶋関中間支配之所、是迄京都大變後東本願寺様長々御遣ひ被成、其後又引続西本願寺様御普請付、小屋、建物等其俣二而御かり被成候處、御普請ハ出来二付最早御入用無之、昨冬迄二而御戻し被成候、然ル処場広キ手遠キ場所之事故、中間をせわ不行届、吾妻川捨砂等猥二盗取、又こもく、穢物等よりく持出捨候而甚困候處、獵師町玉屋十兵衛才木や也、并二池田屋嘉七石屋也、右兩人かり受度被申来候二付、中間差支二不相成様、又ちらかし方為引請可然義二付、中間相談之上、当未正月を右兩人江かし候、地代年分廿貫文被差出候様申聞置候、何事も引受とかや申なから有来仰付、入用ハ当中間いたし可申、兩人の守り不行届二付、格別二物入在之候ハ、中間を構ひ中間敷候、のまこも干乾、網引造り、ふね荷物積場肥物屋衆干物被致候義、尤建物にハ一切相成不申段引合置候、別紙証文在之、

三月十日調印済

一、新在家、正興寺、赤塚、山上、右村々参宮之義、是迄坂本町組をせわ致歳々当、前々は大船茂遣候程之事も在之候へ共、近來は左様之義も無之、小船二而遣し来り候、此義尾花川忠兵衛、藏橋町次郎左衛門方へ、其村々を相頼二来候へハ、夫くせわ致、余り中間方せわも無之候處、尾花川は遠方、次郎左衛門は昨年相果、仍之一円中間をせわ取計致遣候二付、当年は次郎左衛門方へ来候産物、不殘中間へ被差出、相談之上聊の物二候へ共、中間へ受置候御腹一鯛式把中間へ受置、火縄壹、のり付杓子式本、和中散一袋、是は先つ当次郎左衛門も昨今之事故、彼方へわけ遣し候、

一、新在家村小船壹艘、治郎左衛門方へ申来ル、上治兵衛、加子新兵衛源八、

三月四日出立、三日夕方扇屋関江相廻、十一日下向、同斷際川江廻ス、くと、茶釜入 当年茶碗五、大和ふろ、土瓶入呉候様二郎左衛門方を被相頼候處、已来ハ入り中間敷事、

錢壹貫文、酒式升樽、下向後來候付、直様右参候者方へ船主方へ為持遣ス、

一、志賀正興寺村

際川江廻ス、 大津町組新八

下向後酒式升、 錢壹貫文

加子伊八

孫三郎

三月三日暮を際川江相廻、同所善四郎方へ船二着所ヲ相届ケ可申事、

茶かま、くど入

一、赤塚村、右同刻唐崎廻相致可申、村方を見届ケ二参候筈、

茶かま、くど入 下組繁次郎

新藏

市藏

右酒五升、錢壹貫文下向後來ル、

一、山上村三月五日出立、四日□日

上ノ五兵衛

四ツ時迄二熊の川江相廻ス、

かこ藤七

くと釜入

酒二升、錢壹貫文来ル、同断、

右三ヶ所忠兵衛方へ申来候、下向ハ式ヶ所共十一日、際川へ相廻し、正興寺村ハ唐崎へ遣候、

右酒二升宛、錢壹貫文ツ、船主方へ遣候、残り壹升は中間入、右之通二在之候、併送り向イ船ハ代り候事、

二月十九日二書留在之候朝鮮人来朝二付、脇坂中務大輔様三月十七日当津御小休二而、御通行在之候事、

三月十九日、船方ゝ呼二来り、孫右衛門参候処、牧野九郎兵衛様被仰聞候者、当廿五日ゝ未之天氣見定候か子在之候哉と御尋二付、申上候者、当十五日坂本御用会所ゝ御召在之、右同様之義等御座候へ共、当时天氣之程しかと難申上段御断申上候へハ、此段御会被下度御断申上候処、牧の様尤之義二候間、其段奥江可申上由被仰聞候、

右ハ京都御町御奉行ゝ被仰越、御所司代之懸りと被存候、

一、閏二月下旬、赤ノ井御坊祖師御忌被営、依之当津御坊より長持入其外少々被積下、乗前用捨致遣候付、三月廿四日右為挨拶赤之い御坊講中ゝ諸白式升被差出、惣代問屋太右衛門被来候、

一、三月廿九日、沖嶋ゝ鱒三本到来ス、此節役人中当会所、東会所詰切二付、貝半江申付早鮮二いたさせ、右当会所配分ス、

一、四月朔日、例年之通日吉御神事御配符四箱、増加子御差留添触共御

渡し被成、則左二記ス、

一、御配符 壹通 大津百艘船持

御文言例之通、略之、

来ル十三日、日吉御神事神輿船割賦之事

大浦

丸船貳艘 水主九人 船年寄

外楫取壹人宛

但百八拾石積ハ式百石積迄

二ノ宮方早船

今津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 十左衛門

外楫取壹人

丸船壹艘 右同断 八郎左衛門

丸船壹艘 右同断 船年寄

丸船壹艘 右同断 同断

海津浦

丸船壹艘 水主拾壹人 治左衛門

楫取壹人

丸船壹艘 右同断 善八

丸船壹艘 右同断 長次郎

丸船壹艘 右同断 船年寄

塩津浦

丸船壹艘 水主十一人 孫三郎

外楫取壹人

丸船老艘 右同断 源六

丸船老艘 右同断 弥助

丸船老艘 右同断 又六

右之船例年之通致吟味、来ル十三日以前大津へ着船可致候、尤服忌
差合之もの相改可申候、此配符令請印早々順達、留り所可相返者也、

未四月朔日 石庄三郎御印

大浦

今津浦

海津浦

塩津浦

右浦々

船年寄

来ル十三日日吉御神事二付、例年之通船割賦被差出候、右差船之内
差支有之候ハ、石付揃候丈夫成船致吟味、代船可被差出候、尤御
神事四五日以前大津へ着船、其段可被相届候、此添廻状共昼夜二不
限早々順達、留り所可被相返候、以上、

大津御役所

未四月朔日 牧野九郎兵衛印

大浦

今津浦

海津浦

塩津浦

右浦々

船年寄中

右廻状海津善助へ、四月朔日午ノ刻渡、

一、御配符 壹箱 坂本浦始

但し御文言者寅年二留有之、

坂本、比叡辻、^(苗鹿)のふか、雄琴、衣川、本片田、^(堅)同體方、西ノ切、

釣漁師、今片田、^(堅)小野、^(和通)わに南濱、同北濱、五ヶ浦、南比良、

北比良、南小松、北小松 右浦々庄屋

舟年寄

此廻状坂本體無之故、松屋町伊之助と申者へ、飛脚
賃百廿四文、書入手紙添持せ遣ス、尤四月朔日未刻、

一、船割符 壹箱 日吉御神事之節御馬船

船数七艘

例之通之御文言二付略之、山田浦、矢橋浦船持

此廻状山田ノ幸助へ渡、四月朔日午ノ刻、

一、御配符 壹箱

但し御文言前之通、略之、但し寅年二留有之、

矢橋浦ハ八幡町迄、右浦々庄屋、船年寄

右浦々ハ午年二留有之、略、此廻状午ノ刻清吉二小舟入へ持せ遣ス、
右之内山田浦ハ廻状、当会所へ受取二被差越相渡申候、此義近年風
与いたし候へハ、幸便二よつて矢橋浦之方江先へ遣候事も在之候付、
御書付順烈之通山田浦へ相渡しくれ候様、近来被相頼、依之右為挨
拶諸白式升二日二被差出候事、
右被相頼候得は、例年右持来り候事候、

一、四月四日、牧野様ハ明五日御所司代様御順見之積、頃日申達置候通
取計候様被仰渡、与次兵衛承歸り申候、町代部屋ハも呼二来り、太
郎兵衛罷出候処、御蔵町、御蔵町ハ堀中掃除之義二付御頼二参可申間、
早々差遣候様被申聞候、小の氏、堀氏也、

右之趣付、尾花川へ申遣し、蔵橋町へ壹艘、御蔵町江式艘、×三艘、加子壱丁つゝ乗、四日昼々、×錢四百四十八文、

先月廿六日、七日比、海つ船六条参人のせ難義致候由、七太夫歸りかけ二咄し在之候付、乍延引左ノ書状遣ス、

以手紙得御意候、追々暖氣二相成申候処、其御地弥御揃被成御安康可被成御入、珍重奉存候、然は頃日其御地船西風二而難義被致候由乍併怪我も無之、船も格別痛無御座趣承知仕悦申候、定而いつれも御人遣候段奉察候、早束御見舞申入度奉存候処、此節甚取紛延引仕候御用捨可被下と存し候様二と、宜御伝達被下候、先ハ為差御義も無之候へ共、右御見舞申上度迄、草々以上、

四月四日

百艘年寄

海つ浦船年寄

七太夫様

太郎市様

万蔵様

三月十四日、忠兵衛船海津行荷物之内、川口弥蔵積古手壱箇切解盜取候二付、早束^通弥蔵方へ懸合、則弥蔵隠居弥四郎、忠兵衛代友七同道二而、四月二日大坂へ下り、出元へ及引合二被呉候へ共、地はなし売二て色品委ク難相分、尤其段加州表へも品能断被申呉候趣二付引取、四月五日御届申上候事、

於当御番所、御目附川嶋文左衛門様、惣年寄小野惣九郎殿、

乍恐口上書

一、去ル三月十四日、当津忠兵衛船二而、高嶋郡海津行荷物積込、字川口堀繋置日和待仕、十七日二出船、漸廿一日二海津着仕、荷物船

揚仕候処、中ノ間二積入置候古手荷壱箇切解有之、見受候処、則荷問屋弥蔵方を積入候内二付、右荷物積戻し弥蔵方二而穿鑿仕候へ共、入日記等難相分、不足之品相知レ不申、依之出先大坂嶋之内中津町大和屋太右衛門と申者方へ罷越取調貰候処、右壱箇之内品数十二品計不足仕候由二御座候へ共、何分品数多雜物之義故、耽与致候色品難相分候二付、残り荷物買主加州大聖寺畑屋七郎右衛門と申者方へ、右残り荷物急々差下シ相調させ申度旨申聞候間、右荷物品々差下し、色品相分り次第可奉御訴申上候、尤加子友吉義舟二泊り居候へ共、全日和待之内夜中寝入候隙を考、胡乱者這入盜取候義と奉存候、且友吉義得と相糺し候へとも、怪敷存当無御座候旨申之候二付、乍恐此段御届ケ奉申上候、以上、

舟主尾花川町

百艘之内

舟屋忠兵衛印

百艘年寄

与次兵衛印

川口町

荷問屋弥蔵印

大津御役所

右届ケ書二奥書いたし、船方牧野九郎兵衛様へ申上置、御目附三軒共口上届ケ、尤多賀様へハ御届候写書差出し置候、右之通二而、直様川口弥蔵方二而右古手作り直し、又船積二致送り被呉候、

右海つ行は三月十三日二積固メ候処、三尾神事当日二付、弥蔵方断被申、同人方計十四日積固メ、川口堀二日和待致候処、所面之通段々延着致、其上早束^通海つ船頭之内壱人二而も罷歸可申筈無其義、剩

登り物積登り旁歸りも遅く、依之歸り次第御届可致処、右大坂江一応懸合候上御届致くれ候様、忠兵衛方内々頼二よつて彼是遅く相成候、重而見合候ため、記置候、

一、四月八日、人馬会所方呼二参り、孫右衛門参り候処、山本兵五郎殿被申候者、御普請役菊名直市様米船賃之儀御尋被成度旨二付、呼二進せ申、則下ノ本陣二御座被成候故、参り候様与申候二付、直様参り候処、御同人様被仰候ハ、坂本迄米^貳太二付舟賃何程相掛り候哉と御尋被成候故、米^貳太但貳俵二付^貳六分二而御座候旨申上置、引取候事、

一、四月八日、猿ヶ関二捨身致候者在之、則小船持徳藏ノ内々召抱候女、新地江預ヶ置候由、右二付町分^下組小船九艘之方江申来り候趣付、惣代甚蔵内々当中間へ申来り訳合相尋候付、但町年寄兼帶也、中間相談之上申達候者、猿ヶ関之義は日々船着のせあけ之場所二候へ共、中間持場遣申二も無之、畢竟外関々同様之事二候へハ、町分江引請取片付可被致旨申聞候処、甚兵衛被答候者、右猿ヶ関波止場之義者、是迄下組九艘之者^を修覆等致来り候処、段々困窮仕、夫故近来御仲間へ右場所御預ヶ申上置候旨、町内江申聞候へハ、御中間離候而ハ始終候処、着船場之義自ら手せまく相成候哉と歎ヶ敷奉存候二付、不苦候ハ、此度御届二連印いたしくれ度旨被相願候へ共、中間二も外場所と違ヒ可相成義ハ致置度心得二而、品々勘弁致候へ共、何分右場所表立預り候と申義も無之、組内計の心得二而申聞候義、むざと奥印いたし候義ハ難致事二付、追而勘弁も可致、勿論此度中間方構ひ不申、迺も平生積のせ之義二町分^下故障被申立候筋一切無之筈、右二付甚兵衛承知二而引取、町分限二而御届ヶ被申上、当中間一切

懸り合なし、

為検使御目付多賀喜曾太様、町代堀猪三郎殿

高橋^等太郎様

但右場所柄之義故、為見舞と酒三升、

平蔵町下組御町中 百艘と書付いたし遣候、

宝曆十小舟入堀留二亦子捨在之、其節之振合を以取計置候、尤是ハ空地御改無之已前也、

一、三月十七日^下兩本願寺様、佛光寺様、廿八日迄祖師御法事在之、北浦^下被登候参詣之衆中并東国筋^下追々上り下り、小船入船場乗せ方手締り一件、別帳二記置、

一、三月十四日、三井寺政所^下例年之通、竹之子拾本到来候条、即日配候事、

但当年之筈は殊外見事也、

一、四月廿三日朝四ツ時、蔵橋町炭屋善助、大溝浦五兵衛船加子助八、佐五右衛門、右兩人召連参り被申聞候ハ、昨廿二日右兩人之もの共入船仕、旅人荷物等船揚仕舞候而金蔵堀へ相廻し、則善助前二繫キ置、夜分四ツ時過^下右加子兩人共船二臥候而、明ヶ方二見請候処、艫之間二入置候兩人衣類入風呂敷包貳つ紛失仕候二付、段々吟味仕候処、揚り場二風呂敷解捨有之趣被申聞、宜敷取計致呉候様被相頼候二付、此段町方御役所へ御届書、左之通、

乍恐口上書

一、昨廿二日七ツ時、高嶋郡大溝五兵衛船加子助八、佐五右衛門、金蔵堀へ入船仕、旅人荷物等船揚仕、夜分四ツ時過^下船二臥候而明ヶ方

二見請候処、艫ノ間ニ入置候風呂敷包式ツ無御座、段々鑿^{下上}穿仕候へハ、揚り場ニ右風呂敷解捨有之、全右加子共寢入候隙ヲ考、烏乱もの這入盜取候義と奉存候、則風呂敷包之内紛失候品、別紙書付仕、此段御訴奉申上候、以上、

文化八年

未四月廿三日

同

佐五右衛門印

右之通相違無御座候二付、奥書印形仕、此段奉申上候、以上、

百艘年寄

太郎兵衛印

大津

御役所

紛失物品書

一、南鐐式片

一、銀三匁五、六分

数式ツ

一、錢六百五六拾文

一、木綿紺浅黄立嶋裕

壹ツ

一、同赤三筋立嶋布子

壹ツ

一、同紺浅黄立嶋半てん

壹ツ

一、浅黄縮緬男帯

壹筋

ノ七点

右者加子助八所持之品ニ而、尤金錢之義ハ此度少し買もの仕度持登候義御座候、

一、木綿紺立嶋単物

壹ツ

一、同紺立嶋布子 壹ツ

ノ式点

右者加子佐五右衛門所持之品御座候、右之通相違無御座候、以上、

文化八年

未四月廿三日

同

佐五右衛門印

右之通相違無御座候二付、奥書印形仕、此段奉申上候、以上、

百艘年寄

太郎兵衛印

大津

御役所

右之通相認メ町代堀氏取次致し被呉、則御当番御組高田好之進様御聞濟被成候而、当手掛り等も有之候ハ、早速御訴可申出様被仰渡候事、

一、御目附三人様へ口上ニ而御届申上候、尤多賀様へハ紛失品書別紙ニ相認メ差上置候事、

一、右町方御役所へ差上候御届ケ書、式通共丸写仕候而、奥書ニ右之通町方御役所へ御訴奉申上候二付、此段御届ケ奉申上候、以上、右之通相認メ、船方御役所御掛り牧野様へ奉差上候事、

四月廿三日

扇屋ノ関

大坂御目附

御出迎

土屋勝右衛門様
長井五右衛門様

孫右衛門
三郎兵衛
供新八

右者勢多川筋し、飛、供御瀬御順見与して御越被遊候二付、例之通
御供船三艘差出し、尤外二用意船壹艘相廻し置候事、

端午御礼

石原庄三郎様青銅百疋、木札付

元々

柴山泰藏様

内堀繁太様

町方

曾根源二郎様

篠田牧太郎様

舟方

牧野九郎兵衛様

右五軒へ鳥目五十疋ツ、

御門内御手代衆、組屋敷新建

北出雲平殿、手札二而勤ル、

右之通孫右衛門、三郎兵衛相勤申候事、とも新八

御茶壺御下り御先触

五月八日巳ノ刻、御役所より御配符式通、御渡し被成、
但シ

野洲郡

矢嶋始野田迄壹通

飛脚賃三百文

同郡

野村始田中江迄壹通 同四百文

右者九日早天二寺内新兵衛飛脚二遣入、

乍恐口上書

一、四月五日奉御届申上候、当津忠兵衛船二高嶋郡海津行積込候荷物之内、川口町荷問屋弥藏方を積入候古手荷壹つ切解在之候処、紛失之色品不相知、依之右同人を荷主加州大聖寺畑屋七郎右衛門与申者方江、及通達鑿穿致候へとも、何分數多之品々故、何品不足仕候与申義難相分り、乍併品毎付在之候符丁を以相考候へハ、凡代銀高二而百四、五拾匁計之代口物紛失仕候由申越候、然る上は、於此方二者尚更相分り不申候二付、乍恐先達而色品相分り次第御訴可奉申上様申上置候得とも、右之趣二御座候間、尚又此段奉御届申上候、以上、

文化八年

未五月八日

船主尾花川丁

舟屋忠兵衛印

百艘年寄

与次兵衛印

大津

御役所

前文之通口上二而船方御役所、又御目付川嶋氏、手塚御氏江右両家江申込置候、

但多賀様ハ此節御退役二付、不申上候、

右ハ川口問屋弥藏方を追々及引合、状通之趣を以如此取計候事、右之外内分巨細之義等在之候へとも不記置、

一、五月九日、柿沼小平太様御目附役被蒙、先例之通白銀壹両差出し申

候、与次兵衛

先触

石原庄三郎手代

御用

牧野九郎兵衛

百艘始り野洲村迄

覚

一、人足四人内、駕籠耆挺
分持耆荷

右者就御用明十六日大津御役所出之、野洲郡野洲村迄罷越候条、於宿々書面之人足御定之賃錢請取之、無遲滞可被差出候、此先触早々継送、守山宿より野洲村江可被相達候、以上、

石原庄三郎手代

〔割印影〕 未五月十五日

牧野九郎兵衛印

百艘、矢橋、草津、守山、野洲村

右宿々

問屋
年寄中

右者御役所を為持被遣候二付、十五日未ノ刻過矢橋浦へ小舟入る相達候事、使清吉

覚

一、百廿四銅 壺ツ

一、四十八銅 壺ツ

一、三拾貳銅 貳ツ

一、廿四銅 四ツ

一、十二銅 十七

右之通奉納仕候、以上、

未五月廿一日

貴布祢御社中

大津

百艘

例之通五月廿一日貴布祢御神酒有之、役人中出席之事、但し勘三郎、七兵衛兩人不快二付不参之事、

京西御奉行

一、牧野大和守様

右五月廿三日江戸御下向二付、追分御出迎、石場

御見送りととも

孫右衛門

三郎兵衛

供孫七

一、^東御奉行小長谷和泉守様御母公御死去被遊候趣、鍵屋佐助方を相為知被呉候得共、先例も無之事故、御悔相勤不申候事、

五月廿二日

六月五日、京都暑氣伺

東御奉行

小長谷和泉守様

金二百疋

二重クリ

目録台

下ケ札付

御用人

小林八左衛門様

赤間三郎右衛門様

松野小右衛門様

御取次

岡田長兵衛様

山田加藤次様

吉川吉介様

飯塚五郎作様

右手札計

公事方

山田釵次郎様

石嶋五三郎様

塩津惣五郎様

加納万五郎様

右銀壺両ツ、

公事下

櫛橋平蔵様

中川定右衛門様

喜多尾八郎右衛門様

平尾演右衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

此分手札計

西御奉行

牧野大和守様

金二百足

二重操
目録台
下ケ札付

御用人

小熊三郎左衛門様

香西伴作様

神山善太夫様

岡野大助様

御勝手御用人御取次兼帶

十九浦九十九様

御取次

嶋田政右衛門様

横溝市右衛門様

大野万左衛門様

公事方

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

本多新左衛門様

飯室助左衛門様

下田耕左衛門様

此分銀壺両ツ、

上田八蔵様

柏原治部右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

酒井惣介様

山田傳左衛門様

浅賀和作様

畔柳三右衛門様

此分手札計

町代

田内与助殿、銀三匁

外二

わかさや八兵衛殿、例年之刺鯖無之、塩子壹升遣し候事、
右之通孫右衛門、庄兵衛相勤ル、とも雇小舟入喜兵衛

六月四日、当所暑氣見舞

石原庄三郎様江 素面^(廻)三拾把、白木台二のせ下ケ札付

包熨斗添

御元々

小頭

柴山泰蔵様

多賀喜曾太様

内堀繁太様

御目付兼帶

御丁役

川嶋惣右衛門様

曾根源次郎様

目付

篠田牧太郎様

手塚傳十郎様

御船方

柿沼小平太様

牧野九郎兵衛様

右四軒へ素面十五把宛

右五軒素面廿把ツ、

右之外御門内新建御手代衆不殘、組屋鋪不殘、北出氏、右名札二而
相勤候事、与次兵衛、忠兵衛、供新助

例年之通湖上船増減相改帳面二記、来月朔日^ハ十日迄二可致持参候、

一、右帳面之内浦方二寄貸舟混乱致候間、借り主并貸舟屋共、入念相改、
船毎二貸借致符合候様可書出候、

右之趣得其意、此配符致請印無遅滞早々順達、留り所^ハ可相返候、以上、

大津

^(割印影写)
印

未六月十五日

御役所印

大津、坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川、本堅田、同體方、
西ノ切、釣漁師、今堅田、小野、和邇南濱、同北濱、五ヶ浦、
南比良、北比良、南小松、北小松、打下、大溝、同體方、永田、
下小川、今在家、藤江、横江、舟木南濱、舟木横江濱、舟木北濱、
南古賀、新庄、太田、藁園、深溝、針江、森村、馬原、木津、
今津、新保、領家、北仰、貫川、桂村、深清水、大沼、中庄、
北新保、知内、西濱、海津、大浦、菅浦、月出両組、岩熊、塩津、
石川、片山、東尾上、延勝寺、早崎、下八木、八木濱、大濱、
南濱、川道

右浦々庄屋

船年寄

右之御配符下坂本四ツ屋九左衛門江渡ス、但シ十七日五ツ時新助^ハ渡、

一、同御配符^ハ走通 松本三ヶ所始メ伊庭止

此御配符六月十六日未ノ刻二松本浦舟年寄方へ持せ遣ス、使新介、
右御廻状出候ハ、早速貸船屋中へ廻状相廻し可申事、

一、六月十八日、例年之通三井寺^(廻)素面廿把来り候事、

口演

一、貸船増減相改帳面二記、来七月朔日^ハ十日迄二上納可被致候、尤
帳面之内浦方二より貸船混乱致候間、借り主并貸船屋とも入念相改、
船毎二貸借致符合候様二可被書出候、此廻状早々順達、留り所^ハ御
返し可被成候、以上、

未六月

百艘印

仁右衛門、仁左衛門、甚吉、六兵衛、源助、清助、源七、五郎八、

善兵衛、源六、

廿二日二源介方へ為持遣入、

一、嶋之関之儀は、前三月二留書在之候通、玉屋十兵衛、証人池田屋嘉七、右両人江及対談かし置候処、此節大相撲二かし申度段、右玉十兵衛被相頼、勿論是迄すもふ二ハかし遣候例も在之二付、大相撲二ハかし可被申旨、前以申置候義も在之候間、中間相談之上、已前之振合を以相撲之義二付何事も一切賄ひ不申、尤棧敷一軒可被差越候、札ハ百枚取候義も在之候へ共、此義二ハ不及段為申聞、六月十三日大入二而、五日之間花相撲之由二而願相済、十四日天気不勝、両三日及延引、漸廿一日迄二無事相済候、但花相撲二ハ棧敷無之、少し高場之由申立也、

右付相撲中不法之義無之様、小舟持上下惣代呼寄、加子共へ急度可被申^渡段書付取之、銘々召抱加子共へも申渡し候書付有之候、平方へハ一切沙汰二不及候事、

一、全躰すもふせわ方何か二至迄、あらきもの共之事故、対中間へ甚不行届之事共、尚又相撲中ハ銘々かことも、そハく致、何角差支之事共多ク在之候二付、重而かしくれ候様相頼ミ来候共得度相考、已来容易ニかし申聞敷事、

右之心得二付、此度玉十兵衛通札廿枚被差越候へ共、中間へ札受候謂無之段為申聞、尤右高場之義ハ銘々日々見物ニ参候事故及引合候間、格別之取計を以勸進元砂子山亀右衛門江金貳百足遣候、尤重而例ニ相成候義二而ハ無之段、急度為申聞、則玉十江相渡遣候、石屋嘉七義ハ、当六月上旬二病死被致候事、

一、六月廿七日、中保町酒屋甚兵衛船囀堀二雨覆被致候二付、及引合書

付取之置候、

右書付ハ空地一件之箱二入、

(挟込文書)「来ル八日呼出之配賦二候間、差急キ可遣事、」

七月五日午刻、從御役所御配賦迄通来ル、八日塩津浦御呼出シ之儀二付、急々相届ケ候様被仰付候二付、即刻仕立飛脚を以相達し申候、中間より塩津浦舟年寄^宛当テ之添状いたし遣入、
飛脚今堀町庄兵衛与申もの、急飛脚故賃銭貳貫貳百文、

一、六月五日、上番船出かけ二水戸磐船女中方御乗船、乗下迄駄歩荷二而持参り直出船之処、右乗下之内蒲団壹紛失之由、桑名駅^ハ書状参ル、尤矢橋浦、当浦連名二而有之候へ共、矢橋浦之義ハ右書状到来迄二尋ニ参り候故、右ふとんハ無之由返書被出候趣、夫以此度ハ当浦計返書認め、本陣吉本弥四郎殿迄七月三日磐船江相届被呉候様申遣入、右書状之返書、左二記シ置、

六月十三日桑名駅^ハ御出し被下候貴札、同廿九日相届忝拜見仕候、残暑強御座候処、御道中弥御勇健被遊、御着目出度奉存候、然ハ六月五日当駅^ハ御女中方矢橋浦迄被遊御乗船候節、御蒲団壹御失念二付、御途中^ハ当駅本陣吉本弥四郎殿迄差出し候様御申送り被下候由、右御申送り之義ハ于今相届不申候、然レ共船中二相残り候品ハ、何二不寄船会所江あげ置、跡^ハ御尋有之節ハ御渡し申上候、此度之御ふとんハ船中二無御座、猶又御書面被下置候故、其節之か子共得と相しらべ候処、一切残り候品ハ無御座趣申居り候二付、此段御断申上候、前文申上候通、船中二御失念之物少分之品ニても相残り候へハ、いづれ船会所江あげ置候事、相違成ル義無御座候、別而御ふとん之義故、船中二さへ相残り候へハ、早速相知れ候義ニ御座候間、右之

趣御断申上候、先ハ右貴報申上度、如此御座候、恐惶謹言、

役人中

七月三日

小舟入船方

大津駅

松本甚蔵様

飯田清治様

猶以矢橋浦二ハ無御座故、当浦吟味仕候様被仰下、猶得と穿鑿仕候処、其砌之船二ハ一切残り有之候品無御座候故、此段御断申上候、已上、右之通返書相認メ吉本江遣ス、尤宿場に残り無之哉、吉本江磐船方之書状持参いたし相尋候所、相知れ不申候由、猶其趣弥四郎殿方添状被致、磐船江相届候様被申居候、右磐船方之来状ハ此帳之中江はさみ置候、

(挟込文書)

「矢橋浦二ハ無御座候間、其浦二而御吟味可被下候、

以手紙得貴意候、弥御安全被成御座珍重存候、然者去ル五日当家先女中下り之節、其地乗船致候処ふとん耆つ失念、其節途中方大津駅本陣本本^(吉)弥四郎方迄被差出給候様申送り、然る処、今二何之沙汰も無之候、如何之事二御座候、早々相糺被成、右弥四郎方へ差出可給候、左候得ハ宿繼二而当家へ相届申候、右得其意度、早々申候、

水戸磐船

根本甚蔵(印)

飯田清次(印)

六月十三日認メ、

矢橋宿

大津宿

船方

一、七月三日、荷問屋仲間為重衆中ハ被申聞候、尾上、片山之舟当所彦根他屋江着舟致候義、折々見受候付、荷問屋中間方及引合候訳も然と不存、百艘方二ハ是迄右様之節は御呼止被成候趣、兼而承居候二付、如何之訳二而御座候哉為御聞被下度、尤當時ハ登り計二而船方二ハ差而御構無御座候へ共、自う悪道付候而ハ、終二ハ下り荷物并し可申哉と不案心二存候、既是迄塩左、白陸杯江出候荷物も多ク被引取候義も在之候間、何卒已来之取締致置段御相談仕度候二付、暑候時分二御座候へ共、南保町堺屋長兵衛殿宅江寄り呉候様、銘々宅者殊外暑く候間、何分乍御苦勞寄合くれ度段、則塩屋佐右衛門殿被申来、依之与次兵衛、太郎兵衛、七兵衛、右三人罷出候処、白銀屋陸助殿、塩屋佐右衛門殿、加賀屋五郎兵衛殿及相談、色々申談候へ共、いつれ茂彦根判之舟二而容易二難見分、勿論百艘方外舟着候節呼止メ候者、明和卯年荷問屋仲間江御運上銀被仰付、其節諸浦江御廻状ハ差出被成候義故、随分氣ヲ付候儀二而、同浦之内二も彦彦根判之舟持江ハ定而御触書者相廻り申間敷、しかし一先大つ浦江着船いたし候分者、右之通氣ヲ付申候、いつれ先方江ハ不抱、只手前方を取締致候振合二候へハ、全彦根問屋江懸合候義ハ、甚むつかしき事二候間、得と被致勘弁、只和順二被取計候義可然哉、已後迎も東他屋江着候義ハ百艘方ハ氣ヲ付、西他屋之分ハ扇屋之関問屋中ハ氣ヲ付被申、其上右船頭ヲひそかに相招、とくと利解可申間様可仕段、塩屋左右衛門殿被申居候、

右荷問屋仲間二ハ何も書物も無之、御運上初り之節書付ハ在之趣、尤諸浦江御廻状廻り候与計、書留文言之写ハ無之由、白六殿被申候、

一、六月晦日、北比良舟年寄新左衛門被來、此度丸舟代艦壹艘外浦方買御届申上候處、北出氏方申聞候者、右艦ハ少々紛敷義も在之候間、面木ヲ付丸舟二致、其上御願可申上段、依之再繕仕、丸舟形二致御願申上候處、船株帳面御改見、北比良之義ハ是迄船株十五株之浦二候へハ、船相増義不相成段被仰聞、尚又已前之願書百艘方二可在之間、彼方二而承候様被仰聞候、北比良之義ハ一切書物も無御座、浦方二而ハ何分不相分、何卒右船株取締之書付為見呉度旨、勿論浦方二船株之限り無之、銘々止メ候へハ、又外之者船遣ひ候者勝手二遣ひ来り、誰唯かれと申義決而無御座候浦方二御座候へハ、此度弥御願不相叶二おゐてハ、村方方故障申懸ケ、此迄遣ひ来り候者相止メ、此度之者差加へ可申、不承知ならば村方方押而御願可申抔と申居候間、寛延之書付村方、船方連印二御座候哉、又ハ船方計之書付御座候哉、しかと承度旨、右舟年寄新左衛門申来候、

一、右浦方之船株帳面二ハ拾五株と書入、其節浦方方差出候書付二ハ、丸船十五艘、船株之義者堅田之分ケ浦二而四株之由、書のせ在之候二付、訳之義しかと相分りかた、印形ハ船年寄兩人計二而村方ハ無之、依之容易ニ申聞せかた候二付、新左衛門江為申聞候者、其浦方之義ハ拾五株与書載有之、其節浦方方被差出候書付者入交り在之候而、差当り見出しかた、しかしながら印形之義ハ舟年寄計二而、村方者在之間敷候段、尚又右寛延年中二諸浦船株取締在之候上ハ、當時二相願候共中、御聞上可有御座とも不存候間、押而被相願候義ハ無用ニ可致旨申聞せ候處、随分御尤ニ奉存候へ共、村方ノ者一向聞入不申候へハ、一先ツ歸村仕、得と申談し、益後之事ニ而仕段申歸り候、

右村方聞入不申ト申訳は、南小松之者江柴山様方下書被遣、船株之義大津浦ハ相究在之候へ共、外浦之義ハ願かたニより相叶可申哉之

旨被仰聞候、依之外浦二相叶候ハ、北比良も押而御願可申上所存候与、乍内々申聞候、

右之通存候外成義とハ存候へ共、自然御聞上り在之候而後、彼是申出候而ハ手後レ二付、七月五日七兵衛乍内分北出氏へ参り為手合候處、下書二而ハ無之、南小松へ手紙を被遣候趣、乍影承り候へ共、中、申出候而ハ御聞入無御座段申被居候、

一、序二前段塩ツ浦御召状之義ハ、彦根料八郎兵衛船大工二為船造候者在之旨、其一件之由、但ハ右衛門と申船持也、

一、当春坂本町鍵屋長兵衛裏江盜賊這入、右米方勤居候米屋庄助と申者二而、尾花川町艦持甚七、甚左衛門兩人相頼、米油之類為運売払候段、御吟味相濟、六月廿五日被行死罪、右兩人之艦持ハ過料被仰付候付、町分之者つき合不致はぶき候段、依之中間方七月五日夜、船方惣代呼寄、弥吉、儀兵衛兩人江為申聞候者、船方之義二候へハ、篤与爰元江参被申出筈、何之沙汰も無之者、定而不被心付義と存候、御上表相濟候義、此上申立候二而ハ無之候へ共、右鉢町分二突合無之者二艦ふねたり共為遣置候謂無之間罷歸、右之段本人共江申聞せ、艦遣候義相止メ候様可被申聞段為申聞候處、御尤ニ奉存候、仰之通最初二御届ケニ参可申筈、仰之通心付不申段、御用捨被下度、尚又右仰被聞候旨無間違、甚七、甚左衛門江申渡し、明晩御答ニ参り可申段被申歸候、

甚七、甚左衛門、過料三貫文宛被仰付候由、

一、七日、尾花川惣代儀兵衛、弥吉兩人被参、一昨夜被仰聞候義、早束甚七、甚左衛門江可申聞處、町中之者申居候者、不輕義ニ付惣代兩人方申渡し、自然手違在之候而ハ、不宜候間、町内惣寄いたし可申渡段申之、則昨六日夕惣寄之席二而、仰之通急度申度、承知いたし

居候間、此段御達し申上候旨、可申来候、但右兩人共、歩方之衆二而外之者とも違ひ氣之毒二存候間、内分ニ含艀舟入替四月かし被遣候共、此方ニハ穩便ニ心得居候段申聞置候、尤艀舟式艀、惣代兩人江預り候旨被仰聞候、

七夕御礼

一、石庄三郎様江 鳥目百疋

柴山泰蔵様

内堀繁太様

曾根源次郎様

篠田牧太郎様

牧埜九郎兵衛様 鳥目五十疋宛

御門内御手代衆、組屋鋪不残、新建屋敷不残、

右ハ手札計ニ而相勤ル、

北出雲平殿手札計

右孫右衛門、七兵衛、供清吉、

一、頃日、尾上船式艀当風呂屋関橋奥ニ而押出し、壹艀は扇屋ノ関江相廻し、跡壹艀は向イ彦根他屋石段江着、船中取片付候様子ニ見受候付、当会所前江呼寄、向イ他や江着候義如何之訳ニ而候哉、不相濟義ニ候間有躰可申聞、定而荷物ニ而も積入可申心得ニ而、コモ杯まくり候事と被存候与申聞候処、船頭善兵衛中々左様之義ニ而ハ一切無御座、何茂訳合不存候二付、何心なくむかいへ着候而船あらひ可申所存の為にまくり申候、何分此度之義ハ用捨いたしくれ候様申之二付、又此方ハ申聞候者、当所へ立入候もの浦法不存候而ハ相濟かた、兼而承候へハ尾上船近来他屋方下り荷物或は飛脚杯のせ歸

り弁理いたし候旨、定而其方共之内ニ而も可有之哉、左候ハ、其浦方船年寄呼寄及引合可申段申聞今一艘西へ廻し候船も呼可来段申聞候処、早束呼ニ参り、則当会所前へ式艀共付置、ひたすら改申候故、左候ハ、此度之義ハ穩便ニいたし可遣間、歸村いたし候ハ、村役へ右之段申咄し、此度不筋之義無之様取締いたし、重而登り候節返答可致段申歸し遣候、右二付、七月八日尾上平兵衛、同五郎次登り来り、先日ハ不調法仕預御用捨忝、其節被仰聞候通歸村之上船年寄被申聞候処、尾上浦二三拾艘計御座候者共惣寄被致被来一切於大つ浦彦根他屋江着船いたし候義、急度不相成、勿論少々之荷物船積仕候共、百艘江其間違相届ケ可申旨被申渡候間、私共上津いたし候ハ、此段当御会所江申上可置段被申付候、右之通御承知可被下候而申来り候、依之此方ハ申聞候処、左候ハ、向後共上津致候船出帆之節爰元へ相廻し可被申段申渡置候事、

但當時右浦船年寄藤介、

尾上船ニ限り三十艘計不残綱くりなしニ御座候間、万一他屋江着候ハ、右之通目印ニいたし呉候様申居候、

前段塩つ浦御召状ニよつて、七月八日夕、船年寄清次郎舟主八郎兵衛兩人登り被来、翌九日朝挨拶ニ被来候而咄し被居候ハ、得意先ハ尾上、片田せノ大工ニ而御座候へ共、頃日折節彦根之舟大工参り合居候二付、俄之義ニ付幸之義故相雇、四日懸り出来申候、然る処得意大工跡ハ承合彼是申来り、勿論右清次郎義ハ一切存不申候事故、段々断申遣候へ共、何分不聞入出訴被致候段恐入申候、尚此上宜御願申上度旨申置被歸候、

小笠原大膳太夫様当二月十九日御通行被成候処、首尾能御勤役相濟

候由二而、七月十一日当宿御止宿二而関東へ御下向被成候事、御出迎ハ相勤不申候、

脇坂様茂右同断、七月十七日当宿御泊り、翌十八日御下向在之候事、

一、七月十二日、坂本新兵衛坂本行雇死去致候、

右は当津る坂本行船積致候義差赦、長々無滞相勤、勿論平生心得方無如才中間江対し忠義多在之者二付、為香典金貳百疋七月十七日為持遣候、近頃養子致置候二付、跡之義ハ近々取締為申聞、不相替為相勤可申積り、本人も引続相勤申度段願被出度趣、親類尾花川忠右衛門申居候、異名矢部ノ忠右衛門

一、前段二在之候尾花河甚七、甚左衛門、艀惣代方江預り置候処、段々断二付、町内も事済致候、右二付右艀之義も仲間へ段々断被申二付、已來心得違無之様、右兩人を書付取之可申段為申聞候処、書付之義達而断被申、乍併書付なし二為相濟候義も致かたく、依之忠兵衛の始終懸合被申義二付、忠兵衛方へ被取置已來之義尚又得と御申渡し、為相濟くれ候様被相頼候義二付、任其意二事済いたし遣候事、

七月十七日

七月十八日、惣代兩人并二甚七礼二被來候、

一、前二留書在之候塩つ八兵衛、彦根舟大工相雇候義二付御召出し在之、御糺候処、只ひら断二御願申上、請書御取被成、船大工諸共為御読聞相濟候段、東尾上徳右衛門被申居候、塩つ浦引取候節二而、当会所へ立寄不申候、さたなし二歸村被致候、

一、七月十九日、從御役所呼二來り、則源右衛門罷出候処、牧の様被仰

聞候者、此度東尾上浦小丸船七艘持立申度段願出、勿論元禄年中金丸運上受取書差出候事故、則拾壹艘之受取書二在之候へハ、此度差赦し可遣哉、尚又文化寅年願出貳艘御免在之、其節中間方も不苦旨書付差出し在之候、依之尾上兩隣村延勝寺、片山は差支之有無可承二付、廿五日二罷出候様、右尾上徳右衛門へ差紙相渡し候、八幡片田は其中間を被致通達、同廿五日迄二差支之有無可申出旨被仰渡、尤尾上浦此節木屋半兵衛方二止宿致候へハ、委細可承段被仰渡候、

一、右二付翌廿日与次兵衛、太郎兵衛、牧野様御宅江参り、昨日被仰聞候義二付、尾上徳右衛門申咄候処、当時七艘持立候義二而も無御座候へ共、元禄年中之御受取書二も拾壹艘と御座候へハ、只御願申上置れ候二仕立申度、船株帳二御書入可被下旨申上置候、相成候ハ、株増二被成下度抔と奥意在之様二存、既隣村西尾上抔正敷差支二相成候、此義ハ御領分違之事二候へハ、表立申上候義二而ハ無御座、御内分二御含置被下度、其外浦方二とかく小船をふやし候義を好候、此節二御座候、尚□□□北ひら方も株増之義申來、自ら類列二も可相成哉、何分片田、八幡登り次第申談、其上御預答可申上段申置引取候、

以手昏得御意候、未残暑難退候処、弥御安康可被成御座奉珍賀候、然者此度東尾上浦を小丸船持立申度段願出候二付、三ヶ浦差支之有無、来ル廿五日迄二申出候様被仰渡候二付、八幡浦へハ別段二申遣し不申候間、右之段其御浦方を御通達被下候而被仰合、廿四日迄二御上津可被下様奉待候、右御案内申上度、書中ヲ以如此御座候、尚委細之義ハ御面談之上万々可申上候、以上、

七月廿日

百艘年寄

堅田浦

舟年寄中様

右書状相達候付、廿四日堅田庄兵衛、仁右衛門、八幡太郎兵衛上津被致、船頭町堅田屋庄兵衛宅ニ而及相談候義、是る五枚奥ニ記有之候、

当津八朔御礼之事

一、石原庄三郎様

金貳百疋 目録台
下ケ札

元々

柴山泰蔵様

内堀繁太様

町役

曾根源次郎様 金百疋宛

篠田牧太郎様

船方

牧野九郎兵衛様

小頭

多賀喜曾太様

同目付兼帶

川嶋惣右衛門様

是ハ此節御舎兄直兵衛殿御死去ニ付、御喪中御座候故、跡る遣候積りニ而差扣置候、

目付

手塚傳十郎様

同

柿沼小平太様

惣年寄

小野宗九郎殿

同

矢嶋藤五郎殿

町代

堀猪三郎殿

同

遠藤仁右衛門殿

船方下

北出雲平殿

右銀壹両宛

会所肝煎

吉本弥四郎殿

同

山本俵五郎殿

御足輕壹人、小遣衆貳人

鳥目廿疋ツ、

御門番吟介殿五百文

内義貳百文

御蔵番三人、白崎、新建、御門内、組屋敷

平蔵町年寄

坂本町年寄

貝屋七兵衛

右は名札計

右之通与次兵衛、忠兵衛、供清吉、

八朔京都御礼

東御奉行

小長谷和泉守様

金子三百疋

目録台
下ケふだ

御用人

小林八左衛門様

御取組

岡田長兵衛様

赤間三郎右衛門様
松野小右衛門様

山田加藤治様
吉川吉助様

飯塚五郎作様

右七軒江銀壹兩宛

御公事方

御公事下

山田釵治郎様

櫛橋平藏様

石嶋五三郎様

中川定右衛門様

塩津惣五郎様

喜多尾八郎右衛門様

加納万五郎様

平尾演左衛門様

ノ四軒江金百足宛

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

ノ九軒江銀壹兩宛

西御奉行牧野大和守様御退役、御代り御奉行未御登り無之故得共、
御玄関二而御請有之候故、目録台下ケ札金三百足差出ス、内屋敷ハ
役人中御出^{登り}無之故、勤なく候、御門番、中番江ハ例之通遣ス、

御公事方

深谷平左衛門様

上田八藏様

不破伊左衛門様

柏原治部右衛門様

本多新左衛門様

廣瀬佐野右衛門様

飯室助左衛門様

酒井惣助様

下田耕左衛門様

山田傳左衛門様

右五軒江金百足宛

浅賀和作様

畔柳三右衛門様

町代

田内与助殿 銀貳兩

下町代

藤沢傳六殿

藤村佐市殿 鳥目廿足宛

筆工

奥田九右衛門殿銀壹兩

東西御門番三百文宛

上町代中江五百文

東西中番中江三百文宛

下町代中江五百文

小番江三百文

追分丸屋四郎兵衛江百文

山科大津屋孫兵衛江百文

宿鍵屋佐助江三百文

同下女江貳百文

右之通孫右衛門、勘三郎相勤ル、供新助、荷持壹人

ノ金三兩三步 五百文二

銀貳兩壹 三百文六

同壹兩二十四 貳百文三

百文二

(貼紙)

「引越

松野小右衛門様

跡取次ル御用人

岡田長兵衛様

右代り

迎田采^{サイ}左衛門様

十一月

ノ七軒江銀壹兩宛

一、惣年寄小野宗九郎殿養父又三郎殿、於江戸表死去被致、葬式も江戸二而被當、依明後六^七日於本長寺法事被相勤候趣、申達し在之候付、為香典白銀壹兩遣申候、舟頭丁江与次兵衛參ル、

七月五日

一、前東尾上之義二付、船頭町堅田屋庄兵衛宅二而堅田、八幡、当津与次兵衛、太郎兵衛、孫右衛門、七兵衛及相談候処、当浦方被申聞者、六ヶ年已前寅年、於当所二御取計被下在之候上、又候此度願出候義甚怪敷被存候へ共、三ヶ浦方故障申立急度為相止可申与存候へハ、一通り対談計二而も承知致間敷、然レハ御役方へ内々申込等いたし、彼是隙入候所が勝ハ元トく自然不分明之義二而ハ却而不宜何分当所之勘弁次第致くれ候様被申聞、此方方申候者御尤二存候、畢竟尾上浦壹ヶ浦之義ハ小丸舟拾艘持立候とも、当時障りも無之候へ共外浦々之響二相成候段歎ヶ敷、現二北比良杯も当盆前申来候義も在之、旁困り入候へ共、六ヶ年已前無拋義と相見へ差赦有之候上、又此度も新規二取立候義とハ訳も違、已前拾壹艘遣居候段申立、是迎も在間敷事二も無之、猶又已前之船数帳改見候へハ、折節右遣ひ増減いたし候義も相見へ候へハ、以其旨差ゆるし遣し、勿論外浦見競二相成不申候様、又已来之取締等得といたし置、石数も當時之姿を以夫方大キ二不相成様為相心得、其外浦法通りハ前寅年二取計在之候同様、其上ハ此後重而船数願出申間敷段急度及引合、逸々承知いたし候義候ハ、徳左衛門願之通二為致可申段申談、則右三ヶ浦同席江尾上徳左衛門呼二遣候、及引合候処、諸事異義無之旨二付、則御尋書相認候事、

右差支之有無御尋書壹通、扣一件袋二入在之、

并二東尾上浦方差上候願書之写、同断

右願書之内、東尾上浦ハ船数拾壹株在之候段相認在之候二付、拾壹株と申義ハ無之事二付、此段御役所二而牧の氏様江申上書直し候筈也、此方方差上候書付二、片田庄兵衛印形不致持参候二付、御断申上置、歸村後廿八日印形差登し候而、即日与次兵衛御役所へ持参いたし調印相済、直様手紙相添同所新左衛門ふね二被登候、相渡ス、

右書付廿五日御役所二而牧の様江差上候処、片山、安養寺浦茂當時之姿二而、外浦へ不罷出候義候ハ、差支無之段申出候、三浦共差支無之候ハ、八幡、片田共勝手二歸村為致、跡之義ハ百艘取計可申段被仰聞候、廿六日八まん歸村被致候、廿七日片田歸村被致候、

一、廿七日、東尾上浦御条書ノ下書御出し被下写置候、一件袋江入、

一、右尾上浦方差上候願書之写、一件袋へ入、

一、廿八日、尾上徳右衛門呼二遣し、前段三ヶ浦相談之趣得と為申聞、承知之上此方二前寅年取置候一札二継添、奥印為致候、此書付も一件袋へ入、

一、翌廿八日、右御受書返上、其節力庄兵衛調印いたし、扱牧の氏へ与次兵衛申上候者、此度之義ハ御聞済在之、無滞相済候へハ、已来之義ハ、乍恐右躰已前丸舟遣ひ候形ヲ以願出候共、外浦方一円容易二御聞上ヶ不被下、既二外浦二も已前遣ひ候例、所々二在之、紛敷御座候へハ、此段御含置被下度申上候処、随分尤之義二候間、重而願出候共御用不申様被仰聞候、

此度尾上浦小丸舟之義、寛保三末年船株帳二此度之訳書下ヶ札致候様被仰聞、御下ヶ被成候二付、則於中間相談之趣、下ヶ札致廿九日二差上一件相済申候、

右下ヶ札扣船株帳二在之候事、

此度年内々何角申込候義も在之、近比御不沙汰二打過候間、三ヶ浦

相談之上為御挨拶と牧の様へ金三百足持参いたし候、
七月晦日夜、尾上徳左衛門呼二遣し、當時在之候船数承候処、

貳拾石積丸船壹艘 勘二郎

同 彦左衛門

同 佐右衛門

(横書き)「右書付六通袋江入、御箱へ納ル、」
右三艘之由被申之候、

石原庄三郎手代

先触 岡田大八

大津百艘方

伊香郡馬上村迄

覚

一、人足三人、内式人垂駕籠壹挺

壹人分持壹荷

右者就御用我等儀明十四日明六ツ時大津出立、江州伊香郡村々江罷
越候間、右人足於宿々御定之賃錢請取之、無滞可被繼立候、且渡舟、
川越、止宿等無差支様可被取計候、先触早々順達、於馬上村我等着
之上可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

(御印影写) 未八月十三日 岡田大八印

百艘、矢橋、栗太郡駒井沢内、草津、守山、十四日泊り武佐、
愛知川、高宮、^(尾上)鳥本、米原、十五日泊り長濱、伊香郡馬上村

右問屋

庄屋中

年寄

外二御廻状壹通、御書付壹通添、
壹通ハ

石原庄三郎手代

廻状 岡田大八

御用 江州伊香郡馬上村始

石原庄三郎手代

書付 岡田大八

御用 御用栗太郡駒井沢村

右之御役所^(通脱カ)為持被遣候二付、十三日巳ノ下矢橋浦へ小舟入る相渡
し候事、使清吉、

対州御用二付御登り、二月十九日当駅御泊り、道中御奉行御双頭之内、
井上美濃守様御下り、十三日夕伏見泊り二而京廻り、夫故御着夜二
入候、

右ハ八月十四日当駅御泊り二付、八町片原町迄御出迎申上候、孫右
衛門、七兵衛、供雇与次郎、

翌早天石場迄御見送り申上候、太郎兵衛、六兵衛、供廻り清吉

八月八日、北出雲平殿孫右衛門宅へ被参候而被申候ハ、舟方御懸り
牧野九郎兵衛様事此度京詰被仰付、右御転役之義ハ不首尾二而ハ無
之、順道二候間、則牧野様方仲間方へも一寸申入置候様被仰候間、
明日二而も表向御役所へ承り二出候様、北出氏方伝言二候へ共、是
迄逆も右躰之義有之候砌ハ、いづれ御役所方御沙汰被仰出候義二御
座候間、左も無御座内二ハ如何与存、其向キ二打過候事、

十五枚前二委細記し有之候、

此度坂本新兵衛代替り二付、右親類尾花川忠右衛門并養子与助事則
新兵衛与改、是迄之通坂本通ひいたし渡世相続仕度段、中間方へ願

出候事故、下地振合二任せ、八月十七日夕、右親類同道二而会所二
おゐて定法通申聞候処、委細承知之上其趣之書付取之、聞濟遣し候事、

一、八月三日夕かた、嶋ノ関堀はた二年頃六十四五才男引たおれ、依之
浜廻り下小や宗七呼二遣し世話為致候へ共、十八日朝果候付、大江
与五郎呼二遣し、非人二相違無之旨二付、御役所へ御訴申上、即刻
御聞濟在之、取捨被仰渡候、

尤右御届方ハ今朝召使新八見付為相知候付、菓等為吞候内相果候段、
尤非人二相違無之段、以書付申上候事、

但与次兵衛罷出、与五郎被召呼被仰渡候、

此日ハ水戸御姫様御上京、当津御泊り二而馬借会所大取込、依之
人も町代部屋二詰合無之、与次兵衛人馬会所へ罷越、堀氏へ示談い
たし出勤被致呉、直様相濟候、

御目付三人江以口上御聞濟在之候段、届ヶ置候事、

白銀三匁堀猪三郎殿、式朱壹片大江与五郎

右格別せわ二付 下地之格

一、五百文 松本山

寛政戌年成覚寺へ遣候二付、此度も相頼被遣候へハ、外二堀賃貳百
文懸り候段被申候趣二付、下書成方へ遣候事、

一、五百文 小下^{コノ}や宗七

外二人足呼被寄せ山迄持参り穴迄掘候様申候事二付寛政之例二任せ
候、

一、百文舟 嘉兵衛、めし代

非人逗留中

一、三百文 同人

是ハ日数十日計、日々せわいたし格別取計ひ候二付、心付遣し候、

一、貳百文 番所与七

終日めし遣心付いたし二付取計ひ候事、

一、百十六文 雇い和助

俵八つ、是ハ堀端空天井二付雨天防二やね二いたし候、

一、十六文 玉や庄兵衛

竹十本、松本山迄荷ひ陳也、

一、八十二文 堅田や太郎兵衛

小や酒代願ひ候付、取片付之節吞せ遣候、

一、百文筆工歩六御届書

少余慶二候へ共、別段二態々呼下ヶ候付、

一、東江州長濱善四郎舟石灰積入八月十八日出船仕、同夕二当津彦根
他屋へ着舟仕候処、風並敷候二付、右舟金藏先江廻り掛り居候所
十九日暮前より殊外大雨二而積込候石灰二雨洩入、同日夜五つ時
頃出火仕候二付、早速御役所へ当番馳附候処、篠田様被仰聞候二ハ、
金倉堀二有之舟之内二石灰積入候舟も有之候や、早々吟味いたし可
申、若有之候ハ、早速其舟御役所遠キ所へ相除ヶ可申、尚又焼舟
モ遠く相除ヶ可申等被仰付候二付、則金倉へ参り諸舟とも吟味致候
所、塩津舟之内二石灰積入候舟有之、早速遠へ為相除、焼上り候舟
ハ地舟加子共二申付、艀二乗せ候て三湊加子共二力ヲ添、中保町浜
先迄押出し候処、右舟次第焼損し、水入沈候て火相鎮り候、依之右
之様子御役所へ申上候処、則為御檢使手塚傳十郎様、安井角兵衛様
御兩人、右之場所へ御越被成候二付、御舟入用二て早々大艀相廻し、
則御乗被成御見分相濟、中保丁会所迄御引取被成、暫く相扣へ居候処、
外二舟方用事も無之候間、会所へ引取候事、尚又用事も有之候ハ、
会所へ呼二可遣段被仰渡候、尤御舟方御檢使二御出も御座可有候処、

此節牧野様御退役被成、いまた御跡役も無御定り折節ニ、〔貼紙〕「町々モ」

馳合に罷出候て大ニ騷候二付、御町方御檢使二御出被成候よし、尚又廿日早天御役所を呼二参り、年寄与治兵衛罷出候処、前夜之趣御尋被成、全く雨洩二相違無之段申上候処、則御書付御取被成事、差出候様被仰渡候

右御尋書付写、左二記ス、御尋二付申上候書付

今夜五ツ時頃、字金藏堀先ニ有之候東江州長濱善四郎持船方出火仕候付、御見分御出之上、私共仲間之者共も右始末見聞及候儀共御尋二御座候、

此段今夜五ツ時頃、金藏堀先キニ有之候ふね方出火仕候趣見請候付、驚私共仲間方も船乗出し様子見聞仕候処、長濱善四郎船持ニて、右善四郎并水主壱人乗合石灰積入、昨十八日未明長濱出舟仕、同夕当地彦根他屋最寄まで参り候処、風並惡敷他屋へ着舟難仕、金藏堀二舟掛り見合罷在候得とも、右時刻迄も同様風並二付、其俣右場所二罷在候処、折節強雨二付苦合る雨洩強燃上り候付、御藏近辺之儀別而相驚防罷在候由、尤彦根他屋ニ参り合居候舟頭共追々小船二而乗付、川口堀先迄も押出シ、俱々相防候趣二候得とも、終二者舟沈候様子二御座候、全ク強雨二付苦合る洩入、右舳及始末候儀と奉存、外ニ怪敷義も一切見聞不仕候義ニ御座候、右御尋二付書付奉差上候、以上、

文化八年未八月十九日

大津

御役所

右十九日夜五ツ時頃出火之砌見舞ニ参り候口々、

組屋敷御目附中、柴山氏、白崎久太夫様

百艘年寄

与治兵衛印

廿日朝、彦根他屋、三湊舟方へ、為見舞酒三升遣し候事、但今日者船引上ケ可被申候間、定而人数も入可申存候へ共、押而差出候義も如何候付、此方共詰所ニ手当致置候間、何時二而も御申越可在之段、勘三郎罷越申置候、

尔る処終日何之沙汰も無之、日暮前船引上ケ他屋江被引取候様子見受候付、尤場所柄旁一応之達可有之処、右之様子二付、暮早々他屋会所へ以使呼二遣候、御用多御取込ニ可有御座候へ共、一寸得其意申度候間、乍御苦勞只今御越可被下段申遣候処、只今いづれも彦根ノ当藏役所へ罷出候、無程引取可申候間、歸り次第参上可申旨返答有候処、頓而長濱之役人壱人被参、度々御見舞預り、殊ニ今朝ハ御持参被下忝奉存候、早束御礼可申上候、漸只今引取候程之義二付、延引候段御断申候旨被申上候由、此方与次兵衛、七兵衛申聞候者、何角御取込候段御尤ニ存候、乍併今朝手当之加子共為持置候二、マコ今何之沙汰も無御座候、先刻見受候へハ、船も引上御引取被成候様相候ハ、一寸為御知被下度事御座候、無益相待候事、勿論銘々共も是方引可申義二付、使二而ハ間違有之候而ハ惡敷存御苦勞懸ケ申候、則只今使遣候節御屋敷へ御出御歸り候得とも難計存、只今加子共為引取申候と申候処、夫ハ何角御心配忝存候、何事も取紛不心付不行届之段ハ御用捨被下度被申、カ引取被申候事、

外ニケ浦も為参筈、右之訳二付私カ是御礼申上段断被申居候、

一、前御尋書ハ於小頭部屋ニ御目付手塚御氏、添役安井角兵衛様、町代堀猪三郎殿、

一、石灰八百八拾俵積有之候、不残水中江捨、船者内之方焼、焼残候者ハ帆柱、棹、櫓壱丁、其外何もなし、

一、廿一日夕かた、三湊舟年寄、船主善四郎、此衆中何角右挨拶として、酒壱斗、鰯貳把持参被致事、

但樽入二付、酒ハ翌廿二日嶋彦へ為持遣し預ケ、鰯者貝屋半六方へ預ケ候事、

一、廿六日八ツ時、御役所を呼二参り候二付勘三郎罷出候所、篠田様明廿七日曉七ツ時を御出立二而、土山宿迄御出被成候故、船相廻し候様、右之御先触吉通御渡し被成候、直様書状付矢橋迄遣し申候、右二付呼二被遣候義ハ、明日之日和之義御尋二付、先日和之様子申上置候、百艘始矢橋、草津、石部、水口、土山明廿七日御泊り、未之中刻新八参ル、為持遣ス、

一、八月廿五日、道中御奉行柳生主膳正様、対州御用二付去ル二月十九日当駅御通行二而御下り之所、此度右御用相済江府江御下り二付、左之通御出迎御見立、

八月廿五日、伏見立京廻り当駅七ツ半時御着、

同廿六日、当駅五ツ時御出立、

右御出迎、御見立共勘三郎、清治郎、供船頭丁小歩^{弥七}、

同日御普請役御勘定方之由御二方御下り、委細二月十九日之所二記し有之、

一、川口弥蔵死去二付、八月廿六日巳之刻坂本西教寺江葬式有之、依先例仲間惣代として三郎兵衛吉人、坂本江参ル、

一、京都西御町奉行三橋飛騨守様御登り、八月廿五日守山宿御泊り二付、為御出迎草津迄六兵衛、庄兵衛兩人相勤候事、但し廿六日朝六ツ時御立、同日大津宿御泊り、九ツ時石場御通り、右兩人御出迎相勤ル、廿七日早天大津御立、為御見送り六兵衛、清二郎兩人相勤候事、草

津行とも雇平四郎、大津御立之節供同孫七

一、八月廿七日、吾妻川浚願二付、為御見分御町役曾根源次郎様、同心山方手塚熊太様、町代遠藤仁右衛門殿御越被成候付、嶋ノ関二而太郎兵衛待受候事、

一、菊月一日、坂本新兵衛を為祝諸白三升、鰯吉尾、はまくり到来いたし候二付、不打置祝ひ候、ためせに式百文遣候、

重陽御礼

一、石原庄三郎様 青銅百疋

御元々

柴山泰蔵様

同

内堀繁太様

御町役

曾根源治郎様

同

篠田牧太郎様

舟方御懸りハ未相究り不申候二付不勤、

右四軒へ鳥目五十疋宛

御門内御手代衆、組屋敷不残、新建屋敷不残、手札計二而相勤ル、

北出雲平殿、手札計、

右ハ孫右衛門、七兵衛、とも廻り清吉、

石原庄三郎手代

先触 篠田牧太郎

大津百艘始

覚

一、両掛壹荷此人足壹人

右者就御用、我等儀明十三日曉七つ時江州大津出立、浅井郡鍛冶屋村迄罷越候間、書面之人足御定之賃錢請取之、無遅滞差出し可給候、尤川越、渡船之場所八前宿及通達、是又差支無之様取計可給候、此先触鍛冶屋村二而我等着之上可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

(割印影写)
御印」未九月十二日

篠田牧太郎印

百艘、矢橋、草津、守山、武佐、愛知川、高宮、鳥居本、米原、

長濱、鍛冶屋村

右宿々

問屋

年寄中

追而於宿々駕籠壹挺用意置可給候、以上、

右之御先触御役所を為持被遣候二付、十二日午ノ刻過小舟入を矢橋浦へ相渡し候事、使新八

一、九月十五日、從御役所御配符式通御渡被成候、

追而本文運上銀、大津橋本町古望仁兵衛方二而掛改候間、得其意納人印形持參可致候、以上、

湖上船運上銀、来月五日を十日迄持參上納可致候、遅滞致間敷候、此配符令請印、早々順達、留り所を可相返候、以上、

大津

未九月十五日 御役所御印

大津を川道迄十六日朝坂本川崎ノ又兵衛へ相渡し、使与八、

右同斷壹通

松本を伊庭迄

同日松本へ持せ遣入、使新助

口演

一、船御運上銀、来月五日を十日迄二無遅滞上納可被致候、此廻状早々順達、留り所を百艘会所へ御返し被成候、以上、

未九月十五日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、甚吉、六兵衛、源助、清助、源七、

五郎八、善兵衛、源六

石原庄三郎手代

先触

江並左中

三好順之助

藤沢永四郎

百艘始

追而富波沢村江之廻状、守山宿を可被相届候、以上、

覚

一、垂駕籠 壹挺

此人足式人

一、両懸 式荷

此人足式人

一、步竿 壹竿

此人足壹人

×人足五人

右者我等儀、檢見為御用明後十七日曉七つ時大津出立、野洲郡留波
沢村迄相越候間、書面之人足御定之賃錢受取之、無遲滞可被継送候、
此先触早々継送り、守山宿る留波沢村江可被相届候、以上、

未九月十五日

石原庄三郎手代

藤沢永四郎印

三好順之助印

江並左中〃

百艘、矢橋、草津、守山

野洲郡

留波沢村、右宿々庄屋

年寄中

石原庄三郎手代

廻状

江並左中

三好順之助

藤沢永四郎

江州野洲郡富波沢村始

但し封付也、

右二通箱入二而御渡被成候二付、即刻小舟入へ持せ遣ス、

九月十五日申下刻

十六日未刻、小使ヒ藤七被参、昨日之御先触之衆中明日船者止メニ
相成候段被申来候、左之通矢橋浦へ書状遣ス、
以手紙得御意候、冷氣二御座候処、弥御安康二御勤役被成奉賀候、

然ハ昨十五日当御役所御役方様を御先触在之、明十七日曉七つ時御
乗船二而、其御浦迄御越被成候処、右被成、夫々段々御廻村可被成
候処、右御乗船は止メニ相成候間、此段御承知可被下候、右為御知
申入度迄、恐惶謹言、

九月十六日未ノ刻

百艘年寄

矢橋浦船御年寄中

一、九月廿一日、從御役所御先触二箱御渡被成候、

石原庄三郎手代

先触

篠田牧太郎

江並左中

三好順之助

藤澤永四郎

大津を曾根村迄

追而御代官より之廻状壹箱、此先触一同南濱村江可被相達候、以上、

覚

一、御用長持 壹棹

此人足四人

一、具足櫃 壹荷

此人足壹人

一、乗物 壹挺

此人足四人

一、人足 七人

内

兩掛 五荷

合羽籠 壹荷

竹馬 壹荷

人足拾六人

右者当作毛為檢見、御代官明後廿三日曉七時大津御役所出立、左之通被罷越候条、得其意書面之人足於宿々御定之賃錢請取之、無遲滯差出、渡舟、川越等之場所者從前宿及通達、無差支様可被取計候、且村々送迎人足之義者例之通申合、無間違可差出候、且泊村之義檢見手操二寄治定難致候得者、先つ為心得相達候、人数者拾五人之積可被相心得候、此先触早々順達、留村可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

未九月廿一日 藤澤永四郎

三好順之助

江並左中

篠田牧太郎

百艘、矢橋浦、草津宿、守山宿、武佐宿、廿三日泊愛知河宿、高宮、鳥居本、米原、長濱、南濱村、八木濱村新田、廿四日泊曾根村、月ヶ瀬村、古橋村、廿五日泊北野村、池奥村、谷口村、上野村、木尾村新田、龍岸寺村、龍安寺村、中丸村、黒部村、廿六日泊北野村

右宿々

村問屋

庄屋中

年寄

廻状 石庄三

江州浅井郡

南濱村始

是八封付箱入

右二箱添状いたし、廿一日午ノ下刻矢はせ舟方へ遣し申候、

一、松本江東本願寺仏具、長持類持出し、九月九日同所船二積候付、太郎兵衛、六兵衛及引合候へ共、利不尽二積致し候付、十六日及出訴一件別帳留書在之、

一、当他屋家賃月二七匁上ケ可申段町分申参り、他屋中斷被申、当年中ハまつ此儘之よし二相済候、
右木地忠、万四郎度々町分江被参、せわ被致候付、右せわ被致候方江酒二升遣し申候、

一、九月廿四日、京東御奉行坂本、三井寺御順見二付、尾花川迄御出迎候一件、山門帳二在之候、

一、九月廿九日 酒井讃岐守様

御組向坂熊太郎様

太田熊蔵様

右獅々飛御順見下見として御越被成候、但人馬会所る当会所へ案内致来ル、

小舟入江詰番忠兵衛御案内いたし、

茶瓶、たはこ盆、薄縁二枚入、勢田迄御送り申上候事、

一、九月廿二日、膳所船方下役、但加子頭也、寺田喜右衛門殿与次兵衛宅江被見へ、当廿八日薩州御隠居、但膳所当殿様御裏様之御親也、此度有馬御入湯二付、江戸へ御登り被遊候而、矢橋へ御乗船被成候、依之膳所御雇船式艘差出し、供ふねは矢橋、石場江申付候積御座

候、然る処少し二而も長ク御乗船為在候付、御持場之所、当所川口ハ札場江跡戻り二相成候間、扇屋関江御着舟可仕処、此節旱水二付石垣際江寄兼候間、上り場取扱等膳所参り掛出し致候而も不苦候哉、其外当御役所御届方之義、尚又御帰館二も右場所御乗船之積り二候へハ、同右御座船二乗せ帰り候而も不苦哉、太切之御用向二付何方も差支無之様仕度、万端御内談申上候様、則船奉行中神藤左衛門も宜敷申上候様申付候旨被申之候、勿論御返りにハ勢田迄御乗船二て石山御参詣之積り之由被申候、与次兵衛答候ハ、膳所二おひてハ御太切成御用者旁々一了簡二御相談難申上、委細同役共へ相談御返答可申段申候所、御尤二存候、然らハ明夕右御返事承り二参上可仕、何分宜敷御頼可申入旨二而被帰候、

一、右之段於中間申談、翌廿三日朝於御役所御掛り内堀様へ御内々申上候処、右者先達而沙汰も承居候事二候へ共、小船入又者嶋ノせき杯二御着船之儀ならハ、格別扇屋関ハ御役所先又掛出し杯者膳所為致かたく、尚又船込又者荷馬積場込合候而も從御役所為払候ハ而ハ成間敷、勿論薩州様者当所由縁も有之義二付、何分何方成共可相届させ、其上可然執計可申哉二被仰聞候、

一、御返り之節從当所御乗船之儀者、於其仲間二得と勘弁可致、是ハ一大事二候間、右御返り迄者日間も有之、此節御代官検見二御越、御留主二候へハ、御返り之上申上候ハねハ、此方一了簡二者難申咄段被仰聞候、与次兵衛申上候ハ、前段之所膳所御届ケ可被致様可仕、此段御内意御含可被下段申上歸り候、

一、扇屋関塩屋佐右衛門殿へ致内談、右掛出し町内方世話致被呉、料物者從膳所為差出候ハ、町分之障り二も相成間敷哉、然ル所佐右衛門殿町内年寄木綿屋長兵衛殿へ被申咄、長兵衛方五人組へ内談致被呉候処、重而例二不相成義候ハ、町分方致世話可申段、則長兵衛

殿方与次兵衛へ申被聞候、

一、廿三日八ツ時、膳所喜右衛門殿被来、於当会所二与次兵衛、太郎兵衛、孫右衛門、七兵衛立会、何角と致内談、何れ当御役所へ從膳所此度之義御届ケ可被成、然上者從御役所百艘方へ御沙汰可有之候ハ、其上にて各々様方と如何様共可申談段申咄し候所、喜右衛門殿隨分御尤存候、何れ御届ケ可申積り二御座候へ共、從当御役所相濟二而も百艘方二御承知無之候而ハ何事も差支候間、夫故先へ御内談仕候と被申候事、

一、是迄平生渡船往来二付、手先之船共舟やかたへ不日和之節寄せ候へハ、心能世話致被呉、何角旁々二付鹿酒一献差出し、喜右衛門殿快吞被致被帰候、吸もの壺、硯ふた、鉢肴、

一、其後御役所へ御届ケも無之、何之沙汰も無御座候二付、廿五日為見舞七兵衛罷越候処、未日限之義不相定候付延引仕、相知レ次第参上可申候様存居候処、被人御念御出被下忝段申聞候、七兵衛御日限相知レ候ハ、早速為御知被下度、御揚り場之義万一松本浜へ御着船二相成候而も、大津浜方同様之義二御座候へハ、此段御含置可被下候、尚追々可承段申置歸り候、

一、九月廿七日七ツ時過、膳所舟方下右田原喜右衛門殿被参候而、此方者何角と緩々御心能御内談被下、千万忝奉存候、夫二付今日江戸膳所從屋敷、此度御乗船之義者荒吹候時分二御座候故、遠延シハ相止之、石場へ御着船之様申参り候間、其段御承知被下候様二、膳所奉行方も私方宜申上候様被申付候、猶又御歸り之節当所御乗船被遊候義二候ハ、其砌者御頼申上候義も御座候、先此度之義者右之仕合二付、同席方も早速其段申上候様申之候、御一統様へ宜達し呉候様申置被歸候事、

但し御定日を喜右衛門殿へ相尋候へ共、十月朔日歟二日と申事二

而、耽と未御定相知レ不申候由被申之候、

一、同暮方矢橋を以手紙、十月朔日薩州御隠居様御通行被遊候二付、當日者泊り積船差越し呉間敷申参候事、

一、廿八日朝、与次兵衛於御役所二右之始末、内堀様へ申届ケ置候事、但し日間者有之候へ共、御歸り御乗船之儀者、於中間得と相調候様被仰聞候事、

一、同日、与次兵衛、太郎兵衛膳所御舟奉行中神藤左衛門様へ致参上、此間中何角与御苦勞御儀奉存候、御着船場之義者松本浜二相極り候段承知仕候、尚又御用向等之義御座候ハ、被仰下度、右御伺申上度参上仕候段、御内室様へ申上置候事、

但し藤左衛門様御留主二而御座候、

一、船館田原喜右衛門殿へも参候処、同御留主二付、右同断之事、

右同日矢橋浦へ罷越、船年寄勘三郎、弥左衛門、詰番与惣兵衛へ一色治兵衛於座敷面談致、右薩州様於御越二ハ、何二而も用向之義可被申越段申入置候、御乗船日限相知レ次第可被申越事、

一、泊り荷積遣候義者、御当日差扣可申武士荷人船之義者、如何様共其御仲間御勝手次第第二可致、跡を得と致相談可被申越、人舟遣し候ハ、揚り場之義者何方へ成共御差図次第第二可致候、

一、館御入用之節者、前広二為御知可被成、船之儀者何時二而も御入用程差出し可申候、

右之趣及諸事二置候、

一、松本船此度式艘引船被仰付候義、於矢橋浦二ハ相被済義故、膳所御奉行迄御断申上候へ共、最早被仰付候後之事、相為止候義も難被成、仍之矢橋を加子式人乗せ四丁立之積り二而、矢張舟ハ石場舟遣、双方之御用二致候、尚又松本浦を於矢橋御用船相勤申度旨被相頼候二付、矢橋へ御言葉被掛、無拋義二付石場舟壹艘遣候積り二致候、

但し御供舟都合八艘用意致、一二ノ番付を付候而、石場舟を九番二致置候へハ、自然舟除り候節者、遣ひ不申積り二致置候旨、右船年寄中此方共へ咄し被致候事、

右一条者膳所薩州様へ御馳走而已之御事、矢橋、松本共只膳所へ之御用二而、表立候御用二而者無之候事、

前段廿八日於御役所与次兵衛申上候ハ、膳所、矢橋共私共見舞二参り可申段、御内意内堀様へ申上置候事、

一、九月晦日、矢橋治郎兵衛子息幸次当会所江被参、未しかとは相知レ不申候へ共、延引之御沙汰無御座候へハ、先ツ明朔日之積り二手当いたし候、夫二付一昨日御支談被下候往来旅人并武士荷等は御勝手二御遣し被下度、併格別余慶之武士荷人御断申上度、或は三駄位之義ハ不苦候、揚り場は北側茂平次^之被安置申候、当所も茂兵衛方をかり申候、其外之義ハ御手当不被下様、自然忠兵衛之義も在之候ハ、参り合候舟二而もかり申し度候、此段相含くれ候様申之候、此方与二兵衛、三郎兵衛答候者、仰之通り承知いたし候、右二紛し旅人等のせ候而ハ不相済候、此義ハ御手締り被置候様申聞せ候、幸次郎申候者、弥日限明日二候ハ、最早御沙汰仕間敷、万一御延引二相成候ハ、夕方迄二早束^通御しらせ可申上候、草津へも人遣置候へ共、私罷出候跡二相成候間、歸り候ハ、相知レ可申様申遣居候、一、同晚上下惣代治兵衛、長七相招申聞置候者、加子共一駄呼寄候筈二候へ共、差懸り候義二付無其義候間、兩人を被申聞候様、

一、弥明日御越被成候二おゐては、決而入用之義二ハ無之候へ共、小舟入二小舟式三艘、薄縁二枚ほと入用意致置可申事、

一、加子共矢橋へ参り候ハ、随分神妙二いたし可申事、

一、人馬会所へ雇多吉遣し、明日薩州様矢橋へ御越被成二付、武士荷之義式駄三駄之義ハ不苦候へ共、五七駄十駄もかたまり分ハ、小舟入

江御下ケ御無用と存候段申遣候処、承知之旨返事在之候、

一、小舟入ニ手明キ之加子者共、代りく無懈怠場所ニ居合候様申渡し可置事、

一、小舟入会所詰庄兵衛、清次郎、尤与治兵衛、太郎兵衛は、弥御乗舟之趣相究り候ハ、石場浜へ膳所役人御詰可在候ニ付、左候ハ、舟ノ御用も御座候ハ、可被仰聞段、挨拶ニ参り可申手はついたし置候、
一、晦日夕方、加子共矢橋を帰り候者共申聞候者、明日朝早々矢橋へ可参人のせ可遣段、年寄弥左衛門申聞候由ニ付、間違有之候而ハ不宜候義ニ付、朔日早朝見届旁上組流し遣候事、弥左衛門へ小舟入船出し方之義及引合候処、尤之由被申居候事、
右之通双方手はついたし置候処、矢橋へ御下り不被成、御乗船無之段申来候、

岡廻りニ而、朔日七つ時八丁御本陣へ御入被成、御止宿相成候、船之用意は矢はし、石場共無益ニ相成候事、
右之通此方取組は重ニ膳所へ之御会釈ニ而、表立候御用ニ而ハ無之事、

一、十月三日、矢橋年寄弥左衛門、右挨拶ニ被来候、

九月十九日、御初入恐悦

京都西御奉行

三橋飛騨守様

金子貳百疋、二重くり台、下ケ札付

御用人

武藤貫三様

辻本仁左衛門様

松本雄太夫様

御取次

小林与作様

久保嘉十郎様

吉原直様

右之外ニ

武藤様同居

辻本様同居

天野正藏様

大竹半平様

浅村一郎様

村田八八様

同居

右不残手札計り

町代

田内与助殿

白銀壹両、先格之通

与次兵衛、忠兵衛相勤、供新助、雇喜兵衛

乍恐口上書

一、当津橋本町大橋詰ニ御建被下置候船御制札、御印紙御書替奉願度、明十八日京都東御役所江持参仕候ニ付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

文化八年未九月十七日

百艘年寄

与次兵衛印

大津

御役所

右御届書ハ町方御当番所へ差上、御目附方三軒へも口上ニ而相届、橋本町年寄、小歩へも相達し候事、

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰ニ御建被下置候船御高札并御印紙、御書替頂戴仕度奉願上候、則先達而被下置候御高札、御印紙奉御高覧入候、尤是迄之御高札、御印紙とも、前々之通被下置候様奉願上候、以上、

大津百艘年寄

文化八年

与次衛印^(兵脱カ)

未九月十九日

忠兵衛印

御奉行様

右之願書、御高札、御印紙とも東御役所へ持参仕、御玄閑御帳場へ名札差出申候処、公事方同心櫛橋平藏様御出逢被成候二付、御高札御印紙とも差上、尤未御文言紛敷候間、御名年月計り御書替被下候趣二而、追而御沙汰可有之間、先引取候様被仰渡、帰津致候事、但し先格二而、今度御登り被遊候御奉行様へハ、御届不申候事、

大津百艘年寄兩人

右明三日四ツ時御召状壹通慥受取申候、刻限無相違上京仕可申候、以上、

未十月二日

大津百艘年寄

鍵屋佐助殿

先錢貳百五拾文御渡し被成可下候、已上、

一、十月三日、早朝与次兵衛、忠兵衛罷登り、四ツ時東御役所江罷出候処、後刻可致沙汰間宿二扣居候様、櫛橋様被仰聞候、然る処九ツ時過西御奉行様御入被遊、漸暮六ツ時御調印相濟候由二而、同刻罷出、右櫛橋平藏様御印紙兩通、御高札共御渡し被下頂戴仕、則御請取証文調印仕差上申候事、
右刻限及遅刻候間、左之御届ケ翌四日朝二相成候、夫与次御札相勤罷歸り候事、

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙、御書替被成下

候様、先達而東御役所へ奉願上候処、右御高札、御印紙頂戴仕、難有奉存候、乍恐此段御届奉申上候、以上、

文化八年未十月四日^四

大津百艘年寄
与次兵衛印
忠兵衛同

御奉行様

右西御役所江差上候処、飯室助左衛門様御出被成承置、以序申上候様被仰渡候事、

右御高札被下置候御札、左之通、

小長谷和泉守様

金貳百疋 目錄台、下ケ札

三橋飛騨守様

同断

東御公事方

西同

山田釵次郎様

深谷平左衛門様

石嶋五三郎様

本多新左衛門様

塩津惣五郎様

飯室助左衛門様

加納萬五郎様

下田耕左衛門様

不破伊左衛門様

右九軒金百疋宛

外二

山田釵次郎様金百疋

此度御懸り二付

公事下

櫛橋平藏様 同断

同断

御書役

吉竹勝左衛門様 同断

×歩判十六

一、錢貳百文 宿鍵屋佐助祝儀

乍恐口上書

一、先達而御訴奉申上候船御高札、御印紙、京都東御役所二而御書替被成下頂戴仕候二付、乍恐此段御届ケ奉申上候、以上、

文化八年

百艘年寄
与次兵衛印

未十月五日

大津

御役所

右町方御役所御当番所江相届ル、

右二付当所御目付

川嶋惣右衛門様

手塚傳十郎様

柿沼小平太様

×銀三匁ツ、

橋本町年寄口上二而相達、小歩江錢貳百文遣し申候、

御高札場石垣東南ノ角、上ノ二ツ目石壺ツ、近來之大水二而ゆるみ抜出在之候二付、手伝鯖市郎兵衛江申付突込置候様、然る処足場無之候而ハ難出来、依之目二立候間、^{橋本町}町内年寄舟屋源助方へ九月晦日八郎兵衛遣し、右之段一寸申達、御目付三人共江も、則太郎兵衛内届ケ致置候、然る処上ノたゞき出計直し候積り二候処、手伝心得違二而、右石垣二三ツクイ等致候付、右石垣ハあなから仲間方修覆いたし候場所とも被存ず候二付、取捨可申哉とも存候へ共、出来上候

もの取捨候而ハ却而如何敷候付、其俣二いたし在之候間、後日普請等いたし候節は得と相考、差支等無之様取計可致候事、

但右年寄江ハ石突込入候計之達し也、御目付江ハ足場等いたし、大橋らんかん二もかゝり候事故申上置候、

一、膳所船奉行中神藤左衛門様御死去被成候由、十月八日承り候二付、同九日為御悔年寄七兵衛、昆布壺包為香典持参致候事、代錢三百文

一、乍内々田原喜右衛門殿方二而、薩州御隠居御登り之節、御乗舟之有無為尋候へ共、しかといたし候義相知レ不申、京都へ御出被成候上ならてハ難相究候へハ、日知レ次第右左左右可致段、右喜右衛門殿被申居候事、

一、隣家近江屋藤助昨年死去被致、当年二至名跡二被来候人在之候付、其節酒式升遣し候処、不縁二相成、又候此節余人親子連レ二而相続二被来候由二而、酒三升、鯛式把為祝儀被差越、右二付仲間方返礼挨拶二酒五升遣候事、
十月十日

一、前段薩州様御登り節松本浜へ御乗船被成、石山御参詣其上瓦ヶ濱江御立寄可被成御積之由、しかししかと致候義は不相知候へ共、石場浜へ御乗船二百艘方供ふねに差出し不申候もいかゞ敷、しかれども膳所之御用相勤候義も無之、膳所へ被仰付答出し候へハ、当御役所へ御届ケ申上、御馳走二差出し候心持、依之内々柴山様江御窺申上、当御役所御差図ヲ相待候様申上候所、勘弁いたし置可申候間、廿日頃伺二出候様被仰渡候、則書付御目二懸ケ上ケ置候、

十月十二日

但此節御懸り内堀様ハ御出役被成候、御留主中也、

覺

膳所御座舟為御馳走ト大津へ参り、諸家様御乗舟被遊并百艘ハ矢橋浦へ舟差遣し候覺書、左之通、

一、正徳五年末七月晦日、水口加藤和泉守様御入部二付御上京被成、御歸館之節為御馳走ト膳所御座舟参り、松本浜ハ矢橋迄御乗舟被遊、御供舟者不殘百艘へ被仰付、小舟十艘差出し、松本ハも小舟差出し申候、百艘へ鳥目壹貫文被下、又八月六日和泉守様御目録被下、則上坂丈右衛門様御渡し被下候事、

一、元禄五年八月四日、小笠原佐渡守様嶋ノ関より矢橋迄御乗舟被成、膳所御座舟参り、百艘ハ小舟十艘差出し、舟賃金子百足被下候事、
一、宝永六年丑十一月三日、京都御郡代中根摂津守様御下向二付、松本浦ハ矢橋迄御乗舟被成、百艘ハ舟七艘差出し申候、日和惡敷御乗舟者不被遊候御事、

但し松本浜ハ百艘舟二御乗舟之義者、右之外ニも度々御座候御事、

一、宝永七年寅三月廿四日、中根摂津守様御登り二付、百艘ハ矢橋迄御迎舟差遣し御乗舟被遊候、御目録被下候御事、

一、元禄五年七月十日、小野半之助様御登り之節、百艘ハ矢橋迄御迎舟差遣し御乗舟被遊、馬場村へ御上り被成候御事、
一、元文二年五月廿四日、鈴木小右衛門様御登り之節、百艘ハ矢橋迄御迎舟差遣し、御乗舟被遊候御事、
右之通ニ御座候、以上、

未十月

百艘

当月廿七日頃、当所御通り之由、柴山様御尊存候、

一、吾妻川さらへ土砂嶋関江捨不申、土井様御蔵、若州御蔵、右式ヶ所裏石垣外水中江持出し候付、十月十七日於御役所内堀様江、右之段口上ニ而御届申上候處、承届置候段被仰候、

右者行ハ埋出し候蔵所之御巧と存候、時節到来無扨事ニ御座候、右之砂之義、十八日ハ如例嶋ノ関ニ江持出し捨候、是ハ請負方之者江新規之場所江捨申間敷段被仰渡義哉と被存候、奥ニ又留書在之、十九日、玉屋十兵衛方江四廻り清吉遣し、又嶋ノ関ハ砂持出候間、捨所氣ヲ付被申候様申遣候、

前二留在之候薩州御隠居御歸り之節、御乗船之義御止メニ相成候由ニ而、十月十八日夜膳所船方ハ来り候書狀之写、

以手紙致啓上候、寒氣之時分弥御堅固被成御暮、珍重奉存候、然者先頃ハ薩州御隠居様御渡船之儀ニ付彼是御世話ニ罷成、且先日ハ御出も被下處、寒氣之時分御差急キ被成候付、御渡船之儀ハ御断ニ相成申候、此段御承知可被下候、御穴(突カ)合も被下候二付、右為御知迄如此御座候、以上、

十月十八日

田原喜右衛門

百艘船方

御役人中

右二付、十九日年寄七兵衛、喜右衛門殿方江参、御手紙之通御止メニ相成候へハ、御座船松本浜へ御廻し被成候義ハ無御座候哉、御通筋之場所故、御乗船ハ無之候而も御銚置被成候哉、右内々承ニ参候、勿論前夜木ノ下出火、手あやまり在之趣承、右見舞旁参候、

十月廿一日、御役所ハ左之御書付参り候二付、関舟屋治兵衛ハ千町、南郷両村へ相届ケさせ申候事、

大津

書付 御役所

滋賀郡

千町

南郷

右御書付壱通、治兵衛方へ廿一日九ツ時過、清吉ニ持せ遣候事、

十月十九日

前々留書在之候川浚二付、若州御藏、土井御藏、右裏ニ捨砂之義、右川浚請負之者共江、町方御役所を捨間敷旨被仰渡、一兩日相止ニ候処、若州御藏を被仰聞候者、去ル文化□合藏所普請二付、物置所ニ致度、此段及引合ニ相済在之候義、猶又藏所地上ケ等致度候付、土砂入用二付此度右場所へ土砂為人候処、今更御差止メ被仰聞候而、此方も外聞旁難差置、其旨京都へ伺申上候段被仰聞候二付、町代部屋方堀猪三郎殿を呼ニ参り、与次兵衛則御役所ニ為居合候而参り候処、右之振合ニ候へハ、去ル文化ハいつ之頃候哉、仲間ニ定メ而扣可在之ニ付、一寸書付差越くれ候様被申聞、則左之書付遣申候、

覚

一、文化三年十一月九日、舟方御役牧野様へ口上を以申上候迄ニ御座候、右二付堀氏藏所へ被参被歸候節、南保町ニ而与次兵衛出合候処、此間之砂之義、藏所を被申聞候者、先達而普請候節物置ニ致度、湖中ニ板かこひ致砂入置候、いつれ藏所地上ケ致候積二付、此度幸川浚二付砂かこひ置申候、砂悉く藏所へ引上ケ可申候付、中々埋候と申義働無之候間、板かこひ迄ハ為人せくれ候様御頼ニ付、明日を又土砂運ひ候間、此段承知可致段、乍途中被申聞候、普請相済候ハ、已前之通ニ相成候事、

一、文化三寅年留書ニ、口上を以申上候訳委細有之、其節板かこひ絵図等も有之候事、

一、土井様も此度格別ニ土砂を以埋り候二付、則若州懸合之節堀氏見分いたし候、是以不相済義ニ付、別段御懸合可有之由、右乍途中被申居候、

大津

書付 御役所

滋賀郡千町

庄屋

船年寄

右十月廿七日御渡ニ被成、仕立飛脚ヲ以差遣候様被仰付候二付、小舟入喜兵衛遣入、賃錢三百文先取ニいたし候、

一、三宅新右衛門様船方懸り御役被蒙仰二付、

十月廿八日金百足与次兵衛持参、御祝申上候、

但先御役牧の様ニハ南鐐一片ニ在之候へ共、此節松本一件入組も在之候付、如此為持申候、

十月廿七日

一、御配符書付、月出清左衛門江直ニ相渡し、受取書取置、

一、十月廿八日朝五ツ半時、宿場を便参り、京都御組御道ぜい廿人計八幡江御下り二付、矢橋迄御乗船被成度、船用意いたし候様申参り、早速小舟入江舟式艘申遣し、夫を肝煎勘三郎宿場迄御迎ニ参り候処、昼後御出、尤当地寺々□□請、御見分として左之御役人御下り二付、委細承り候所、当地御見分相済、松もとぢふく寺迄御見分ニ

而、石場を御乗船被成度、小舟入江御戻り被成候而ハ端日手間取候趣、夫故小舟入船式艘石場江相廻し、同所波留場両方江船付ケ置、ぢふく寺御見分相済、直様石場ニ而此方舟ニ御召被成、矢橋迄御出被成候、八幡、永原迄御見分御越し被成候、石場ニ而役方はりま屋長兵衛、油屋茂兵衛兩人、ぢふく寺御見分ニ付被罷出、波留場迄送り被参、此方肝煎勘三郎、清治郎兩人江も挨拶被致、何之無滞御乗船相済申候、当地寺々御見分一寸留置、八丁妙光寺、今然寺、寺町長寿寺、善通寺、京都福賢寺、松本ちふく寺

京都御役方

西尾甚右衛門様 山田文助様

前田泰二郎様 大塚新七様

外筆工式人、御供共十六、七人計

挟箱五ヶ

右之御人数、小舟入船式艘二相乗せ、矢橋迄御出、船江入候物、大和風呂、土ひん、火ばち二薄縁三拾敷、か子三人宛

薩州御隠居松平栄翁様有馬迄湯治相済御登り之節、小船入浜を御乗船之覚

十月十九日從御役所呼二来り、年寄与次兵衛罷出候処、柴山泰蔵様被仰聞候者、来廿一日薩州御隠居当所を御乗船ニ而、膳所瓦ケ濱迄御越被成候趣、則膳所役方大川佐左衛門と申者来り候付、御召船は從膳所御座参り候、供舟ハ百艘を凡十艘計差出し可申、夫二付明日治定致候へハ、其上品ニを船数の□□等之義、京都御旅宿迄承談ニ可参様ニも可被致哉、御乗船場所ハ扇屋関之積り候へ共、此節旱水并二余り御目先ニ而如何二候へハ、嶋ノ関或ハ小舟入ニ而も可然方見分いたし申来へく段被仰聞候事、

一、右二付御乗船場見繕候処、嶋ノ関者一向寄り不申、小船入可然二付、此段柴山様へ申上候、明日膳所を承二来り候筈二候へとも、其仲間を膳所へ通達いたし、御乗船場ハ小船入ニ相究候段、依之別段御役所を御沙汰無之趣、慥ニ申達候様被仰渡、与次兵衛、太郎兵衛、膳所船屋形田原喜右衛門殿方江罷越、右之趣申咄、尚又いつれ江成共御懸り之方江可参段申聞候処、則喜右衛門殿被申聞候者、私義も漸只今御乗船ニ相成候段承り、則各様方迄使を以申遣し、道ニ而行違二相成申候、被仰聞候通、此節諸事懸り役中村庄太夫と申候間、懇二可申達、尚又何角御せわ候段忝旨被申演候事、從大つ役所を御乗船場小舟入と申義、慥ニ御達可申上候段被申付候へハ、庄太夫様を御受候書付ニ而も、御越し可被下候様申入候処、慥ニ承届候間、相違無之ニ付、書付ニハ不及段被仰聞候、

一、御座船着勝手御覽可被成申談し、翌日右二付膳所を御座船壹艘、引船四艘、附船壹艘、×五艘は松本船被仰分申聞候、

此方を申答候者、何事も百日御目付之節之格合二候へハ、松本船ニ而も不苦候段申置候、

夜分引続喜右衛門殿被来、前段申上候附船之義ハ、松本船遣ひ候様申上候へ共、切角百艘を御馳走被下候事二候へハ、附舟ハ相止又候様わさく被申来候、

右之通候へ共、又跡々変り申候、

一、孫右衛門、七兵衛小船入を引取候刻、橋本町ニ而貝屋七兵衛ニ出会候処、七兵衛被申候者、明後日薩州様御乗船場は膳所蔵所を之積ニ而、今日從当御役所引取懸ケニ大川悦翁殿自宅江被立寄、其旨申究候二付、則柴山様江罷越候処、於船之義ニ者百艘江申談候様被仰聞候、如何可致哉之段被申聞候二付、其義二付只今与次兵衛、太郎兵衛膳所江罷越申候、此方共者小船入ニ治定致置候段申置候、

一、膳所へ帰り候而、右之段与次兵衛承候付、自然間違二而ハ大事二付、七兵衛同道二而貝七方へ罷越候處、於沢宅原田氏能興行在之、見物二参り被居留主中二付、呼二遣談合候處、藏所裏せまく御座船ハかなり二寄可申候へ共、猶船之分迎も成不申、中く乗場難出来、其上石垣外二懸出に致候ハねハ不相成、明日中二をろし取繕等出来兼候付、小船入二相究くれ候様、達而被相頼候、然る處へ、前段附舟之義二付膳所喜右衛門殿会所二被来居、幸之義二付又候間違無之様貝七宅江呼招、四人俱々申談し、弥小舟入浜二相究候事、

与次兵衛貝七江申候者、何故右舨のせかたき場所へ大造成義を申出し、無用之隙を費させ候哉と申候二付、右ハ今日大川氏出会之節、近来御藏所之裏石垣等取繕も出来、其上乍鹿抹御腰掛も在之候二付、風与口ヲすへらせ候、此義御免被下断被申候、

一、御乗船場懸出等人候而ハ、俄二手伝人足工面難出来、依之十九日夜鯖市郎兵衛方江廻り清吉遣し、廿日早朝手伝四人小舟入江向ケ可差越旨申遣候、

一、廿日、小船入掃除上下小船持加子、四廻り加子、小揚働之者惣出二而、柳屋清兵衛重々せわいたし候、

酒五升、とうふ五丁遣申候、

一、十九日、与次兵衛御役所へ引取候序、町代部屋江立寄申置候者、小船入之義百艘引受候之分は掃除為致候へ共、自然町方二かゝわり之義在之候ハ、平蔵町下組町内江可申談、万一故障在之候ハ、可申出段申置候、

但下組小船惣代甚兵衛義、則町内年寄二付、兼帯二而差支無之様せわ可被致段申付候而、無故相済申候、

一、廿日、小舟入会所江役人中不殘詰切、万端せわ申付候事、

一、廿日、從御役所呼二来り、柴山様御宅江与次兵衛罷出候所、薩州御

家中松平豊後守内六村貞次郎御供頭之由、右ハ明日之御乗船場御見分可被成二付、小船入迄案内可致候段、柴山様へ被仰渡、御役所へ御門吟助付添被来候、

一、右貞次郎様小船入浜御覽被成、随分可然御乗船場之由被仰聞、膳所へ御座船式艘、引船四艘、外二附舟舩共三艘、已上九艘参り可申積り二候間、百艘へ六艘計差出し可被申段、尚又是る直二膳所へ何角談し合二罷越可申二付、夕景並所於旅宿可及相談、案内いたし候ハ、乍太義罷出呉候様被仰聞、名前ハ□□二付小舟入船会所并二年寄与次兵衛名札差出し申候事、

一、右場所波留場二懸出し并白砂等引候様、柴山様へ被仰渡候處、懸出し二不及旨六村氏被仰渡、砂計引候事、

一、坂本新兵衛江申付、柳崎砂壹艘波當場先迄番所前へ布引二致、盛砂壹対、手桶拭、杓吊共、

一、七ツ時分、六村様御旅宿八町京町上ル東側駕籠屋与兵衛と申宿屋へ呼二参り申候、

一、同膳所喜右衛門殿小船入番所江被来、百艘へ差出し候供舟拾艘共、膳所之船印為建呉候様被相頼、併差支之義ならは建不申候而も不苦段被申聞二付、則答候者、膳所へ先江御頼ミによつて差出し候供舟之義ならは、いつれ共可申談候へ共、此度者支配役所へ被申付候船之義二候へハ、自己之御返答難致、一応相尋候上御返答可申段申入候處、御尤二存候、いつれ明日合印ハ持参可致候、御返事候次第可致段申被帰候、

一、右之段柴山様へ申上候處、当御役所へ御馳走二差出候船、先方之船印建候而ハ不相済、是非といわゝ此方も窺不申候而ハ差図も難致段被仰聞候付、左様御座候ハ、為建申間敷段申上候事、

一、扨右ノ八丁江与次兵衛、太郎兵衛罷出候處、六村様被仰聞候者、先

刻石場と申所二而膳所下役之者二出合承候へハ、膳所^ろ供ふね拾艘差出し、委船印建置候旨申之候二付、夫二而ハ当所^ろ御馳走二被差出候供ふねハいつれ二而候哉、不相分段被申聞候付、前段之訃咄申上候処、当所之船ヲ膳所江換住致候道理二而、甚不宜段立服被致二付、段々断申候当所之差出候船ハ合印なし二致在之候段申上、品よく相濟候、

一、右之段又柴山様へ申上置、又間違候而ハ氣之毒と存、直様与二兵衛膳所へ罷越、右之段申咄し、船印なし二双方無難二相濟申候、

但柴山様^ろ八十艘之内障子屋形式艘、板屋形壹艘、已上三艘取拵置候様被仰聞候へ共、六村氏達而断被申、船数之義仕立飛脚二而京都へ申被遣、甚面倒成様子二付、小舟入波留場東之方二供ふね四艘繫置、屋かた之分ハ番所西之方二寄せ置、扨乗舟候節六村氏へ申候者、仰通供ふね四艘用意いたし置候、是二御座候屋かた之分ハ、支配役所^ろ手当て申付候間、自然不足之節ハ御遣ひ被下様申上候処、念ノ入候段甚御機嫌よく、則右屋形之内壹艘六村氏乗船二而、瓦ケ濱迄勘三郎付添送り申候、

一、廿日夜、小船入会所泊り番、清次郎、廻り清吉、

一、八ツ打候ハ、御座船乗出し候様、喜右衛門殿被申居候付、小舟入会所も八ツ時心懸ケ、波止場江高張壹ツ、会所前二壹張、上之辻二壹張建置候、

一、廿日昼八ツ時、矢橋柏屋次郎兵衛被来、瓦ケ濱江御供舟差出候様膳所^ろ被仰付候、万一艘不足仕候ハ、船出しくれ候様被申候付、此方も今以しかといたし候事、船数相知しかたく、依之大船等迄手当いたし置候、万二湖中二おゐて混雜いたし候ハ、此方之船其まゝ二而遣し可申候、しかし年寄^{博方}御工面も可有之間、帰村之上年寄中被及相談、可然取計可被申候段ニ談致遣候、

其後書状来り、船数之義も相究二付、かり舟二不及段断申来候、大船壹艘 善左衛門

同壹艘 市兵衛 嶋之関ニかこひ置、

小船四艘 小舟入波止場東之方二繫置、

同屋形三艘 同船番所西之方二かこひ置、

尾花川江差加子十人申遣ス、前日、

右遣ひ候舟数ハ奥二記、

膳所^ろ

御座船壹艘 引船小船四艘松本舟

川御座壹艘 附船同三艘 々

大艀壹艘、小艀壹艘

合拾壹艘也、

廿一日、晴天二付夜八ツ時過^ろ、町役篠田牧太郎様

但舟方兼帶也、

舟方下北出雲平殿

小舟入会所江御出被成二付、船屋嘉兵衛方江下宿申付候、余り寒く候故、菓子少々、其外あまさけ出し申候、

薩州公御供頭六村貞次郎様

膳所 大川快翁様貝屋七兵衛付添来ル、

右小舟入会所二而暫御休足在之候、

御座舟来り候節、与次兵衛、太郎兵衛挨拶二参ル、

小舟入会所前二而御出迎、与次兵衛、太郎兵衛

乗船場迄道御案内として八丁御本陣迄、孫右衛門、勘三郎、麻上

下二而先御役方^ろ御差図二而、先供いたし候様被仰聞候、

尤前日六村氏^ろ御頼も在之、又柴山様^ろも被仰付候、

京町通る大工町、新町、濱通り東江、小舟入迄御機嫌よく御乗船被成、
瓦ケ濱迄送り候、

当所差出候船数之覺

瓦濱迄 上

同断 上

御供中 仁右衛門

長兵衛

新二郎

藤七 外二

九八

五兵衛 尾花川方

大吉

新兵衛 壱人

同屋形

上徳藏

瓦濱迄 下

源二郎

治右衛門

尾花川式人

松之助

千吉

傳四郎

矢橋迄

下長兵衛

石場沖迄

ちやりこ

直着

丸崎^ㇿ

惣吉、新七

仁兵衛

跡方御供被反候送り遣ス、

瓦濱迄

下

屋形

甚兵衛

信三郎、尾花河二人

右ハ六村貞次郎様御一方御乗船被成、勘三郎上下着儘ニ而瓦ケ濱迄
送り申候、乗せ方万端前日おせわ被致候御事故、御座船計瓦ケ濱江
着船いたし、供ふね初メ其外不残膳所いなり濱江着候而、城下寺院
在宿に下宿取しつらひ在之候、暫御休足ニ而無程矢橋浜江御渡り被
成候、九つ時分也、其夜石部宿御泊之由承ル、

一、廿三日朝、從御役所方御召ニ仍而、与治兵衛罷出候処、柴山様此間

中何角骨折、右二付薩州様方聊なから御目錄来り、年寄兩人江遣候
様と在之候間、於其方可然左略いたし候様被仰聞、則金貳百疋御渡
し被下候、尤申上候上へ相渡し候様被仰聞候、

翌日御宅江与次兵衛、太郎兵衛御礼ニ参り、外江御礼罷出候^者二付不

及段被仰渡候、但内堀様へハ七兵衛参ル、

屋形船之幕式張御役所方来り、壱張は仲間ノつかい申候、

一、たはこ盆十脚 泉福寺ニ而かり

是ハ供ふね、屋形ふねとも不残入 三百文遣ス、

一、百三十二文 手桶ノしやく式本、くわ吊^ㇿ壱本 富半兵衛^ㇿ

一、三百文 手桶貳つ 京町桶屋嘉吉

一、百四十八文 甘酒 糴屋忠助

一、百七十二文 そうり十二口也、

一、五十二文 そうし之節しよりんノ直し、

一、酒五升、豆腐十丁 是ハ当日次郎兵衛并働候もの共、加子共へ遣ス、

一、三百文 坂本新兵衛 白砂壱艘、昼方式人乗

一、貳貫文 尾花川加子十人分

一、貳百文 西会所 々留主番

一、五百文宛 宿其外せわ 小舟入船屋嘉兵衛、々吉兵衛、兩人へ心付

一、百文 心付 々

×六百文遣ス、

一、貳百六十四文、畳屋小兵衛 薄縁十六枚損料

但六十枚手当ニかり置候へ共

内十八枚遣ひ申候、

一、上下加子ちん

一、地船押手共少しつゝ心付

一、百文 同人

是ハ膳所馬船大艀二御乗船之節、薄縁式枚かし候処、長々留メ置もとし不申、喜右衛門殿方へ申遣候処晦日二矢橋をかえし申候、不埒之事也、

↓

一、壹貫八百十二文 舟屋嘉兵衛兩日雜用酒代

一、四百文 寒く候故朝吉兵衛方二而焚火二あたり候わり木代加子共右之外格別入用ものなし、少し之物ハ西会所二而買もの等^{在之}、

右薩州様は当御代官様御由縁も在之候付、格別之取計方被仰渡候膳所方御役所江書状来り、百艘方挨拶等いたし可然段差図致くれ候様申参り候へ共、当所方御馳走二被仰付候義故其義二不及、しかし御心済いたし不申候ハ、目錄二而も被遣可然哉之段、柴山様方被仰遣候由二承候へとも、膳所方聊到来物なし、然る処、十一月五日夕、与次兵衛宅江左之書状二酒五升入壹樽、但諸白壹本差之男持参いたし候、

以手紙致啓上候、向寒之節弥御堅固被成御暮、珍重奉存候、然ハ先般松^平本榮翁様御渡船之砌者、船場等段々御世話二相成忝奉存候、殊更瓦ケ濱迄も御越被成候趣、具重役共江申達候義二御座候、右二付輕少之至二御座候得共、御酒一樽致進上し候、誠ニ御挨拶之印迄ニ御座候、御笑納可被下候、御一統江も猶宜御申伝可被下候、右之段可得御意如此御座候、以上、

十一月五日

田原喜右衛門

百艘與次兵衛様

太郎兵衛様

十一月七日、御役所へ孫右衛門罷出三宅様へ右之趣申上候処、則御過日柴山様へ其段被仰達候処、御役所へ申出候義ハ内分二いたし、仲間方心得を以受置候様、尚又膳所へ受礼申遣候様被仰聞候二付、

八日孫右衛門膳所田原喜右衛門殿迄挨拶二参候、留主故申置、

一、十一月五日、石原様御次男御元服被成候付、文化卯之例二任せ金貳百足、御玄関江罷出候、

与次兵衛

孫右衛門

但九つ時過候事故内玄関へ罷出、船方懸り三宅様へ以取次申上候へ共、未御出勤無之、頓而御出被成候趣、小遣イ衆被申之暫相待候へ共、余り延刻二相成、御門吟助殿へ申込候所、未出勤無之候ハ、御玄関江申上可然段被申之、奥之義ハ可然申上置候様被申答候故、右之通表向御玄関へ罷出申上候事、

一、同十一日、右為御祝御勝手方畑祖六様以御回状御出入方江赤飯壹重宛被下候、爰元江も式重被下候二付、当役人中江為配候事、御使二稲葉半七殿被来候ため、鳥目廿足紙箱入、

一、右畑祖六様方御回状来候付、十二日与次兵衛、孫右衛門、羽織袴二而内御玄関二而祖六様へ御礼申上候処、御帳前へハ出ル二不及段被仰聞候、依之不出、

以手紙得御意候、向寒之節弥御堅固被成御入、珍重奉存候、然者膳所船奉行今般永田郷右衛門へ被申付候儀二御座候、此段乍序為御知迄、如此御座候、以上、

十一月八日

田原喜右衛門

百艘御年寄中

右二付

十二日与次兵衛、太郎兵衛、膳所永田郷右衛門様方江諸白三升切手

二而持参いたし、初而得御意、右御役儀被蒙候段恐悦申上候処、念
二入候段被仰聞御挨拶在之、引かせ候事、但船屋形田原喜右衛門殿
方江向参り、居所承候処、右喜右衛門殿同道二而案内被致、則引付
被申候、

一、十一月十五日、御役所へ呼二参り年寄孫右衛門罷出候処、船方御掛
り三宅様被仰聞候ハ、津内堀々関々町所書付致候而差出候様被仰渡
候二付、左之通相認メ差上候事、

覚

一、尾花川町間 熊ノ川堀
観音寺町

一、北保町間 今堀
中保町

一、中保町間 川口堀
川口町

一、蔵橋町 金蔵堀
御蔵町

一、湊町 扇屋ノ関
坂本町 風呂屋ノ関

一、同町 玄正ヶ関

一、塩屋町 永原ノ関

一、米屋町間 紺屋ノ関
南保町

一、上片田町 馬場殿ノ関
下片田町 利玄ノ関

一、平蔵町 嶋ノ関

一、同町 小船入堀

一、同町 猿ヶ関

一、肥前町 鴨ヶ関

右之通御座候、

文化八年

百艘

未十一月十五日

右書付相認メ船方御掛り三宅様へ差上置候事、

一、堅田浮御堂勸化又候相頼来り候付、相談之上鳥目三百文遣し候、扇
子二本入壺包来り候へ共、是ハ戻し申候、重而申来候共、度々之義
ならば勘弁可致事、
十一月十九日

当所寒氣御窺

石庄三郎様 例年之通真鴨吉掛

白木台下ヶ札付

元々

柴山泰蔵様

内堀繁太様

町方

曾根源次郎様

篠田牧太郎様

船方

三宅新右衛門様

右五廉^(三)南鐐吉片

小かしら

多賀喜曾太様

々目付兼帶

川嶋惣右衛門様

目付

手塚傳十郎様

々

柿沼小平太様

右四廉銀壹兩宛

北出雲平殿手札計

右之外御門内御手代衆、組屋鋪新建不殘、手札二而相伺候、

十一月廿三日与次兵衛、太郎兵衛、供清吉

前廿二日夜

子ノ刻入

京都寒氣御窺

東御奉行

小長谷和泉守様

鴨壹掛 二重くり台
下ケ札

御用人

小林八左衛門様

御取次

山田嘉藤治様

赤間三郎右衛門様

吉川吉助様

岡田長兵衛様

飯塚五郎作様

迎田栄左衛門様

右七軒江手札計

御公事方

山田釵治郎様

櫛橋平藏様

石橋五三郎様

中川定右衛門様

塩津惣五郎様

喜多尾八郎右衛門様

加納万五郎様

×四人南鐐壹片宛

平尾演右衛門様

中尾勇右衛門様

末吉新五郎様

森孫六様

吉竹勝左衛門様

田村此右衛門様

×九人此分手札計

西御奉行

三橋飛驒守様

鴨壹掛

二重くり台
下ケ札

御用人

武藤貫三様

辻本仁左衛門様

松本雄太夫様

右六軒江手札計

御公事方

深谷平左衛門様

下

上田八藏様

不破伊左衛門様

柏原次部右衛門様

本多新左衛門様

廣瀬佐之右衛門様

飯室助左衛門様

酒井惣助様

下田耕左衛門様

山田傳左衛門様

×五軒江南鐐壹片宛

浅賀和作様

畔柳三右衛門様

町代

×七軒江手札計

田内与助殿銀三匁

若狭屋八兵衛殿ま紅鴨壹羽

右十一月廿三日孫右衛門、勘三郎兩人相勤ル、供新助

覚

一、御納豆 五拾把

右者從御前様例年之通被下置、難有頂戴仕候、已上、

未十二月朔日 百艘印

觀音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

一、金子百疋

右者從当津御家中様并御人足衆渡海為御挨拶、從御前被下置慥頂戴仕候、已上、

未十二月朔日 百艘印

松岡市左衛門様

覚

一、分持 壹荷 此人足壹人

右者御普請所為再見分、御勘定方御普請役被相越候、右二付御用之儀有之、我等儀明七日大津出立、石部宿迄相越候間、書面人足御定賃錢請取之、無滯差出可給候、以上、石原庄三郎手代

未十二月六日

清水善之助印

岡田大八印

百艘、矢橋、草津、石部、右宿々問屋中
年寄

追而上下四人罷越、於石部宿致止宿候之条、宿手当致置可給候、此書付我等宿之上可被相返候、以上、

一、十二月七日七ツ時、大溝藏方大豆四俵源右衛門ふね二積入候段、以

書付使來り候二付、右大豆之義式三俵迄は乗前なし二積下し候へ共、

四俵と御座候へハ、乗前銀御差出し被下候様、右藏所江廻り新八を以直様申遣候処、常詰役之者此節在所へ参留主中之事候へハ、四五日之内歸り可申聞其段申聞、此方返事いたし候段被申聞事、

一、八日朝、右藏所方使來り、昨日積入候大豆之内壹俵船宿へ揚置候、三俵二いたし積下し候段、則大豆三俵之斷書付持参被致、昨日之四俵之書付取かへくれ候様申聞候付、六兵衛、八郎兵衛請合、昨日申懸ケ在之候義候間、後日御返答申上候様申、使かえし候、

一、右二付八日朝与次兵衛藏所江罷越、津田丈右衛門殿と申仁二逢候而前段之趣及対談二候処、丈右衛門被申候者、昨日之四俵積入候義者、折節不案内者詰合取計候義二付、則壹俵揚させ申候、此度も十三俵買入連々二積下し、勿論是迄も右躰之義在之候旨、与次兵衛答候者、全躰御心得方相違御座候、たとへ三俵たり共無程壹俵出候ハ、都合四俵二被成御積下しも被下度義、忽四俵積入候物を壹俵上候歟之段、御藏所之御取計方二者似合不申、左様之御心得二而者、聊乗前御差出し無之御仕方二付、既先九月井戸堀鉄物へ乗前も御差出し被下候へと、以堀氏申入置候へ共、未御沙汰も無之、又当朔日大豆三俵つツ、三艘二積入れ候、此義三俵二限候物ならは格別、九俵御座候を同日二三艘へわけ被積候段不相濟、たとへは昨日三俵つミ歸り、又今日三俵つミ歸候と申義ハ、同じ事ながら可申義も御座なく候へ共、同日二九俵積入候義ハ、向後不相成候段申聞候処、丈右衛門被申候者、井戸鉄物之義ハ大溝へ堀氏方直引合之事故、此方は不存候大豆之義ハ大溝へ申遣し、跡方返答可致段被申候付、此度四俵之乗前ハ御遣し可被成候段申歸り候、

覚

覚

大豆三俵与右衛門船

一、大豆三俵

同三俵惣三郎船 十二月朔日 舟茂平次藏所印

✕ 未十二月朔日 大溝蔵印

覚

覚

一、たんす壱本

一、大豆四俵

十二月朔日 舟清兵衛

十二月七日 蔵所印

✕ 船源右衛門

✕ 印

右之通時々書付来り申候、堀氏へ見せ候ハ此書付也、

右之引合次之通、

一、十二月八日、岡本弥一郎様を呼二来り、与次兵衛罷越候処、先月舟木詰番之節大溝着船いたし候処、加子平六、清八、与惣、右之者之内此方手箱水中江取落し、其節彼是鑿^う穿いたし候処、書物類ぬれ届ケ物之内ニ金子入候品も在之、外之物ハ大駄取持候へ共、已上金三步計と右文函ふた失候而見へ不申候、右加子共其節も断申聞候へ共、跡を取調可申段申置、此節迄一兩度計断来り候へ共、跡々取締も可有之義二付、一応及沙汰可申段被申聞候二付、与次兵衛答候者委細承知いたし候、此度不調法之段は御用捨被成遣被下度、跡之義ハ急度申付置候様申歸候、

一、九日夕方、大溝蔵船積之義二付、与次兵衛堀猪三郎殿宅江参り候処、幸之所江御越被下候、此方を参上可申与存居候処、扨如何之御用御座候哉と被申聞候二付、与二兵衛前断之始末申咄候得ハ、就其義二今日御役所江詰所江丈右衛門を差越、則引取候砌蔵所江立寄候処、丈右衛門申候者、今日大豆舟積之義二付百艘方を被申来、四俵積入候者全拙者不念二付、此義大溝蔵江申遣候而ハ其品二を役前二も抱甚迷惑仕候間、已来右跡不取計無之様可仕間、何分百艘方江断申入

呉候様実々相頼候間、則右源太郎舟出船差留メ置候間、此度之義ハ

(源右衛門方)

以勘弁為相済遣呉候様、尤四俵之内壹俵のこし可申間、此段承知いたし呉度旨、段々被申聞候二付、与二郎、善兵衛何とも迷惑成御挨拶二御座候へ共、訳而被仰聞候義二付、無抛如何様共可仕候、全駄右丈右衛門殿心得候処不相済、一たん四俵積入候而、乗前二かゝわり壹俵揚候杯と申義、蔵所之取計二似合不申、已前も聊之荷物ヲ引請、其節ハ首尾二相成、開門被致候義も在之、旁百艘へ聊も乗前と申候而ハ差出し不申心得之段、何共不宜義二而御座候へハ、已来急度相心得可申候様、且又引続右丈右衛門殿子息も被相詰候義候間、見習ひ被申ず様被仰聞被下度、其外様々申咄二付、尤御事御座候、何事も已来之義急度申聞□可申段被申、源太郎船ハ三俵船積致候而出帆可致段、右堀氏を被申通候事、

右二付届書等も甚龜抹之取計二付、猪三郎殿迄別段四艘之書付内見二遣候、尤見くらべ心得之ため、敦賀蔵を分持壹荷舟木へ積下被申候断書、猪三郎殿迄見せ置候^事□

一、此節上役之衆蔵所江被登居候義二付、猪三郎殿及引合、新規之品ハ乗前差出し、用捨ものハ夫々相分ケ候様被申居候二付、可然取計被呉候様相頼置候、

但右端書之義ハ、堀氏為心得見せくれ候様被申二付遣入、

手紙之写

以手紙得貴意候、益御壮健被成御座珍重奉存候、夜前ハ参上仕緩々被得御意、殊二種々御馳走被仰付、御懇情之段千万忝奉存候、大溝御蔵船積之義二付、何角御世話之段忝、仲間一同宜御礼申上度候様申居り候、尚此上宜御頼奉申上候、其節被仰聞候右御蔵所端書四枚外二敦賀蔵断書壹枚、乍内々御目二懸ケ申候、御披見之上御戻し可被下候、尚万々拝顔可奉申上候、恐々謹言、

十二月九日

永原屋与次兵衛

堀猪三郎様

一、十二月十四日、吾妻川浚出来御見分与して、御町役曾根源次郎様御組安井角兵衛様、宿場年寄弥惣兵衛付添右御越二付、右場所へ年寄太郎兵衛罷出候処、無滞御見分相済候上、嶋ノ関会所二而御休被成候二付、茶、たばこ盆、火鉢等差出し置候事、

一、米壹俵

右ハ石山寺の例年之通参り候、

未十二月十六日 高嶋屋嘉兵衛売□る也、

一、片田宿三右衛門母死去被致候二付、為香典南鐙壹片、添状遣入、但霜月頃之事候へ共、十二月二遣入、

一、北之町組四廻りと八、此節養子致跡役為相勤申度旨、右組の披露在之、為見習十二月十八日の出勤いたし、酒貳升、鯛壹枚、蠣^{カキ}三かこ差出候二付、同日寄合二遣ひ候、
右跡引続跡勤之者近年無之、格別之義二付、為祝儀中間の金貳百足遣候事、

十二月廿一日

一、小鳥五羽 勢田橋本年寄作右衛門殿
右持参被致候二付受置之、

覚

一、金貳百足

右者当未年為御挨拶被下置、慥二頂戴仕候、以上、

文化八年未十二月廿五日 百艘印

膳所御役人中様

右ハ十二月廿五日、膳所船奉行永田郷右衛門様御使、奥村奎兵衛殿御持参二付、右受取書相渡入、

前段十月薩州様矢橋御渡船之節、小船等遣ひ候処、平生冥加二存、小船入上下両組共、十二月跡算用之節役船小船賃二書出し不申候、神妙之事二付、右跡算用之節為心付、別段鳥目壹貫五百文遣候、則今日手形帳二受取書、印形取置候事、

覚

一、金子百足

右者朽木様の例之通被下置、慥二受取申候、以上、

文化九年 百艘年寄

申二月

御用達

升屋市左衛門殿

右ハ申ノ二月二日、升市の受取候二付、斯之通受取書遣し候事、

覚

一、炭貳俵

右者朽木様の例年之通被下置、慥受取申候、以上、

文化九年 百艘印

申三月

御用達

升屋市左衛門殿

右者申三月八日、升市方を参り候二付、此之受取遣し候事、

(裏表紙)

八拾六番

百艘

「大津百艘船万留帳」全体目録

番号	年号	番附	原本	抜書帳	収録
1	(延宝九年～天和三年)	番附外	○	—	1
2	(元禄二年～享保十六年)	八番	○	×	
3	安永三年(断簡)	不明	△	×	
4	天明四年(断簡)	五十九番	△	×	
5	寛政八年	七十一番	○	×	
6	寛政九年	七十二番	○	×	2
7	寛政十年	七十三番	○	×	
8	寛政十一年	七十四番	○	×	
9	寛政十二年	七十五番	○	×	
10	寛政十三年	七十六番	○	×	3
11	享和二年	七十七番	○	×	
12	享和三年	七十八番	○	×	
13	享和四年	七十九番	○	×	
14	文化二年	八十番	○	×	4
15	文化三年	八十一番	○	×	
16	文化四年	八十二番	○	×	
17	文化五年	八十三番	○	×	
18	文化六年	八十四番	○	×	5
19	文化七年	八十五番	○	×	
20	文化八年	八十六番	○	×	
21	文化九年	八十七番	○	×	
22	文化十年	八十八番	○	○	
23	文化十一年	八十九番	○	○	
24	文化十二年	九十番	○	○	
25	文化十三年	九十一番	○	○	
26	文化十四年	九十二番	○	○	
27	文化十五年	九十三番	○	○	
28	文政二年	九十四番	○	○	
29	文政三年	九十五番	○	○	
30	文政四年	九十六番	○	○	
31	文政五年	九十七番	○	○	
32	文政六年	九十八番	○	○	
33	文政七年	九十九番	○	○	
34	文政八年	百番	○	○	
35	文政九年	百一番	○	○	

番号	年号	番附	原本	抜書帳	収録
36	文政十年	百二番	○	○	
37	文政十一年	百三番	○	○	
38	文政十二年	百四番	○	○	
39	文政十三年	百五番	○	○	
40	天保二年	百六番	○	○	
41	天保三年	百七番	○	○	
42	天保四年	百八番	○	○	
43	天保五年	百九番	○	○	
44	天保六年	百十番	○	○	
45	天保七年	百十一番	○	○	
46	天保八年	百十二番	○	○	
47	天保九年	百十三番	○	○	
48	天保十年	百十四番	○	○	
49	天保十一年	百十五番	○	○	
50	天保十二年	百十六番	○	○	
51	天保十三年	百十七番	○	○	
52	天保十四年	百十八番	○	○	
53	天保十五年	百十九番	○	○	
54	弘化二年	百二十番	○	○	
55	弘化三年	百二十一番	○	○	
56	弘化四年	百二十二番	○	○	
57	弘化五年	百二十三番	○	○	
58	嘉永二年	百二十四番	○	○	
59	嘉永三年	百二十五番	○	○	
60	嘉永四年	百二十六番	○	○	
61	嘉永五年	百二十七番	○	○	
62	嘉永六年	百二十八番	○	○	
63	嘉永七年	百二十九番	×	○	
64	安政二年	百三十番	×	○	
65	安政三年	百三十一番	×	○	
66	安政四年	百三十二番	×	○	
67	安政五年	百三十三番	×	○	
68	安政六年	百三十四番	×	○	
69	安政七年 万延元年	百三十五番	×	○	

※「原本」の○は原本が残っているもの

「抜書帳」の○は「留帳目録抜書帳」に記載のあるもの

〔天津古文書輪読会会員〕（順不同）

秋山恭伸 麻田有代 片岡良昭

鍬田清美 高正昭 谷玲子

橋本豊 林俊介 樋口晶美

福野修三 藤村正人 河野敏子

大村知永子 小浜麻里子 才田是

井上知枝

大津市歴史博物館調査報告書9

大津百艘船万留帳 5

編集・発行

大津市歴史博物館

〒520-0037

滋賀県大津市御陵町二番二号

電話 〇七七―五二一―二二〇〇

発行日

令和七年（二〇二五）三月三十一日

印刷

有限会社 竹田膳写堂